安威城跡Ⅲ

-主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う発掘調査-

平成 27 年 3 月

大阪府教育委員会

安威城跡Ⅲ

-主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う発掘調査-

平成 27 年 3 月

大阪府教育委員会

序文

茨木市に所在する安威城跡は、北摂山地を縫うように流れる安威川が、山間部を抜けて淀川右岸の三島平野部へ流入する、段丘から扇状地にかけて立地する遺跡です。当遺跡は北摂を越えて亀岡方面に行く街道筋沿いにあたり、また南部には西国街道が東西に走る、古くからの交通の要所といえる場所です。

本遺跡周辺には宮内庁により継体天皇陵に治定されている太田茶臼山古墳をはじめ、国指定史跡では、6世紀の大王墓と考えられている今城塚古墳や新池埴輪製作工房跡、藤原鎌足の墓との説もある阿武山古墳、府指定史跡では耳原古墳など、ほかにも数多くの古墳や遺跡が所在します。また歴史的建造物や石造物など多くの文化財が現在でも残されており、文化財に恵まれた地域ということができます。

今回報告する安威城跡の調査成果は、安威川ダムの建設事業に伴う主要地方道茨木亀岡線道路整備事業に際して、平成23~25年度に実施したものです。調査の結果、中世の溝や古墳時代の屋外炉、土坑などの遺構、そして遺物が発見されました。特に古墳時代の調査成果については、本遺跡周辺の古墳や、南に位置する安威遺跡における過去の調査成果と合わせて、安威川流域における古墳時代社会の解明にとって重要な成果となり、地域の歴史にとって貴重な資料ということができます。

主要地方道茨木亀岡線整備事業に伴う発掘調査は、今回の調査をもって完了の運びとなりました。これまでの調査成果については、すでに報告書を刊行しているところですが、本書と合わせて参照いただき、資料の積極的な普及、活用に供することができれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました関係各位ならびに地元の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成 27 年 3 月

大阪府教育委員会事務局 文化財保護課長 荒井大作

例 言

- 1. 本書は、主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴い平成23年度~平成25年度に実施した茨木市安 威二丁目所在、安威城跡(調査番号11067、12039、13010)の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会事務局が実施した。
- 3. 現地調査は、平成23年度に調査第一グループ副主査 横田 明、平成24年度に同グループ 副主査 三好 玄、平成25年度に同グループ主査 岡田 賢・専門員 阿部幸一を担当者として実施した。
- 4. 整理作業は平成 24 ~ 26 年度に、調査管理グループ主査 三宅正浩 (平成 24・25 年度)、同小浜成 (平成 26 年度)、副主査 藤田道子を担当者として実施した。
- 5. 平成 25 年度については写真測量および土壌分析を実施した。写真測量は株式会社エムズに委託し、 撮影フィルムは同社において保管している。土壌分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、そ の分析結果を第7章に掲載している。
- 6. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、各調査担当者がおこない、遺物写真は有限会社阿南写真工房に 委託した。
- 7. 出土遺物と記録資料は、大阪府教育委員会事務局で保管している。
- 8. 本書の執筆は第5章、第8章第2節を三好、第7章はパリノ・サーヴェイ株式会社、それ以外については岡田が行った。また編集は岡田が行った。
- 9. 発掘調査、遺物整理および本書作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
- 10. 現地調査、遺物整理および本書の作成にあたっては、下記の機関および個人からご協力、ご指導を賜った。記して感謝いたします(敬称略・五十音順)。

安威二丁目自治会、茨木市教育委員会、大阪府安威川ダム建設事務所

黒須靖之、寒川旭、関 梓、富田卓見、橋本久和、藤田徹也、別所秀高、森村健一

11. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は1,069円である。

凡例

- 1. 本書における層序は、大別層位についてはローマ数字を使用し、第○層と標記し、各調査区における細別層位については「第」を省きアラビア数字およびアルファベットで表記する。また細別層位は必要に応じて調査年次を冠して表記している(例: H25-10a層)。
- 2. 土色および遺物観察表中の色調については、『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 2002 年度版) に準拠した。
- 3. 遺構名は、三桁の通し番号と遺構種別名の組み合わせによって表記する。通し番号は調査年度ごとに検出順に付したものであり、遺構種別、時期ごとにまとまっていない。
- 4. 本書における遺物番号は1からの通し番号を付している。
- 5. 本書で用いる座標値は世界測地系に基づき、必要に応じて日本測地系を括弧書きとした。水準値は、 T.P. 値(東京湾平均海面値)を用い、本文および挿図中ではT.P.+○mと表記する。
- 6. 図示した土器実測図の断面は、須恵器を黒塗りとし、その他の陶磁器、土師器、鉄製品、石製品を 白抜きとした。
- 7. 脚注は各章末に記し、引用・参考文献は本文末に記した。

本文目次

序文

例言	
凡例	
第1章 調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1	
第1節 調査にいたる経過と既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・1	
第2節 発掘作業の方法および整理等作業の経過・・・・・・・・・・・・・・4	
第2章 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・5	
第1節 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5	
第2節 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5	
第3章 基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11	
第4章 平成23年度調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・15	
第1節 層序および遺構の分布・・・・・・・・・・・・・・・・15	
第2節 中世および古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・16	
第 5 章 平成 24 年度調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25	
第1節 層序および遺構の分布・・・・・・・・・・・・・・・・25	
第2節 中近世以降の遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・29	
第3節 古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・29	
第6章 平成25年度調査区・・・・・・・・・・・・・・・ 37	

第1節 層序および遺構の分布・・・・・・・・・・・・・・・37

第2節 中近世以降の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41 第3節 中世の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41 第4節 古墳時代の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

第5節 包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

第7章 安威城跡における土壌分析・・・・・・・・・・・・・・・ 56 第1節 試料と分析方法・・・・・・・・・・・・・・・ 56

第2節	結果と考	察••	• •	• •	•	• •	•	•	• •	•	•	• •	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	٠	56
第8章 絲	総 括・・				•		•				•		•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	62
第1節	調査成果	につい	て・		•		•	•		•	•		•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	62
第2節	火処遺構	につい	て・		•		•	•		•	•	• •	•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	64
第3節	安威城跡	・安威	遺跡	にお	らけ.	るさ	「墳	時代	弋集	落	にく	ンレソ	て	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	66
第4節	安威城跡	古墳時	代居	住域	(O)	歷史	已的	評信	⊞•	•	•		•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	68
引用・参ね	考文献・・				•		•	•		•	•		•	•		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	73
出土遺物智	現察表・・				•								•	•			•		•	•	•	•	•	•	•	74

原色図版目次

原色図版 1 調査区断面および地震断層痕跡(平成 原色図版 2 古墳時代の遺構(平成 24 年度調査区) 24 年度調査区)

図版目次

図版 1	平成23年度調査区(1)	古墳時代の遺構	図版 17	平成25年度調査区(8)古墳時代の遺構等
図版 2	平成23年度調査区(2)	古墳時代の遺構	図版 18	平成25年度調査区(9)古墳時代の遺構等
図版 3	平成24年度調査区(1)	中近世以降の遺構	図版 19	平成 25 年度調査区(10)下層の調査
図版 4	平成24年度調査区(2)	古墳時代の遺構等	図版 20	平成23年度調査区出土遺物(1)
図版 5	平成24年度調査区(3)	古墳時代の遺構等	図版 21	平成23年度調査区出土遺物(2)
図版 6	平成24年度調査区(4)	古墳時代の遺構等	図版 22	平成23年度調査区出土遺物(3)
図版 7	平成24年度調査区(5)	古墳時代の遺構等	図版 23	平成24年度調査区出土遺物(1)
図版 8	平成24年度調査区(6)	下層の調査	図版 24	平成24年度調査区出土遺物(2)
図版 9	平成24年度調査区(7)	下層の調査	図版 25	平成24年度調査区出土遺物(3)
図版 10	平成25年度調査区(1)	中近世〜近代の遺構	図版 26	平成 25 年度調査区出土遺物 (1)
図版 11	平成25年度調査区(2)	中近世〜近代の遺構	図版 27	平成25年度調査区出土遺物(2)
図版 12	平成25年度調査区(3)	中世の遺構	図版 28	平成25年度調査区出土遺物(3)
図版 13	平成25年度調査区(4)	古墳時代の遺構等	図版 29	平成25年度調査区出土遺物(4)
図版 14	平成25年度調査区(5)	古墳時代の遺構等	図版 30	平成25年度調査区出土遺物(5)
図版 15	平成25年度調査区(6)	古墳時代の遺構等	図版 31	平成 25 年度調査区出土遺物 (6)
図版 16	平成25年度調査区(7)	古墳時代の遺構等		

挿 図 目 次

図 1	安威城跡・安威遺跡における既往の調査地点	図 14	007 土坑平・断面図・・・・・・・19
		図 15	007 土坑出土遺物実測図・・・・・・20
図 2	平成 $23\sim25$ 年度調査区位置図・・・・・4	図 16	001 焼土塊・落ち込み出土遺物実測図・・・20
図3	茨木市域の地質・・・・・・・5	図 17	第1面下位検出遺構平面図・・・・・・21
図 4	茨木市域における段丘の分布・・・・・・6	図 18	$008 \sim 021$ ピット平・断面図・・・・・22
図 5	周辺遺跡分布図・・・・・・・・・7	図 19	022 掘立柱建物平・断面図・・・・・・23
図 6	基本層序 (1)・・・・・・・・12	図 20	各ピット出土遺物実測図・・・・・・24
図 7	基本層序 (2) ・・・・・・・ $13 \sim 14$	図 21	包含層出土遺物実測図・・・・・・ 24
図8	平成 23 年度調査区断面図・・・・・・ 15	図 22	平成 24 年度調査区断面図 (1)・・・・26
図 9	第1面遺構平面図・・・・・・・・16	図 23	平成 24 年度調査区断面図 (2)・・・・27
図 10	006 溝出土遺物実測図・・・・・・・17	図 24	第1面遺構平面図・・・・・・・28
図 11	002 竪穴状遺構平・断面図・・・・・ 17	図 25	第2面遺構平面図・・・・・・・・30
図 12	002 竪穴状遺構竃平・断面図・・・・・18	図 26	006 落ち込み平・断面図・・・・・・31
図 13	002 竪穴状遺構出土遺物実測図・・・・・18	図 27	007 竃平・断面図・・・・・・・32

図 28	遺構出土遺物実測凶・・・・・・・・・・	• 34		図 47	土坑出土遺物美測凶・・・・・・・50
図 29	包含層等出土遺物実測図・・・・・・	• 35		図 48	011 落ち込み平・断面図・・・・・・ 51
図 30	第IV層出土遺物実測図・・・・・・・・	• 35		図 49	011 落ち込み出土遺物実測図・・・・・52
図 31	平成25年度調査区断面図(1)・・・・	• 37		図 50	包含層出土遺物実測図(1)・・・・・53
図 32	平成25年度調査区断面図(2)・・・・	• 38		図 51	包含層出土遺物実測図(2)・・・・・54
図 33	平成25年度調査区断面図(3)・・・39	~ 40		図 52	包含層出土遺物実測図(3)・・・・・55
図 34	第1面遺構平面図・・・・・・・・・	• 41		図 53	分析試料の採取状況・・・・・・・56
図 35	第2面遺構平面図・・・・・・・・・・	• 42		図 54	土壌薄片画像・・・・・・・・57
図 36	第2面検出ピット平・断面図・・・・	• 43		図 55	土壌薄片画像部分(1)・・・・・・58
図 37	013 落ち込み断面図・・・・・・・	• 44		図 56	土壌薄片画像部分(2)・・・・・・60
図 38	013 落ち込み出土遺物実測図・・・・・	• 44		図 57	遺跡周辺の地形分類図・・・・・・61
図 39	第3面遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 45		図 58	平成 23 ~ 25 年度調査区遺構平面図・・・・63
図 40	015 土坑・016 土坑平・断面図・・・・・	• 46		図 59	平成 19 年度調査区検出火処遺構・・・・・65
図 41	016 土坑中層出土遺物実測図・・・・・	• 47		図 60	安威城跡・安威遺跡における古墳時代遺構の変
図 42	016 土坑出土鉄製品実測図・・・・・・	• 48			遷・・・・・・・・・・・67
図 43	016 土坑上層~中層出土遺物実測図・ ・	• 48		図 61	安威城跡周辺の古墳時代集落と古墳の分布
図 44	014 土坑平・断面図・・・・・・・・	• 49			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •
図 45	017 土坑平・断面図・・・・・・・	• 49		図 62	安威川流域における古墳時代後期~終末期集落
図 46	018 土坑平・断面図・・・・・・・	• 50			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •
		表	目	次	
表 1	安威城跡・安威遺跡における既往の調査・	• 2		表 2	安威城跡周辺の主な古墳時代集落・古墳の様相

付表目次

出土遺物観察表 (1) \sim (7)・・・・・74 \sim 80

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経過と既往の調査

(1)調査の経緯および大阪府教育委員会による既往の発掘調査(表1・図1)

安威城跡は茨木市安威二丁目に所在する。かねてより段丘上の安威小学校東側の東西 200m、南北 300m 程度の範囲が中世城郭跡として周知の埋蔵文化財包蔵地とされていたところ、この城郭跡の東方を南北に走る主要地方道茨木亀岡線の整備事業が、安威川ダム建設事業とともに進められた。安威遺跡に隣接していた国道 171 号線から南安威二丁目にかけては、大阪府土木部(当時)と協議の上、平成 8 年度に試掘調査を行い、その結果古墳時代の包含層が確認されたことから、安威遺跡の範囲拡大を行い、平成 9 年度に発掘調査を実施した。また平成 10 年度にも試掘調査および発掘調査を実施した。この 2 ヶ年度の調査により、古墳時代中期から後期にかけての集落跡が発見されている(大阪府教育委員会 2000)。また安威一丁目以北の周知の埋蔵文化財包蔵外についても、平成 15 年度に大阪府教育委員会が試掘調査を実施し、古墳時代の遺物包含層が確認されたため、安威城跡を東方に範囲拡大し、発掘調査を実施してきた(図 1)。

大阪府教育委員会における安威遺跡・安威城跡の発掘調査は、買収済の用地から順次実施しており、 これまでに7回実施している。

その結果、弥生時代後期以降の遺構、遺物が確認されており、特に古墳時代中期から後期にかけては 竪穴建物や掘立柱建物などが検出され、低位段丘下の氾濫原に当該期の集落が展開していることが明ら かとなっている。特に平成9~10年に調査された安威遺跡においては、韓式系土器や陶質土器、また 導入初期の竃をもつ竪穴建物など、遺構、遺物に朝鮮半島からの渡来系の要素が色濃く表れており、古 墳時代中期の社会のあり方を復元するうえで重要な調査成果となっている。

(2) 茨木市教育委員会等による発掘調査(表1・図1)

安威城跡は、上述したとおり中世城館跡として周知が図られていた。『大阪府全志』によると東西 180m×南北 270m の規模があったと思われ、『東摂城址図誌』によると内郭、本丸跡の中心部には「御殿台」という土壇があったとの記載があるが、現在は宅地化され、わずかに北東に土塁跡とみられる高まりが見受けられるのみである(田代ほか編 1981)。また発掘調査はほとんど行われたことがなく、安威城跡を直接的に示す遺構は検出されていない。安威遺跡については、昭和 23 年に三島地域に在住の考古学研究者免山篤氏が古墳時代前期初頭にあたる土壙墓を調査したことにより知られるようになった遺跡であるが(免山 1955)、その後は遺跡およびその周辺において開発行為がほとんどなかったこともあり、平成8年度に店舗建設に伴う調査が実施されるまで、遺跡内での発掘調査は行われていなかった(表1)。平成8年度の調査では、検出された自然流路の下層から、弥生後期前半の土器がまとまって検出されている(茨木市教育委員会 1997)。

表 1 安威城跡・安威遺跡における既往の調査

大阪府教育委員会

遺跡名	調査年次 (調査番号)	調査場所	主な遺構・遺物	報告書
安威遺跡	平成 9 年度 (97031) 平成10年度 (98001)	茨木市南安 威一丁目・ 安威一丁目	《遺構》 落込み(弥生時代後期)、竪穴住居35、掘立柱建物11、柵列2、土 坑、溝ほか(古墳時代中期~後期) 《遺物》 韓式系土器、陶質土器、瓦質土器、須恵器、土師器、鉄器、鉄滓等	大阪府教 育委員会 2000
安威遺跡	平成14年度 (02057)	茨木市五日 市町	《遺構》 住居跡、落ち込み 《遺物》 須恵器、土師器	大阪府教 育委員会 2004
安威遺跡	平成15年度 (03030)	茨木市五日 市町	《遺構》 土坑等 《遺物》 須恵器、土師器等	大阪府教 育委員会 2006
安威遺跡・安威城跡	平成16年度 (04047)	茨木市東安 威一丁目・ 二丁目	《遺構》 溝、土坑(弥生時代後期)、溝、落込み(古代)、溝、落込み(中世) 《遺物》 弥生土器、土師器、須恵器	大阪府教 育委員会 2006
	平成15年度 (03051)	茨木市安威 三丁目	試掘	大阪府教 育委員会 2005b
安威城跡	平成17年度 (05044)	茨木市東安 威一丁目・ 二丁目	《遺構》 土坑、焼土坑、溝ほか(古墳時代前期)、掘立柱建物(平安) 《遺物》 土師器、小型仿製鏡、緑釉陶器、瓦器	大阪府教 育委員会 2007a
	平成19年度 (07032)	茨木市安威 二丁目	《遺構》 竪穴住居1、掘立柱建物3、焼土遺構、溝ほか(古墳後期) 《遺物》 土師器、須恵器	大阪府教 育委員会 2010

茨木市教育委員会等

遺跡名	調査年次	調査場所	主な遺構・遺物	報告書等
	昭和23年		≪遺構≫ 土壙墓	免山1955
	г <u>а</u> тµ23 11-		≪遺物≫ 古式土師器	光山1955
安威遺跡	平成8年度	茨木市南安 威一丁目	《遺構》 自然河道 《遺物》 弥生土器(後期前半)、土師器、中世羽釜	茨木市教 育委員会 1997
	平成14年度	茨木市十日 市町	《遺構》 土坑、落込み、柱穴(古墳時代) 《遺物》 土師器 須恵器	茨木市教 育委員会 2003
	平成14年度	茨木市安威 二丁目	《遺構》 土坑 柱穴 井戸 (近世) 《遺物》 土師器 陶磁器	茨木市教 育委員会 2003
安威城跡	平成22年度	茨木市安威 二丁目	《遺構》 ピット 溝 (近世) 《遺物》 なし	茨木市教 育委員会 2011
	平成23年度	茨木市安威 二丁目	《遺構》 ピット 土坑 (近世) 《遺物》 陶磁器 瓦	茨木市教 育委員会 2012

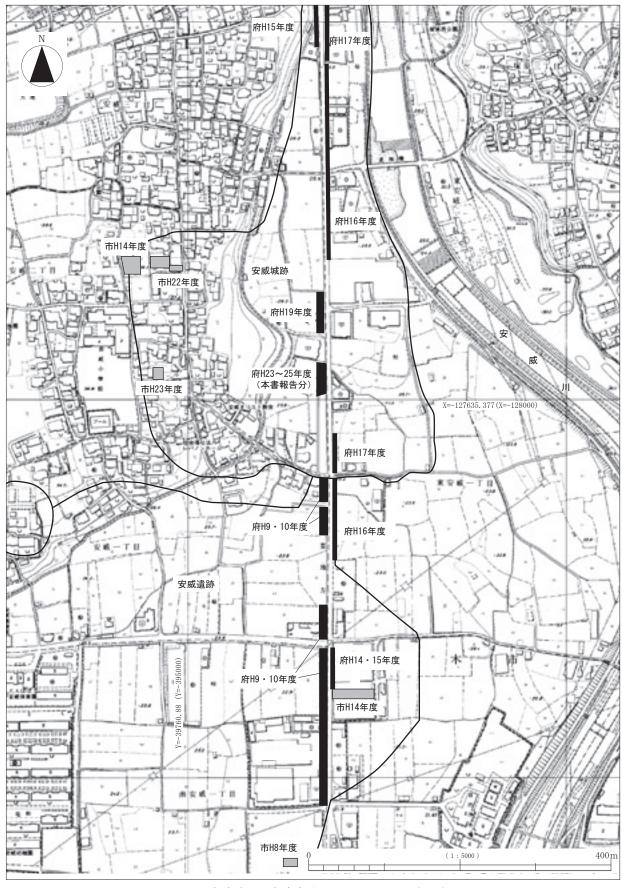


図1 安威城跡・安威遺跡における既往の調査地点

第2節 発掘作業の方法および整理等作業の経過

本書で報告するのは平成23年度から平成25年度にかけて実施された、安威二丁目地内における発掘調査成果である(図2)。北から平成24年度147㎡、平成23年度調査区92㎡、平成25年度271㎡の計510㎡である。いずれの調査区においても盛土とその直下にある近現代の旧耕土は機械掘削により除去し、それ以下については人力による調査掘削を行い、確認された遺構、遺物について実測図作成、写真撮影による記録保存を行った。なお平成24年度および平成25年度については、調査区の一部をさらに掘り下げ、遺構・遺物の有無の確認、および調査によって確認された基盤層の段差の形成要因を確認した。なお平成25年度については検出遺構面についてトラッククレーンによる空中写真測量を行った。造構については調査に再ごとに三板の通し番号を付し、それと遺構種類との組み合わせによって遺構

遺構については調査年度ごとに三桁の通し番号を付し、それと遺構種類との組み合わせによって遺構名としている(例:018 土坑)。第 $4\sim6$ 章において調査年度ごとに報告する場合には、単純に遺構名のみを表記し、それ以外において遺構名を記す場合には、必要に応じて調査年度を冠して他年度調査と区別して表記している(例:H25-018 土坑)。

遺物整理および報告書作成は、平成24~26年度に本教育委員会文化財調査事務所において行った。



図2 平成23~25年度調査区位置図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

茨木市域は南北 17.3km、東西 8.6km の範囲で、およそ 北東-南西方向に走る有馬-高槻構造線により大きく二区 分される。北部はさらに馬場断層と箕面断層で三区分され るが概ね標高 300m 前後の秩父古生層系の岩石により構成 される北摂山地と、そこから派生する丘陵部からなる。南 部は西側に標高 50 ~ 100m 前後を測り、前期洪積層の隆起 地形のひとつである大阪層群で形成された千里丘陵があ り、東側と南側は淀川・安威川などの河川によって形成さ れた沖積層からなる三島平野となっている(図3、茨木市 2012)。

安威城跡はちょうど上記の北部と南部の境界部分にあたり、遺跡の中には有馬ー高槻構造線を構成する真上断層が西南西ー東北東方向に存在する。遺跡の北西部分、中世に安威城跡が築かれる現在の安威小学校の付近は低位段丘面となり、報告にかかる段丘崖をはさんで東に位置する本調査区は、安威川の氾濫原となっている(図4・茨木市

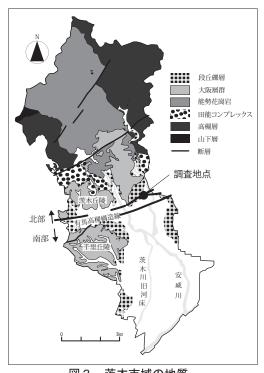


図3 茨木市域の地質

(茨木市 2012 よりトレース・一部改変)

2012)。さらにこの氾濫原は安威川からの土砂供給によって形成された扇状地形を呈する。低位段丘面と氾濫原の境には、安威川が平野部に出るところに設けられている一ノ井堰に端を発する水路が南西方向に流れており、この扇状地形に広がる水田へ給水している(茨木市教育委員会 1991)。

真上断層の南には、同様に有馬ー高槻構造線を構成する安威断層が平行するように存在している。これは安威遺跡の南部にあたり、この両断層の間が地溝となる(茨木市 2012)。ちょうど安威遺跡で検出された古墳時代集落から、今回報告する安威城跡の古墳時代集落の一部は、この地溝の上に形成された氾濫原上に立地している。

第2節 歷史的環境

安威城跡周辺の歴史的環境について、茨木市史(茨木市 2012、2014) および高槻市史(高槻市役所 1973、1977)、各発掘調査報告書、概要報告書などをふまえ、概観しておく。

旧石器時代

茨木市域において旧石器は、太田茶臼山古墳の北部周辺における国府型ナイフ形石器と剥片類、宿久 庄遺跡のナイフ形石器、郡遺跡のナイフ形石器と尖頭器、また佐保川流域や沖積地の微高地上に立地す る東奈良遺跡や新庄遺跡のナイフ形石器の出土が知られている。近隣では高槻市の郡家今城遺跡 A 地点、 C地点、津之江南遺跡、郡家川西遺跡に おいて二上山産のサヌカイト製品に加え て剥片、砕片が出土したことから、石器 製作をしていたキャンプ地と考えられて いる(森田 1993)。

縄文時代

縄文時代中期までの遺跡は数少なく、前期の土器が東奈良遺跡で、また中期末の土器が千提寺南遺跡で見つかっている程度である。後期の遺跡では佐保川流域などの丘陵部に見られるが少ない。一方で高槻市側では富田台地上の富田遺跡や低地部の芥川遺跡でまとまった資料が確認されている。晩期になると特にその後半以降で確認できる遺跡数が増加し、耳原遺跡、五日市東遺跡、総持寺遺跡、牟礼遺跡、徳大寺遺跡、宿久庄西遺跡など、丘陵部のみならず三島平野部でも確認できるようになる。

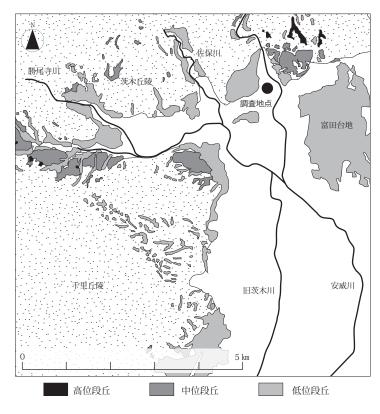


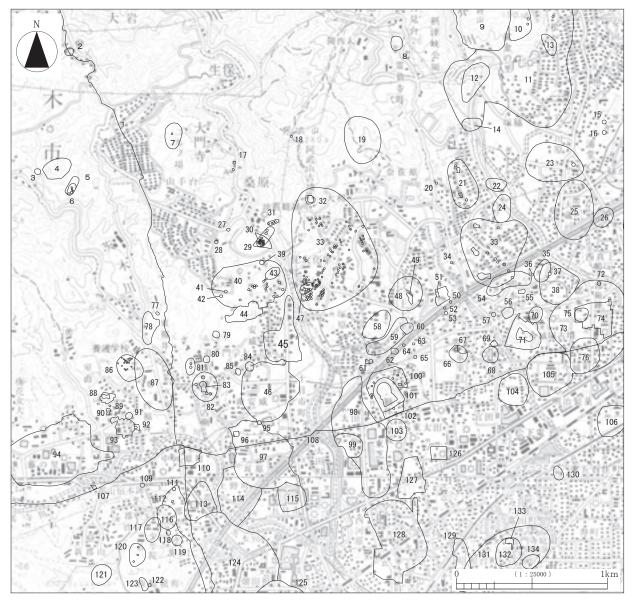
図 4 茨木市域における段丘の分布 (茨木市 2012 よりトレース・一部改変)

弥生時代

縄文晩期後半に遺構や遺物が確認できる耳原遺跡、五日市東遺跡、牟礼遺跡では弥生前期においても 遺構、遺物が確認されている。その一方で東奈良遺跡、目垣遺跡、新庄遺跡でも遺構、遺物が確認され る。高槻市安満遺跡と並んで三島地域の拠点的集落である東奈良遺跡は環濠を伴い、多数の方形周溝墓 や土坑などが濃密に検出されている。安満遺跡でも前期の環濠が検出されており、現在のところ環濠を 有する前期の集落は安満遺跡と東奈良遺跡のみである。

弥生時代中期には東奈良遺跡で引き続き環濠集落が営まれる。特筆すべき点としては居住域から南東 に離れたところで、石製の銅鐸鋳型、土製の銅戈鋳型、勾玉鋳型、フイゴ羽口などの鋳造関連遺物が出 土しており、青銅製品の製作を行っていることが挙げられる。このほか、数多くの方形周溝墓が検出さ れている。また郡・倍賀遺跡、中河原遺跡、目垣遺跡でも方形周溝墓や土器棺等が検出されている。こ れらの低地部に展開する遺跡に加えて、高槻市塚穴遺跡、天神山遺跡、慈願寺遺跡など、丘陵上にも集 落は展開している。

弥生後期初頭から前葉には、中期後葉に展開していた集落は多くが衰退する。安満遺跡では遺構、遺物が激減するとされており(宮崎 2000)、代わって丘陵上の古曽部・芝谷遺跡で集落を形成する。後期前半には茨木市域では安威遺跡、太田遺跡、溝咋遺跡、福井遺跡などで、高槻市では芝生遺跡、芥川遺跡などで遺構、遺物がみられるが、遺跡数が増加するのは弥生後期後半以降である。耳原遺跡や目垣遺跡のように中期後葉で衰退し、それ以降、遺構・遺物がみられなくなる遺跡、東奈良遺跡、郡・倍賀遺



1:三島街道 2:国見遺跡 3:クルス山中世墓 4:佐保来栖山砦跡 5:佐保来栖山南墳墓群 6:佐保来栖山南古墳群 7:大門寺古 墳群 8:霊山寺 9:芥川山城跡 10:帯仕山向城跡 11:塚脇古墳群 12:塚脇古墳群西群 13:塚脇古墳群C支群 14:塚穴古墳群 15:安岡寺古墳 16:安岡寺 17:地福寺遺跡 18:阿武山1号墳 19:片ヶ谷古墳群 20:殿岡神社古墳 21:墓谷古墳群 22:唐井谷古墳群 23: 宮之河原遺跡 24: 尼ヶ谷古墳群 25: 大蔵司遺跡 26: 真上遺跡 27: 初田1号古墳 28: 初田2号古墳 29: 桑原遺跡 30: 桑原西古 墳群 31:桑原古墳群 32: (国史) 阿武山古墳 33:塚原古墳群 34:弁天山古墳群 35:皇子塚遺跡 35:上野遺跡 36:御坊山古墳 37: 芥川廃寺瓦窯跡 38: 郡家本町遺跡 39: 長者ヶ淵古墳群 40: 安威古墳群 41: 安威第1号墳 42: 安威第0号墳 43: 安威砦跡 44: 安 威寺跡 45:安威城跡 46:安威遺跡 47:塚原遺跡 48:新池遺跡 49:(国史)新池埴輪製作遺跡 50:闘鶏山古墳群 51:(国史)闘鶏 山古墳 52: 氷室瓦器散布地 53: 観音寺 54: 岡本古墓群 55: 郡家車塚古墳 56: 前塚古墳 57: 上氷室遺跡 58: 上土室遺跡 59: 土室 遺跡 60:番山古墳 61:石山古墳 62:二子山古墳 63:石塚古墳 64:土保山古墳 65:高樋古墳 66:ツゲノ遺跡 67:ツゲノ古墳群 68: 氷室遺跡 69: 氷室塚古墳 70: 狐塚古墳群 71: (国史) 今城塚古墳 72: 阿久刀神社 73: 嶋上郡衙跡 74: (国史) 嶋上郡衙跡附寺 跡 75:芥川廃寺 76:川西古墳群 77:熊ヶ谷古墳 78:福井城跡 79:将軍山第2地点遺跡 80:将軍山第1地点遺跡 81:真龍寺古墳群 82:将軍山古墳群 83:将軍山1号墳 84:大日寺跡 85:安威西垣内遺跡 86:新屋古墳群 87:西福井遺跡 88: (府史) 紫金山古墳 89: 青松塚古墳 90:南塚古墳 91:海北塚北方遺跡 92: (府史)海北塚古墳 93:福井遺跡 94:宿久庄遺跡 95: (府史)耳原古墳 96:鼻 摺古墳 97:耳原遺跡 98:太田遺跡 99:太田城跡 100:太田茶臼山古墳陪塚群 101:太田茶臼山古墳 102:太田北遺跡 103:太田廃寺 跡 104:宮田遺跡 105:郡家今城遺跡 106:津之江南遺跡 107:(国史)郡山宿本陣 108:西国街道 109:郡山古墳 110:中河原北遺跡 111: 馬塚 112: 茶臼塚古墳 113: 中河原遺跡 114: 五日市遺跡 115: 五日市東遺跡 116: 郡山遺跡 117: 郡山城跡 118: 郡神社古墳 119:郡児童公園遺跡 120:郡山古墳群 121:地蔵池南遺跡 122:上穂積山古墳 123:上穂積山遺跡 124:郡遺跡 125:倍賀遺跡 126:鴨神社跡 127:総持寺北遺跡 128:総持寺遺跡 129:中城遺跡 130:東五百住遺跡 131:富田寺内町 132:富田遺跡 133:(国 名) 普門寺庭園 134: 教行寺跡

図5 周辺遺跡分布図

(地形図は国土地理院発行 5万分の1地形図「京都西南部」および「大阪北東部」より作成)

跡などのように後期後半に再び集落が営まれる遺跡、安威城跡、安威遺跡のように後期後半から集落が営まれる遺跡の3タイプがみられる。このうち総持寺遺跡では竪穴建物に近接して方形周溝墓、円形周溝墓が形成され、郡・倍賀遺跡では遺跡北部に竪穴建物が、遺跡中央部に方形周溝墓群が形成されている。また東奈良遺跡でも遺構、遺物が認められるが小規模に散在する傾向がみられる(奥井 2012)。その一方で高槻市郡家川西遺跡では大規模に集落が展開し、他とは様相が異なる(森田 1993)。

古墳時代

庄内期から古墳前期にかけては、郡・倍賀遺跡、東奈良遺跡で継続的に集落が営まれる。この他、中条小学校遺跡、溝咋遺跡などでも遺構、遺物が確認されている。このうち溝咋遺跡では古墳時代を通じて建物遺構が確認されている。集落は微高地に建物遺構、低地部に水田を伴うものであるが、関東から瀬戸内、山陰地方の土器が搬入され、周辺の遺跡よりも吹田市域の安威川低地や神崎川低地、豊中市の猪名川下流域の様相に類似している。また前期古墳における竪穴式石槨などの主体部に用いられる結晶片岩の板石が出土しており、これを紫金山古墳などの周辺の前期古墳における石槨素材の残材と考え、外来系土器と合わせて、港湾的な性格をもつ流通拠点とする見解も示されている(森田 2006)。

この時期の集落遺跡では、郡家川西遺跡が他を圧倒する規模で展開している。特に遺跡の北西にある 南平台丘陵上に築造される弁天山古墳群は、三島郡域でも古墳中期前葉まで続く首長系譜を整然と示し ており、その首長の基盤となった集落であると考えられている(森田 2006)。

その他の前期古墳である紫金山古墳、将軍山古墳、闘鶏山古墳などが水系ごとに丘陵上に築造される。 安威遺跡近隣では前期末に将軍山古墳に続いて安威0号墳、安威1号墳が築かれており、郡・倍賀遺跡 にその成立基盤を推測する見解もある。

古墳中期になると、中期初頭に安威遺跡で建物遺構がみられる。多数の韓式系土器や導入期の竃がみられるなど渡来系要素が色濃い。安威川左岸に突如現れるこの渡来系集落については、灌漑による安威川流域の開発と関連する見方がある(菱田 2012)。また対岸に望む太田茶臼山の造営に関連した集落との見方もある(一瀬 2006)。郡・倍賀遺跡においても、竪穴建物が多数みられる。

中期の古墳は、安威川左岸に全長 200m を超える前方後円墳である太田茶臼山古墳が築造される。周りには陪塚が7基存在するほか石山古墳、土保山古墳、二子山古墳、番山古墳などが安威川左岸に展開する。またこの時期には総持寺遺跡で小方墳からなる古墳群(中期前葉から中葉)、太田遺跡で小円墳・方墳からなる古墳群(中期後半)が発見されているほか、郡・倍賀遺跡(中期後半)、春日遺跡(中期後葉から後期前葉)などにおいて埋没古墳群が発見されている。

安威川左岸の中位段丘上に立地する新池遺跡は、中期前半から稼働する埴輪製作の専業集落である。 製作された埴輪は太田茶臼山古墳、今城塚古墳へ供給されたことが判明しているほか(高槻市教育委員会 1993)、上記の総持寺古墳群へも供給された(大阪府教育委員会 2005)。

古墳後期には総持寺遺跡、溝咋遺跡、安威城跡、福井遺跡、玉櫛遺跡、郡・倍賀遺跡、東奈良遺跡などで建物遺構が確認されている。安威遺跡では後期前半には竪穴建物が認められるが、後半までには衰退している。溝咋遺跡では継続的に水田を伴う集落が検出されている。

後期古墳は、茨木川、勝尾寺川、安威川流域の丘陵部に南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳といった単独で築かれる古墳があるほか、安威古墳群、将軍山古墳群、新屋古墳群、長ヶ淵古墳群、

真龍寺古墳群、塚脇古墳群、塚原古墳群など群集墳が築かれる。また平野部でも中条小学校遺跡、春日 遺跡でも埋没古墳が検出されている。

終末期には横穴式の木室をもつ上寺山古墳、石室床面に磚を二重に敷いた初田1号古墳、横口式石槨に夾紵棺を納めた阿武山古墳が築かれる。また安威川の中流域には、河岸段丘上に27基の古墳が密集して発見された桑原西古墳群が、佐保川の上流部の丘陵上に栗栖山南古墳群・栗栖山南墳墓群がある。この終末期古墳群の両者は古墳時代から古代にかけての墓制を知る上でも重要な遺跡である。

古代

律令期の遺跡として特徴的なものが官衙遺跡である。島上郡では嶋上郡衙跡において発掘調査により 政庁や正倉などの構造が明らかにされており、国史跡に指定されている。島下郡では郡遺跡が郡衙と推 定されており、奈良時代の掘立柱建物が複数検出されている。また古代官道である山陽道は島上郡、島 下郡の中央部を東西に走る西国街道沿いと想定されるが、島上郡衙跡の南でその一部が確認されている。 また中河原北遺跡では、幅約7mで小石が敷かれた遺構が検出されており、道路に関連する遺構と推測 されている。

7世紀後半から8世紀にかけては寺院の建立も多く行われた。島下郡では太田廃寺、穂積廃寺、三宅廃寺、安威寺跡が知られ、島上郡では芥川廃寺、梶原寺跡がみられる。太田廃寺跡では、塔心礎と舎利容器一式が出土している。またこれら寺院に隣接して芥川廃寺や梶原寺跡では瓦窯がみられる。茨木市域の古代寺院については穂積氏、中臣氏系である中臣太連、中臣藍連、三宅氏などの有力氏族の本拠地と考えられており、これらの寺院との関連が想定されている。

集落遺跡としては総持寺遺跡において飛鳥時代の掘立柱建物を中心とする集落が検出されており、さらに遺跡北部から総持寺北遺跡にかけては、8世紀~10世紀にかけて多数の掘立柱建物が検出されており、古代における一大集落を形成している。また宿久庄西遺跡や玉櫛遺跡でも平安時代から中世にかけての集落跡が発見されている。徳大寺遺跡では10世紀後半~11世紀前半の梵鐘鋳造遺構が検出されている。一方高槻市域では、上田部遺跡において奈良時代の水田跡や農具等が出土しており、また郡家今城遺跡において8世紀~10世紀にかけての集落が検出されている。大蔵司遺跡内では溝から祭祀を想定させる人形や斎串、木簡等が出土しており、その他には掘立柱建物や倉で構成される集落跡が確認されている。宮田遺跡では平安時代初期の群集土壙墓が検出されている。さらに上牧遺跡や安満遺跡においても平安時代から中世にかけての集落が検出されている。平安時代には、この地域は広く藤原摂関家の荘園であったことが文献等から知られており、上記の平安時代の集落跡にはこの荘園の一端を示すものも含まれる。また9世紀には忍頂寺や総持寺が建立されている。

中世

中世の遺跡は、山間部では栗生岩阪遺跡、佐保遺跡、宿久庄北遺跡などで集落跡が発見されており、 栗栖山南墳墓群では墓地が発見されている。丘陵部から平野部にかけては、安威川、茨木川、勝尾寺川 などの河川により形成された扇状地や沖積平野に立地する、宿久庄遺跡、豊川遺跡、舟木遺跡、新庄遺 跡、玉櫛遺跡、総持寺遺跡、溝咋遺跡、葦分神社東方遺跡などで集落跡が検出されている。

中世には藤原氏の勢力が衰え、春日大社・興福寺に荘園領主が移り、15世紀中頃までその支配が続く。 この時期には玉櫛遺跡でみられるような周囲を堀や溝によって囲まれ、土壙墓や井戸を伴う屋敷地をも つ集落が出現する。他にも総持寺遺跡において $12 \sim 13$ 世紀に属する溝や柵で区画された屋敷地が検出されており、また宮田遺跡では堀で囲まれた屋敷地が検出されている。

玉櫛遺跡をはじめ、三島平野部の低地においては13世紀後半には集落の拡大がみられ、玉島遺跡、 真砂遺跡、溝咋遺跡などがみられ、このころに平野部に展開し、現在の集落への系譜となっている。

また中世から近世初頭にかけては、茨木城、水尾城、三宅城、福井城、泉原城、佐保城などの中世城郭が知られている。本遺跡である安威城は16世紀前半に築城されたと考えられているもので、安威氏を城主としている。また北方の安威古墳群が存在する丘陵には安威砦がある。茨木市域では在地の土豪である太田氏が12世紀に築いたとされる太田城が最も古いと考えられているが、詳細は不明な点が多い。発掘調査において城郭関連の遺構や遺物が確認されたものとしては、茨木市では元茨木川の左岸にある茨木遺跡において、流路に廃棄された欄間などの建具が発見されており、茨木城の破城を示すものと考えられている。また佐保地域の丘陵部においては佐保南来栖山砦跡が調査され、曲輪などの構造が明らかとなっている。高槻市域においては、三好長慶の居城として著名な芥川山城における調査によって構造が把握されている。また高槻城では南北方向、東西方向の「大堀」が検出されている。

近世

近世の遺跡として特徴的なこととして挙げられるのは、山間部の千提寺や下音羽においてキリシタン 関連の遺物が多く残されている点である。近年発掘調査された千提寺南遺跡では、丘陵上で発見された 近世墓地の中に、キリシタンの墓があることが分かり話題になった。戦国期にキリシタン大名として有 名な高山右近が居城した高槻城においては、16世紀後半のキリシタン墓が複数発見されている。

近世高槻城は、大坂夏の陣後の元和三年(1617)に修築され、現在の町割りの元となったものである。 発掘調査は本丸跡、二ノ丸、三ノ丸跡で実施されており、本丸跡では石垣基礎の胴木組などが発見されている。

第3章 基本層序

前章で述べたとおり、安威城跡には真上断層が概ね北東-南西方向に存在し、今回の調査区を横断している。この真上断層による段差(以下本章において「段差」という。)を境に北側(平成23・24年度調査区)では現況地盤より0.6mほど下に旧耕土が存在するが、断層より南側(平成25年度調査区)では1.5mほどで旧耕土となる。

本章以降では、各調査区西壁および平成25年度北壁において基本層序を把握し、これをローマ数字で大別層位として表示した上で、各調査区の細別層位についてはアラビア数字で表す。なお各調査区における細別層位についてはそれぞれの報告の章にて詳細を述べることにする(図6・7)。

第I層

盛土直下にある近現代の旧耕土であり、水田耕作土と床土からなる。段差北側の平成 23・24 年度調査区では、上面が T. P. +27.0~27.1m となる。段差部分では、近世以降に川原石を積んで石垣(石垣1 (第6章参照))としており、石垣のすぐ南側での旧耕土上面は T. P. +26.5m である。平成 25 年度調査区では、そこからさらに 3 m程度南に下がったところで川原石の石垣(石垣2)があり、それより以南は第 I 層上面が T. P. +25.8m 付近となる。したがって平成 23~25 年度調査区では近世から近代にかけて棚田状の水田が 3 段存在していたことになる。

第Ⅱ層

近世の耕作土である。基本的には丘陵部の土と考えられる黄褐色~オリーブ褐色を呈した粘質土を床土としており、その上に堆積している灰色の粘質シルトを耕作土としている。H25 年度調査区の石垣2以南の床土(H25-6 層)は T. P. +25. 6m 付近である。石垣2から石垣1の間においては、床土(H25-6 層)は $0.1m \sim 0.2m$ 程度高くなり、T. P. +25. 7m 付近を測る。そして石垣1付近より以北では、特に平成25年度調査区において顕著にみられるように、石垣1構築前の2面の耕作土層を確認できた($\Pi-1$ 層および $\Pi-2$ 層)。これは平成24年度東壁においても確認できる。

第Ⅲ層

古墳時代後期の遺物を含む遺物包含層である。平成 24 年度調査区の X = -120607 あたりより以北では基盤層 (第IV層) の落ち込みがあり、この部分の下半は灰黄色系の中~粗粒砂、上半は土壌化した褐灰色系シルトが堆積しており、この時期の遺構、遺物を確認している (II24-13、14 層)。

また平成 23 年度調査区から平成 25 年度調査区の X = -127623 付近から X = -127629 付近までは、第 II 層の影響で第 III 層が残存していなかったが、X = -127629 以南では基盤層(第 IV 層)が南へ傾斜する地形となっており、その斜面上に古墳時代後期を中心とする遺物包含層が確認された($H25 - 8 \sim 10$ 層)。この土層は第 IV 層の最上位に堆積した砂層を掘り込む古墳時代中期の遺構を埋めるように堆積しており、また層中(H25 - 10 層)で検出した浅い落ち込みから古墳時代後期に属する須恵器、土師器を確認している。この部分については基本的には南へ傾斜する基盤層がさらに大きく窪んだところに堆積した砂層に、古墳時代中期の遺構が掘り込まれ、その後古墳時代後期以降に地形を平らにするように第 III 層が形成されたと考えられる。これについては土壌分析を行い、人為的な整地の可能性が高いとの結果を得て

いる (第7章)。

第Ⅳ層

平成 23 ~ 25 年度調査区における基盤層である。基本的には拳大~人頭大もしくはそれ以上の礫を多く含む砂礫層であり、ところどころに粗粒砂の間層を挟む。上記のように段差を境に南へ傾斜し、平成 25 年度調査区の南半部ではこの砂礫層自体が窪んでおり、この窪みには砂層が堆積していた。そしてこれを掘り込むように古墳時代中期の遺構、遺物を確認している。

段差部分では、基盤層は 0.4m 程度の高低差をもっており、それより以北については T.P.+26.7m 付近となる。上記のとおり平成 24 年度調査区の北半部は、第IV層が窪む地形となっており、この窪みに堆積した第III層より、古墳時代後期の遺構、遺物が確認された。

この第IV層の砂礫層については、河川堆積等にみられるラミナが認められず、礫の大きさも大小さまざまであることなどから、土石流によって形成された可能性が高い。また H25 年度南壁ではこの礫層の下から河川堆積物とみられる粗砂が確認されている (H25-11 0層)。

平成24および平成25年度調査においては、基盤層の生成要因を確認するため、一部の断割りを行った。 平成24年度調査区では南東部分で、第IV層が0.4mほど落ち込み(図23)、また平成25年度調査区では、 やはり0.4mほど落ち込み、さらに南東側で0.4mほど落ち込む様子が確認された(図31)。この状況は 本調査区の東方約100mの地点で過去に行われている地質調査において確認されている真上断層(寒川 ほか1996)である可能性が極めて高いものと考えられる(第5章第1節)。

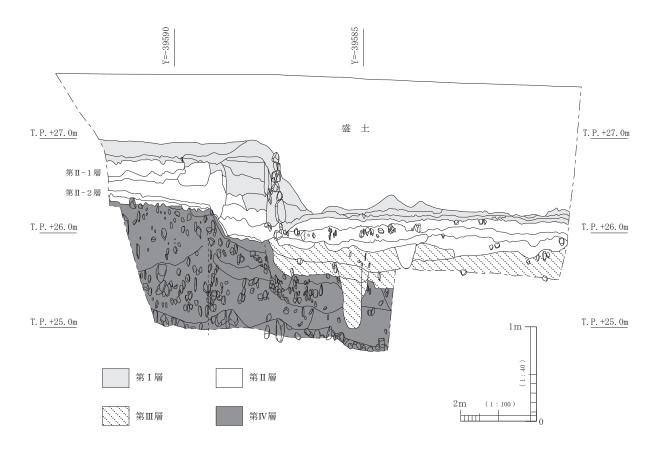


図6 基本層序(1)(平成25年度調査区北壁)

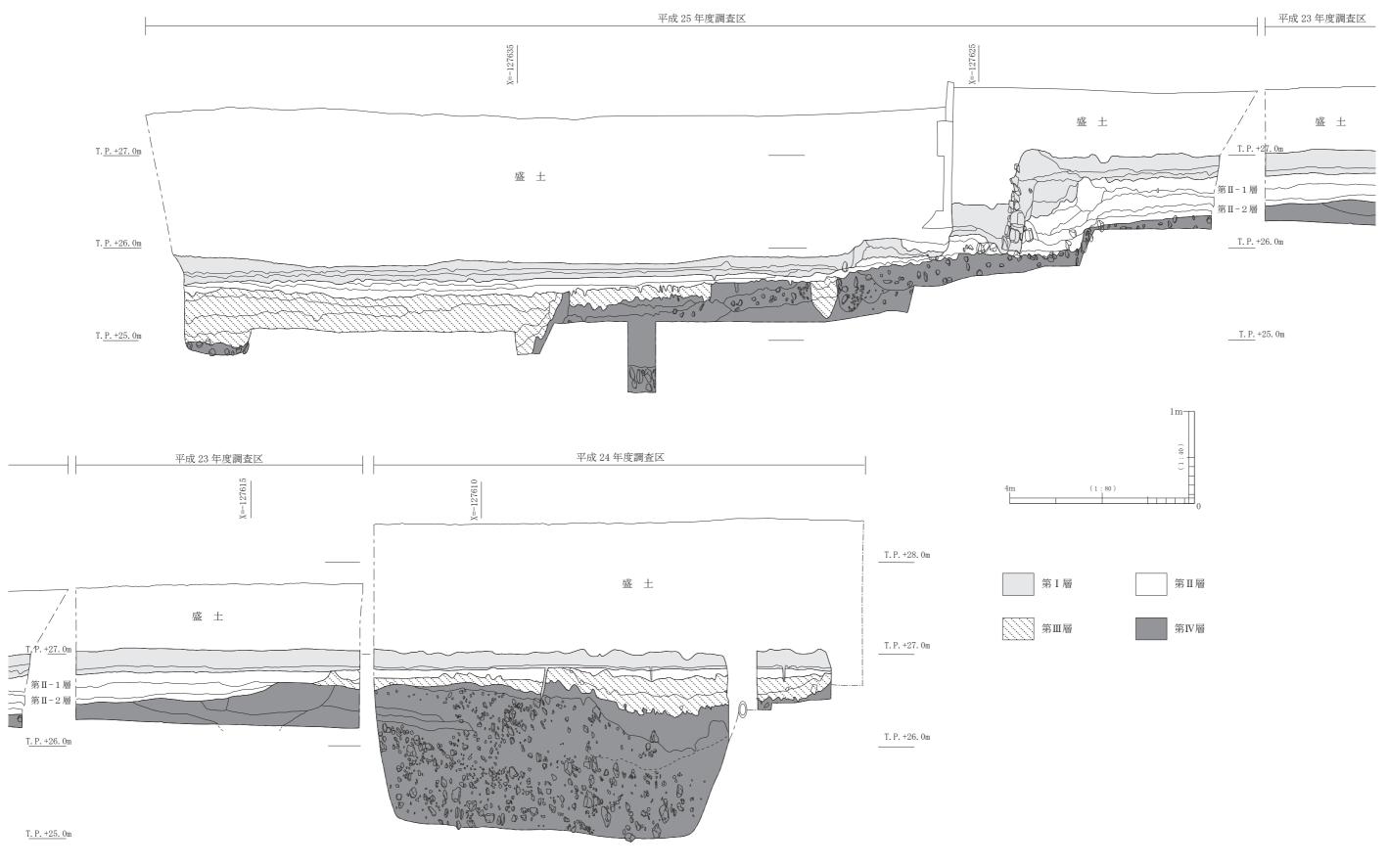


図7 基本層序(2)(平成23~25年度調査区西壁)

第4章 平成23年度調查区

第1節 層序および遺構の分布

平成23年度調査区で検出された遺構面は第1面のみである。第 I 層~第 III 層を除去すると、調査区 西側では第 IV 層が現れ、その上面で古墳時代後期後半の竪穴状遺構を検出している。調査区中央から東 にかけては第 IV 層が南東に緩やかに落ち込む地形となっており、東端部ではさらに落ち込んでいる。前者の落ち込みには黒褐色の砂質土が堆積しており、後者の深い落ち込みには灰褐色の砂質土が堆積している。後者の落ち込みからは中世の溝が2条検出されている。

なお、第1面調査終了後に、基盤層である第IV層を平面的に掘り下げたところ、ピットが多数検出されたため、このピット群を第1面下位として報告する。

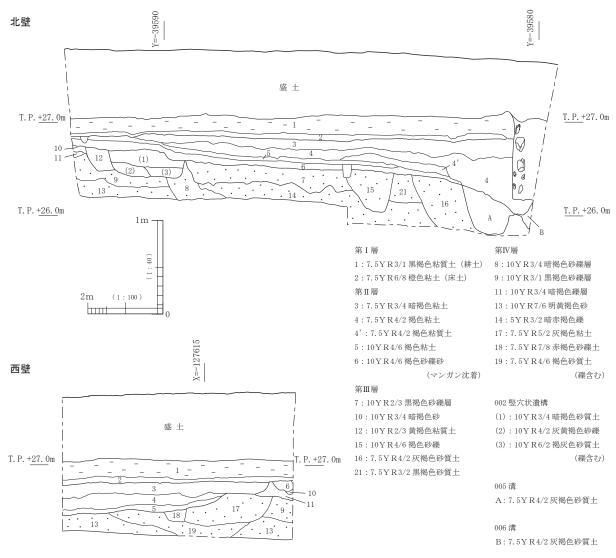


図8 平成23年度調査区断面図

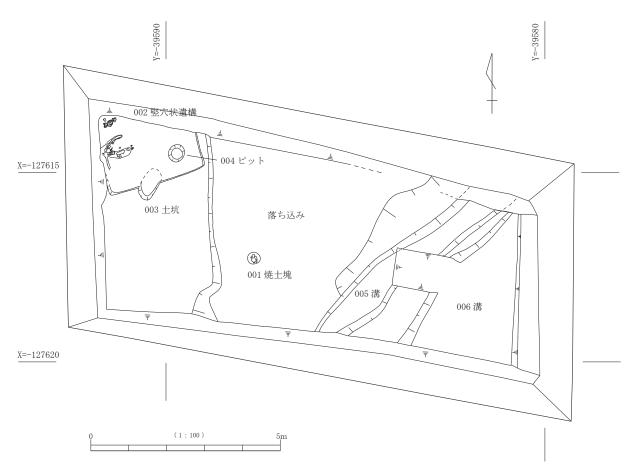


図9 第1面遺構平面図

第2節 中世および古墳時代の遺構と遺物

(1) 第1面

005 溝(図9) 調査区中央やや東よりで検出された溝で北東-南西方向に走る。南北ともに調査区外にのびており、北側の平成24 調査区においては、この溝の延長部分で地形が落ち込んでいるため、この付近が始点と考えられる。また南側の平成25 年度調査区では延長部分は検出されなかったので、調査区境界で収束しているものと考えられる。埋土は褐色の砂礫で、遺物は図示できない破片であるものの、古墳時代後期頃とみられる土師器片が出土している。遺構の時期については、東に平行して走る006 溝の埋土と類似するため、12~13 世紀と考えられる。

006 溝(図 9) 調査区の東端で検出された溝で、005 溝に平行するように検出されたが、東側の肩が不明確であった。この溝は平成 25 年度調査区における 012 溝とつながっており、幅はおよそ 0.6m 程度あったと考えられる。埋土は平成 25 年度調査区と同様暗オリーブ色砂質シルトである。

遺物は土師質小皿が複数個体出土している。これらのうち復元できたのは6 個体で、破片量からすると十数枚程はあるものと考えられる(図 $10-1\sim6$ 、図版 20)。

 $1\sim6$ は口縁部が体部から直線的にのび、ヨコナデー段により調整され、口縁端部から 1 cm 程度下がった外面にヨコナデによる稜をもつ。口縁端部の面取りは明瞭ではなく、丸くおさめている。復元個体も含め、径が $9.4\sim10.0$ cm、器高が $1.6\sim1.9$ cm とほぼそろっている。形態的な特徴からは伊野近

富氏の分類によるJタイプ (伊野 1995) に類するとみられる。Jタイプは出現当初(12世紀中葉)には口縁部と端部の二段ナデで面取りは明確ではなく、12世紀後葉に一段ナデが登場して面取りが明確になり、13世紀後半になると面取りが粗雑化し、14世紀で消滅するとされている。また小森俊寛氏による都城出土土器の編年的研究によれば(小森 2005)、 $1\sim6$ が属する皿Nについては、京VII期(京都VII期)で一段ナデ化が明瞭となるとされている。法量についても京VII期(京都VII期)におい

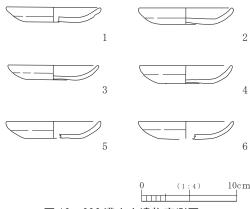


図 10 006 溝出土遺物実測図

て $1\sim6$ の値に近似する。土師質皿以外には、溝の下位から古墳時代の土師器片が出土している程度で、瓦器椀などの遺物が共伴していないため不明な点もあるが、時期的には概ね 12 世紀~ 13 世紀と考えられる。以上の遺物の年代観により、006 溝の所属時期は $12\sim13$ 世紀と考えられる。

002 竪穴状遺構(図 11、図版 1) 調査区西部において検出された平面方形を呈する遺構である。調査区の北と西にのびているものの南辺は両端が検出されており、それによると一辺 2.7m を測る。南辺の中央は 003 土坑によって切られている。遺構内からはピットが 1 基 (004 ピット) 検出されたが、ほかには後述する 008 ピットが 002 竪穴状遺構掘方の下位から検出されているが、建物の主柱穴になるものではない。また遺構の北西部からは土師器甕が出土している(図 13-9、図版 2)。さらに掘方西辺

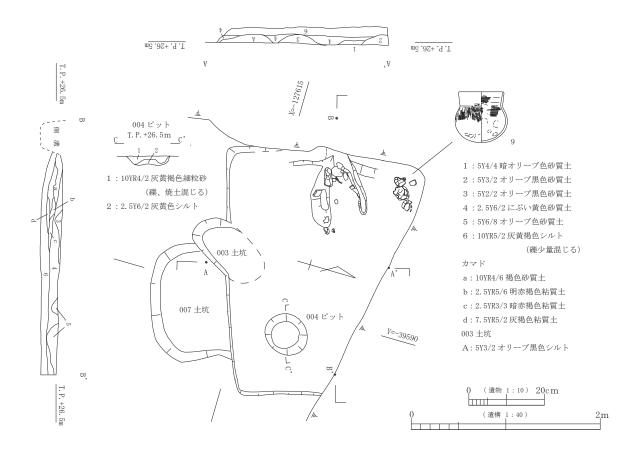


図 11 002 竪穴状遺構平・断面図

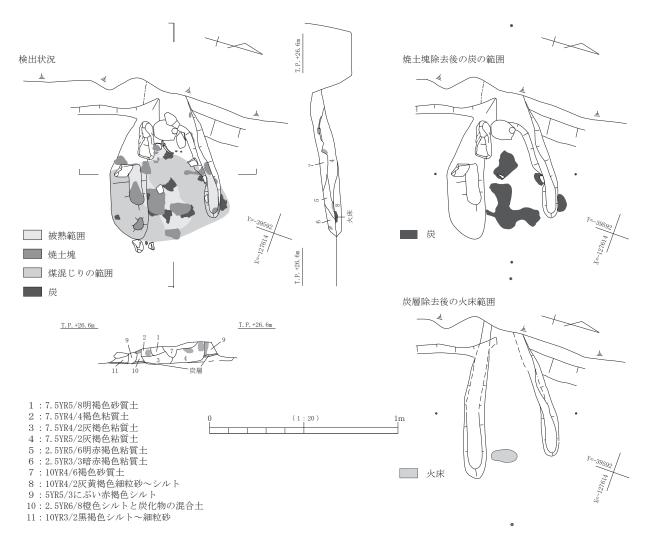


図 12 002 竪穴状遺構電平・断面図

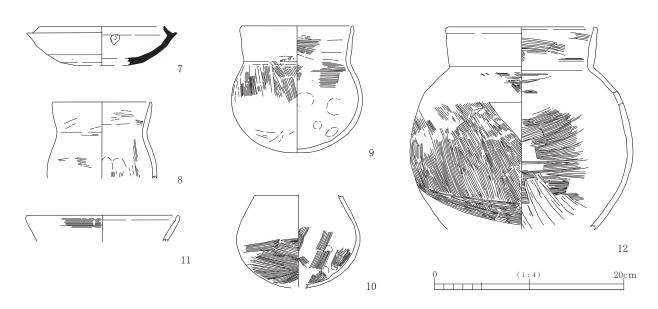


図 13 002 竪穴状遺構出土遺物実測図

から竃を検出している(図 12)。遺構埋土は大きく上下 2 層に分層でき、上層はにぶい黄色の砂質土を 主体とし、下層は灰黄褐色シルトを主体とする。下層は礫がやや混じる。本遺構を竪穴状遺構とした理 由については後述する(第 8 章 第 1 節)。

電(図12、図版1)は両袖が部分的に残存し、灰褐色の粘質土で構築され、焼けて硬化している部分がある。長軸0.7m、焚口幅は0.4 mを測る。竃内部には炭化物が残り、土師器甕が出土した(図13-9、図版21)。火床は長軸0.15m、短軸0.1mの範囲が赤色に硬化していた。

遺構内からは須恵器、土師器が出土している(図 13、図版 21)。7は須恵器坏身で、立ち上がりは短く内傾し、内外面とも回転ナデを施している。8~10は土師器小型甕で、8は口縁部が直立ぎみに外傾し、内外面ともヨコナデを施す。体部は球形を呈し、外面の上半は縦方向のハケメ、下半部はハケメの後ナデ消している。内面の上半は斜め方向のハケメ、下半はナデ、所々にユビオサエがみられる。9は竃から出土した。直立ぎみに外傾する口縁部をもち、内外面ともにヨコナデを施す。体部は内外面とも磨滅が激しいが、わずかにハケメが認められる。10は頸部から体部の一部であるが、外面上半ハケメの後ナデ、下半は斜め方向のハケメをそのまま残す。11は下層から出土したもので、土師器甕の口縁部である。内外面ともにヨコナデを施し、口縁直下の内面に浅い窪みをめぐらす。12は土師器甕で、口縁部と体部からなるが接合しないため、復元的に図示している。厚手の口縁部は直立ぎみにやや外傾し、内外面ともにヨコナデを施す。口縁部内面直下に浅い窪みをめぐらしている。頸部から体部の外面は上半が横〜斜め方向のハケメ、下半は横方向のハケメ、内面は上半が横〜斜め方向のハケメで所々にユビオサエが認められる。下半はハケの後に上方向にケズリを施している。

004 ピット (図 11、図版 2) 002 竪穴状遺構の床面で検出され たピットで、径 0.5m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰黄色のシルト〜 細粒砂で焼土がわずかに混じる。 遺物は出土しなかった。

られる。

003 土坑 (図 11) 調査区西部に おいて検出された平面が長楕円形 を呈する土坑である。長軸 0.9m、 幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。002 竪 穴状遺構の南辺を切っている。埋 土はオリーブ黒色シルトで、遺物 は出土していない。

007 土坑 (図 14、図版 1 · 2) 調査区西部において検出された平

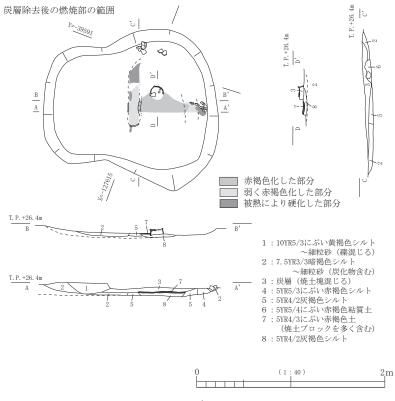


図 14 007 土坑平・断面図

面がダルマ形を呈する土坑である。 002 竪穴状遺構の下位より検出され たため、002 竪穴建物より古い。長 軸1.9m、最大幅1.7m、深さ0.1mを 測る。埋土は大きく上下2層に分け ることができ、上層はにぶい黄褐色 シルト〜細粒砂および炭化物層から なり、下層は暗褐色シルト〜細粒砂 ないしは灰褐色シルトからなる。下

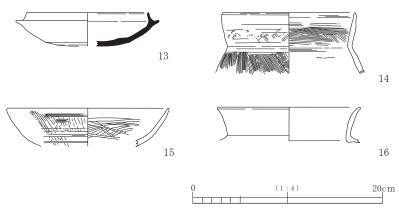


図 15 007 土坑出土遺物実測図

層は部分的に火を受けて硬化している部分があり、また上層と下層の間にわずかに赤色に硬化した層が確認できる。これを竃や炉の残存とみることも可能であろう。上層は炭化物層が明瞭にみられることから、竃ないしは炉の機能停止後に炭化物混じりの土で埋め戻されたと考えられる。これが屋内施設か屋外施設かは不明である。

遺物は須恵器、土師器が出土している(図 15、図版 20)。13 は須恵器坏身で、短く内傾する立ち上がりをもつ。内外面とも回転ナデを施している。II 型式 4 段階に属すると考えられる。14~16 は土師器である。14 は甕で直立ぎみに立ち上がる口縁はやや内彎し、口縁端部外面に段を作る。外面はハケメの後にヨコナデ、内面は上半がハケメの後にヨコナデ、下半がハケメを残している。体部外面は斜め方向のハケメ、内面はナデで調整されている。15 は高坏の坏部である。外面は粗い縦方向のハケメの後ヨコナデ、内面は上半がヨコナデ、下半部はミガキが施されている。復元径が 17cm を測る碗形高坏である。16 は甕の口縁部である。外反し、内外面ともにヨコナデを施す。またわずかに残る頸部~体部は、頸部内面直下までケズリが施され、屈曲部に面をもつ。

以上の遺物のうち、須恵器坏身の 13 が II 型式 4 段階に属することにより 007 土坑の時期は 6 世紀後半と考えられる。

001 焼土塊(図 9、図版 2) 調査区中央付近の、後述する落ち込みの第IV層上面から焼土塊と土器が出土している(図 16)。平成 19 年度調査区において焼土遺構として複数検出されたものと同様の遺構と考えられる(大阪府教育委員会 2010)。

遺物は、土師器甑の把手が出土している。上面に切込みをもち、全体に被熱している(図 16-17)。遺構の時期としては、古墳時代中期~後期と考えられる。

落ち込み(図9、図版1) 002 竪穴状遺構の 東は第IV層がゆるやかに落ち込む部分があり、基 盤層上面から遺物が出土している(図 16-18~ 20、図版 20)。18 は須恵器坏蓋の口縁部である。 19 は土師器高坏脚部である。部分的に被熱して いる。20 は土師器高坏の口縁部である。

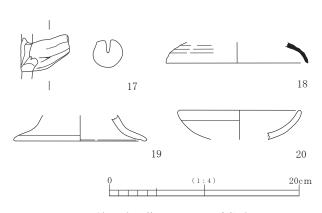


図 16 001 焼土塊・落ち込み出土遺物実測図 (17:001 焼土塊 18~20: 落ち込み)

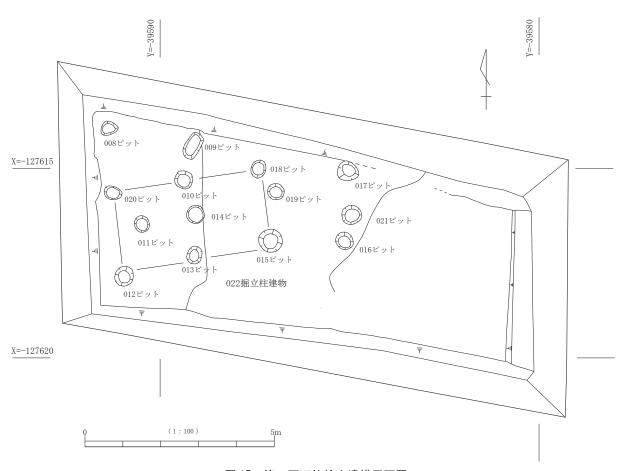


図 17 第 1 面下位検出遺構平面図

(2)第1面下位

第1面調査後に基盤層である第IV層を平面的に掘り下げたところ、多数のピットが検出された(図 17、図版 2)。検出範囲としては調査区の西側から北側にかけて、002 竪穴状遺構が検出された辺りから 005 溝付近までであり、第IV層が大きく落ち込んでいる、005 溝および 006 溝付近では検出されていない。これらのピットは第IV層中からの検出であるが、本来は第IV層上面から掘削されたと考えられる遺構であるため、第1面の下位として扱う(図 18)。

008 ピット 調査区北西端で検出された平面形がいびつな円形を呈するピットで、径 0.25m、深さ 0.15m を測る。埋土は黄灰~灰色の砂質土で柱痕とみられる黒褐色シルトが中央に確認できる。遺物は出土していない。008 ピットは 002 竪穴状遺構に伴う竃の北側に位置する。

009 ピット 調査区西側の北辺で検出された平面形が長楕円形を呈するピットである。長軸 0.7m、幅 0.4m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。

010 ピット 009 ピットのすぐ南で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.38m、深さ 0.15m を測る。埋土は褐灰色シルト〜細粒砂で部分的に炭化物を含む。遺物は出土していない。

011 ピット 調査区西側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.3m、深さ 0.15m を測る。埋土はにぶい黄褐色シルト〜細粒砂である。遺物はいずれも破片であるが、土師器甕口縁部、壺底部が出土している(図 20-21・22、図版 20)。21 は甕口縁部である。内外面ともヨコナデ、わずかに残る体部の内面は頸部直下までケズリで調整されている。22 は壺底部である。

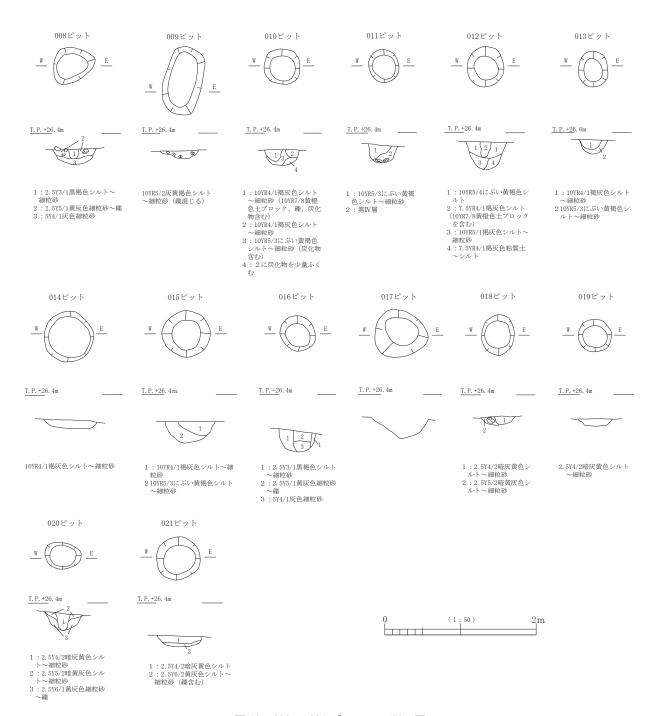


図 18 008 ~ 021 ピット平・断面図

012 ピット 調査区西南部で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.4m、深さ 0.3m を 測る。埋土は灰〜灰褐色シルト〜細粒砂で、柱痕とみられるにぶい黄褐色シルトが中央に確認できる。 遺物は土師器細片、須恵器坏身が出土している(図 20-23、図版 20)。23 は体部外面下半に回転ヘラケズリを施す。復元径 13.4cm を測る。 II 型式 3 段階である。

013 ピット 011 ピットの東側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.3m、深さ 0.15m を測る。埋土は褐灰色シルトおよびにぶい黄褐色シルトからなる。遺物は韓式系軟質土器の平底鉢の体部片とみられる土器片が出土している(図 20-24、図版 20)。外面に格子タタキが施され、全体が被熱している。

014 ピット 013 ピットの北側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.6m、深さ 0.1m を測る。埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

015 ピット 001 焼土塊の東側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.5m、深さ 0.2m を測る。埋土は褐灰色シルトおよびにぶい黄褐色シルトからなる。遺物は土師器甕の口縁部が出土している(図 20-25、図版 20)。

016 ピット 015 ピットの東側で検出された平面形が円形を呈するピットで、径 0.4m、深さ 0.2m を 測る。埋土は黄灰色細粒砂で柱痕とみられる褐灰色シルトが中央に確認できる。遺物は出土していない。

017 ピット 調査区中央北辺で検出された平面形が楕円形を呈するピットである。長軸 0.55m、短軸 0.5m、深さ 0.2m を測る。遺物は出土していない。

018 ピット 009 ピットの東側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.4m、深さ 0.1m を測る。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。

019 ピット 018 ピットの南側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.4m、深さ 0.1m を測る。埋土は暗灰黄色細粒砂である。遺物は出土していない。

020 ピット 調査区西端で検出された平面形が円形を呈するピットで径 0.4m、深さ 0.2m を測る。埋土は灰黄色シルト〜細粒砂で柱痕とみられる暗灰黄色シルトが中央にみられる。遺物は出土していない。

021 ピット 016 ピットの北側で検出された平面形が円形を呈するピットである。径 0.5m、深さ 0.15m を測る。埋土は暗灰黄色~灰黄色シルトである。遺物は土師器細片が出土している。

022 掘立柱建物 上記のピットのうち、020 ピット、010 ピット、018 ピット、015 ピット、013 ピット、012 ピットは、柱間が約 2 mを測る 1 間×2 間の掘立柱建物を構成している (図 19)。建物の方向は東北東一西南西となる。 1 間×複数間の掘立柱建物は、平成 19 年度調査区においても 2 棟が検出されて

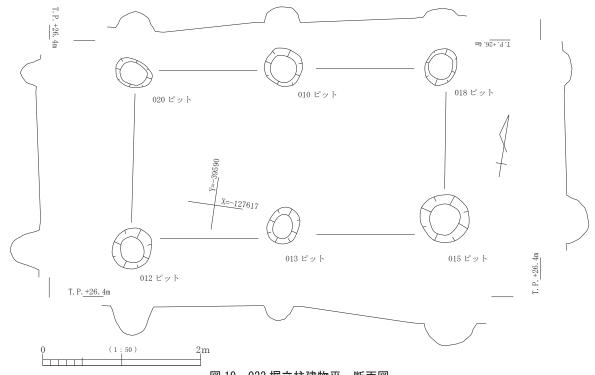


図 19 022 掘立柱建物平・断面図

いる (大阪府教育委員 会 2010)。ただしこの 2 棟の掘立柱建物は北北 東-南南西に軸をとっ ているため、今回の 022 掘立柱建物とは方向が 合わない。また平成 19

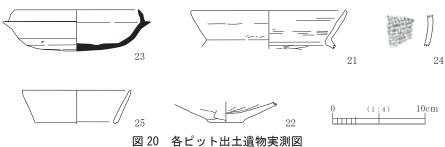


図 20 谷にサド山工退初天原図 (21・22:011 ピット 23:012 ピット 24:013 ピット 25:015 ピット)

年度調査区においては、本調査区のように基盤層である砂礫層の落ち込みが検出されているが、掘立柱建物の柱穴は落ち込みまでは及ばないのに対し、今回の 022 掘立柱建物は落ち込みまで及んでいる点で異なっている。なお、022 掘立柱建物の各ピットのうち 012 ピットからはⅡ型式3段階の須恵器坏身が出土しているため、建物の時期は6世紀後半以降と考えられる。

(3) 包含層出土土器 (図 21、図版 22)

注

1) 本資料については、高槻市域での資料(上牧遺跡井戸2出土資料(12世紀前半・高槻市教育委員会1980)) などとの形態的類似性と相違点について、高槻市教育委員会文化財課 橋本久和氏よりご教示をいただいた。本資料も12世紀前半ころに属する可能性が高いとの所見が示されている。

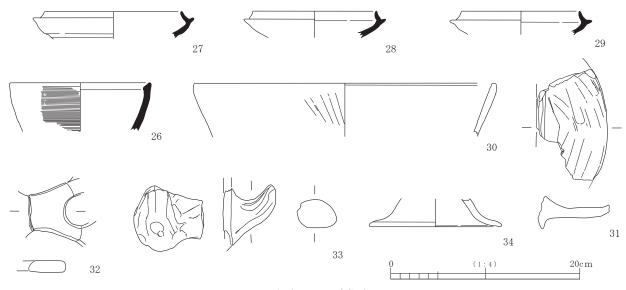


図 21 包含層出土遺物実測図 (26~29・31~33:第Ⅲ層 30:第Ⅰ層 34:第Ⅱ~Ⅲ層)

第5章 平成24年度調查区

第1節 層序および遺構の分布

本調査区の層序は、すでに基本層序で述べたとおり、近現代の作士である第 I 層、近世の作士である 第 II 層、古墳時代後期の遺物を含む遺物包含層である第 III 層および基盤層である第 IV 層から構成されている(図 6 ・ 7 、原色図版 1)。これらの層序に従って調査を進める中で、2 つの遺構面が認識された。 第 1 面では、中近世の耕作に関する遺構、第 2 面では、古墳時代の遺構が検出された。遺構面は基盤層の堆積状況に加え、後述する地震断層の影響もあり、調査区東北隅から西南隅にかけての調査区中央部の標高が高く、東南側にむかって低くなっている。

第1面 基本層序第 I 層を除去すると、その下面は調査区のほぼ全域にわたって T.P.+26.8m 前後を 測る水平な面となる。これらは調査区東南部で検出された石垣に対応する一連の面をなすものであるが、 その層序は、地点によって異なっている。 すなわち調査区東南部に第 II 層および調査区西北隅から西南隅にかけて第 II 層が広がり、調査区中央付近から東北隅にかけては基盤層である第 IV 層が露出する。この第 I 層下面において調査区東北部に南北方向の鋤溝(001 鋤溝)の痕跡が認識された。

さらに調査区東南部の第II層を除去すると、調査区東南隅から北へ約5m、西へ約9mの範囲が西南から東北へのびる003 溝を挟んで南側へ一段低くなり、調査区東南隅部分でさらに急激に落ち込むことが判明した(図 $22 \cdot 23$)。さらにこの東南隅部分の掘削中に溝状遺構の輪郭が検出されたため、これを002 溝とした(図24)。

第2面 調査区西北部および東南部に分布する第Ⅲ層を除去し、基盤層(第Ⅳ層)まで掘削を行った 段階で古墳時代の遺構が検出された(図 25)。遺構は、落ち込みとその内部に築かれた竈からなり、通 有の遺構の構成とはことなるが、古墳時代の居住域として機能していたものと考えられる。

基盤層 今回の調査地における基盤層の成因を明らかにすること、および周辺で指摘されている地震断層の状況を確認するため、遺構面の調査終了後に基盤層(第IV層)の掘削を行った (図 22・23、図版 8・9)。第IV層は、調査区東北から西南にかけて帯状の微高地をなす堆積である。粗粒砂を基本とし、径 20cm を越えるような大型のものを含むきわめて多くの礫を含むが、いずれの断面を観察しても流水による堆積の構造が認められないことから、土石流によって形成されたものと考えられる。南側に隣接する平成 23 年度および 25 年度調査区でも同様の基盤層が検出されており、安威川周辺から流れ出た土石流が辺り一帯の微地形に大きな影響を及ぼしたものと考えられる。今回の調査では、第IV層中からは遺物は出土しておらず、土石流の発生年代を特定することはできなかった。

地震断層 本調査区は、茨木低地帯の北端部にあたっており、調査区東南部を西南から東北に向かって有馬-高槻構造線活断層系東部の真上断層が走っている。本調査区の東北約100mの地点では、過去に地質調査研究所によって地震断層を対象としたトレンチ発掘調査が実施されている(寒川ほか1996)。その成果として、「鎌倉〜室町時代の土層までを切り、江戸時代の遺物を含む盛り土によっ覆われる断層が」確認され、「各土層・地層の上下変位は南落ち50〜60cmであり、変位の累積は認められ

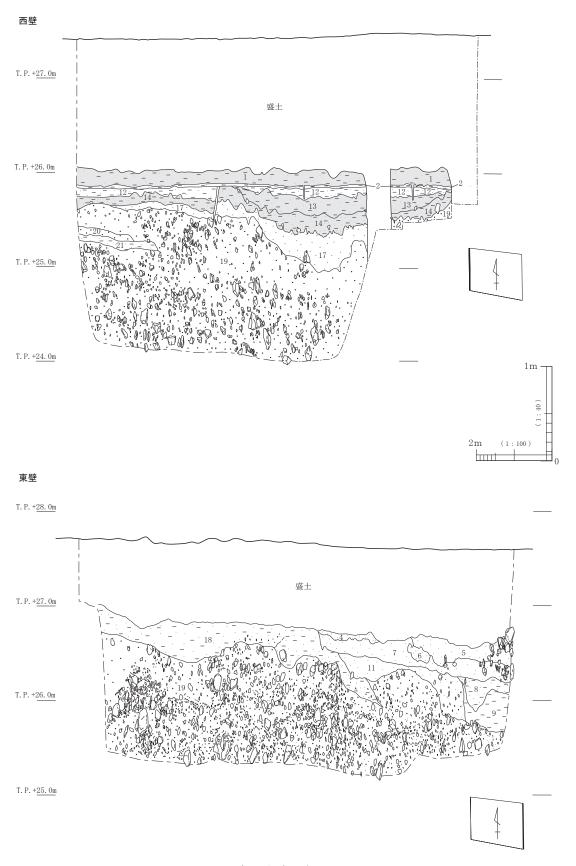
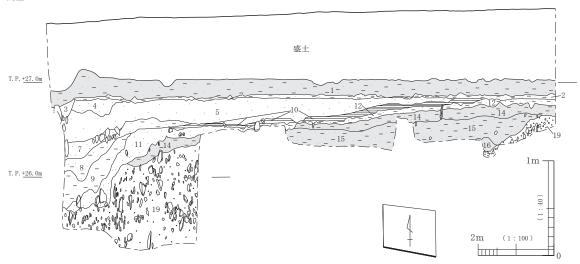


図 22 平成 24 年度調査区断面図 (1)

南壁



- 1.10YR5/2 灰黄褐色シルト質極細粒砂
- 2.7.5YR6/6 橙色シルト質極細粒砂
- 3.2.5Y6/1 黄灰色極細粒砂
- 4.2.5Y6/2 灰黄色細粒砂 (マンガン沈着)
- 5.2.5Y5/2 灰黄色細粒砂
- 6.2.5Y4/1 黄灰色細粒砂
- 7.2.5 Y6/2 灰黄色細粒砂 (やや酸化)
- 8.2.5Y6/2 灰黄色シルト質細粒砂
- 9.2.5Y4/4 にぶい黄色シルト (小礫約2%含む)
- 10.7.5YR6/6 橙色粘土
- 11.2.5Y5/1 黄灰色細粒砂(径 0.5 ~ 10cm 大の礫約 20%含む)
- 12.10YR6/1 褐灰色シルト質細粒砂 (マンガン沈着きわめて強い)
- 13.10YR6/1 褐灰色シルト質極細粒砂
- 14.7.5YR5/1 褐灰色シルト質極細粒砂
- 15.7.5YR6/1 褐灰色シルト質極細粒砂(径 0.5~5cm 台の礫約 5%含む)
- 16.2.5Y6/2 灰黄色シルト質中粒砂
- 17. 2. 5Y6/2 灰黄色中粒砂
- 18. 10YR5/2 灰黄褐色シルト質細粒砂 (径 0.5 ~ 3cm 台の礫約 1%含む)
- 19. 10YR6/2 灰黄褐色粗粒砂(径 0.5 ~ 15cm 台の礫約 20%含む)
- 20.2.5Y6/2 灰黄色粗粒砂
- 21.2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質細粒砂

図 23 平成 24 年度調査区断面図 (2)

ない」ことが報告されている。さらに南側に位置するもう一か所の調査成果と合わせて「真上断層の最新活動時期は鎌倉~室町時代以降と判断される。また、弥生時代後期以降、この活動1回だけがあったと推定される」という所見が示されている。

本調査区の断面観察でも同様の南落ちの地震断層を認識することができた。西壁断面は、断層そのものからは外れた位置にあるが、調査区南西隅から北へ約 3.7m の辺りで第 II・III 層が南に約 0.2m 下がっていることが確認できる(原色図版 1、図版 8)。また南壁断面では、西から東へ基盤層が緩やかに低くなっていき、調査区東南隅から西へ約 1.6m の辺りで東南に向かって約 0.3m 落ちていることが確認できる。断層に接する西側の基盤層は、礫が天地方向へと向きを変えている様子が観察される(原色図版 1)。さらに東壁では、北から南へ基盤層が緩やかに低くなっていき、調査区東南隅から北へ約 1.9m の

辺りで南に向かって約0.3m落ちていることが確認できる(図版9)。

南壁および東壁で確認された断層より約1.5m程度東南の調査区東南隅には、近現代の水田の石垣が存在している。これらの石垣は、元来東南へ向かって低い基盤層が地震断層によりさらに高低差が加えられた地形の凹凸に対して、少しでも広い水平面を確保するために、両者の境界付近に設けられたものと考えられる。また水田の造成土と考えられる第11層も7層以上と以下では、施された段階が異なる可能性があり、水田の面積と石垣規模の段階的な拡大を示すものと思われる。

今回の調査区では、これらの断層が生じた時期を特定する手がかりは得られなかったが、本報告では 近隣の地質調査研究所トレンチの調査成果を参照し、これを鎌倉〜室町時代以降と考えておきたい。

以上のような層序と遺構面の認識をふまえ、以下で各遺構と出土遺物について説明することとする。

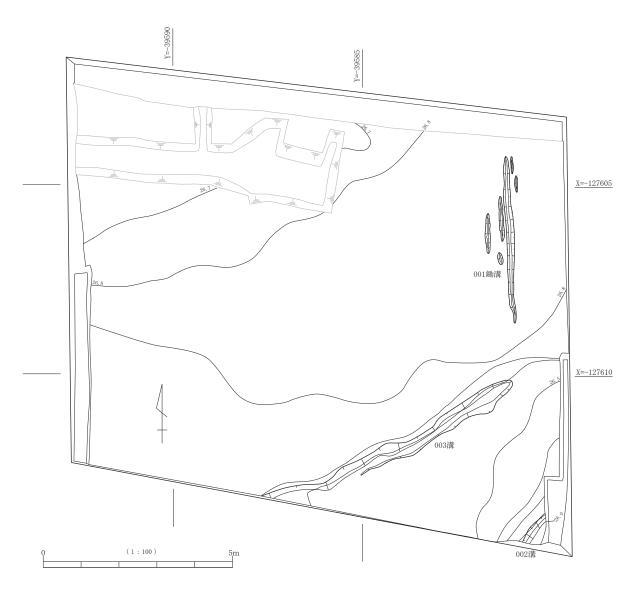


図 24 第1面遺構平面図

第2節 中近世以降の遺構

第1面では、調査区東北部で鋤溝痕跡を検出し、同東南部では、2条の溝を検出した(図24、図版3)。

001 鋤溝 調査区東北部において検出した南北方向の鋤溝痕跡である。幅 $0.1 \sim 0.2 \text{m}$ 程度の溝が南北約 4.4 m の範囲に 4 条程度並行する。埋土は灰黄色細粒砂を主体とするもので、調査区東南部に分布する、第II 層埋土に近い。溝の方向が地形に関係なく、南北方向を向くことから、かなり新しい段階に形成されたものと考えられる。第1 面としてまとめている遺構の中でも、東南部の溝との間には時期差があり、001 鋤溝が後出する可能性が高い。遺物は出土しなかった。

002 溝 調査区東南部隅で検出された、南西から北東主軸の溝である。幅 0.4m、深さ 0.1m 程度を測り、本調査区では長さ 1.6m 程度の広がりを検出した。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色シルト質細粒砂で遺物は出土していない。本遺構は、平成 23 年度調査区における 005 溝に対応するものと考えられる。既述した地震断層にほぼ対応する位置に存在することから、地震によって高低差が大きくなった上下の水田の境界を示すものとして機能した可能性がある。

003 溝 調査区東南部が一段低くなる段差の付近で検出された、西南から東北主軸の溝である。幅 0.4m、深さ 0.1m 程度を測り、調査区端から東北へ約 7.2m 伸びるが、その先は検出されていない。埋土は 2.5 Y6/1 黄灰色シルト質極細粒砂で遺物は出土していない。一段低くなった調査区東南部を区画するものとして機能した可能性がある。

第3節 古墳時代の遺構と遺物

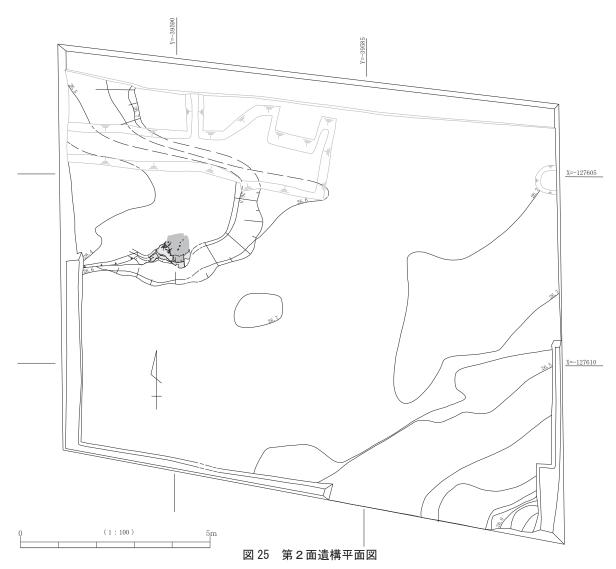
第2面では、調査区西北部において、落ち込みおよびその内部に築かれた竈跡を検出した(図24)。

(1) 遺構および出土遺物

006 落ち込み 調査区西北部で検出した落ち込みである。検出した範囲で東西約5m、南北約6mを測り、さらに調査区外西北方へ広がっている。基本的には、基盤層である第IV層の窪んだ部分にあたり、周囲から流入した土砂によって埋積されたものと思われる。調査に際しては、周囲と異なった土質の広がりが一部長方形を呈するように見えたため、竪穴建物となる可能性を考慮し、再三断面および平面の精査を行った。しかしながら、東南側は四角く屈曲するプランを持つものの、かく乱を挟んだ北側ではこれに対応する立ち上がりは認められず、基盤層は西側へ緩く傾斜している。また東南部を含め、本遺構の掘方はなだらかで、通有の竪穴建物の壁のような立ち上がりが認められない。また床面には凹凸があり、周壁溝や柱穴も認められない。以上の理由により、本遺構を落ち込みとして扱うこととした(図25・26、原色図版2、図版4)。

周囲の基盤層を構成する礫層(18 層)が T. P. +26. 6m 前後を測るのに対し、006 落ち込みの中央部では、 T. P. +26. 0m 前後と低くなり、その上位に中粒砂層(17 層)が 0.4m 程度の厚さで堆積している。 17 層は、 調査区の南側へ行くにつれて薄くなり、調査区南東隅から北へ約 1mの辺りから南側には分布していない。 なお既述の通り 18 層は断面を観察しても、流水による堆積の構造が認められないことから、土石流によって形成された堆積と考えられる。

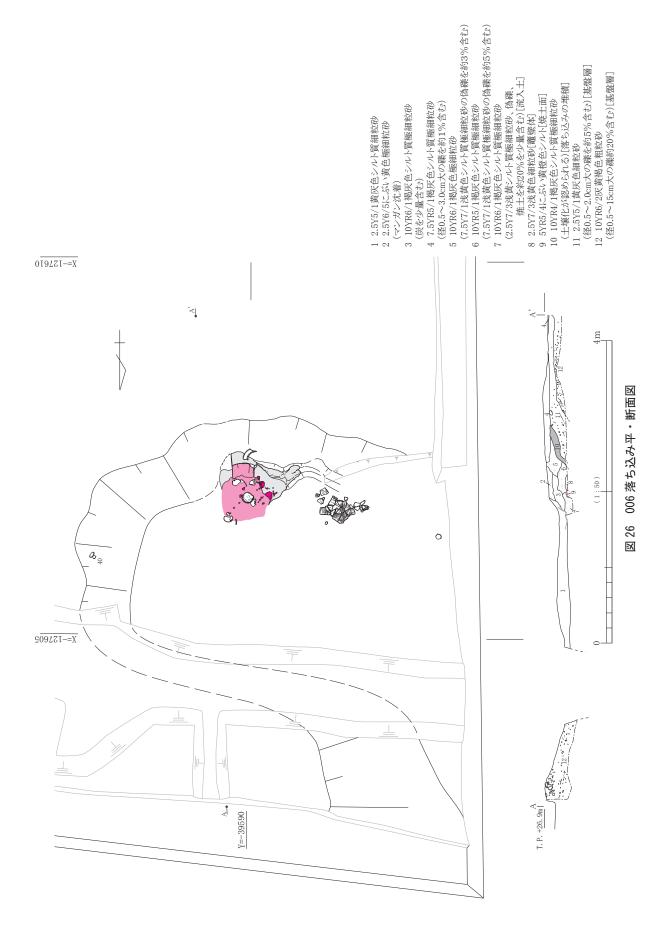
17層の上位には、土壌化の顕著な13層が堆積している。両層の境界線は、入り組んだ複雑なもので



あり、17 層が地表面に露出した期間に形成された古土壌が13・14 層であると考えられる。14 層は調査区の広い範囲に広がった古墳時代後期の遺物包含層であるが、周囲より相対的に標高の低い本落ち込みの中に特に厚く堆積し、内部から遺物が多く出土している。遺物については、後述する007 竃に伴うものと併せて説明する。

上記にもとづき本遺構のなりたちを次のように考えておきたい。まず、土石流によって調査区中央の礫層(19 層)の高まりが形成される。次に相対的に微低地化した西北部に緩やかな水流が生じたことによって 17 層が堆積する。その後、地形が安定化して、周囲から堆積物が流入するとともに土壌化が進行し、17 層の上位に 13・14 層が形成される。後述する 007 竈は、この落ち込みの堆積およびその表面の土壌化が一定程度進行した段階で構築されたものと考えられる。土壌の堆積は、竃の廃絶後も進行したと考えられ、006 落ち込み内の 13・14 層は、厚さ 0.4m 以上を測る。このように 006 落ち込みでは、長期間にわたって堆積および土壌化が継続したものと考えられる。最終的に浅い窪地状になった状態で、中近世水田の床土である 12 層が施されることによって周囲の地形と合わせて水平になったものと理解できる。

居住域の一部として利用された年代は、出土遺物から6世紀後半(Ⅱ型式4段階)に位置付けられる。





- 1 10YR6/1褐灰色シルト質極細粒砂(炭を少量含む) 2 10YR6/1褐灰色シルト質極細粒砂(焼土および7.5Y7/3浅黄色シルト質極細粒砂の偽礫約20%含む)[流入土] 3 10YR5/1褐灰色シルト質極細粒砂(焼土および2.5Y7/2灰黄色シルト質極細粒砂の偽礫約40%含む)[竈機能時の壁体] 4 10YR4/1褐灰色極細粒砂(焼土および2.5Y7/2灰黄色シルト質極細粒砂の偽礫約40%含む)[竈機能時の壁体] 5 10YR4/1褐灰色シルト質極細粒砂(弱い土壌化が認められる)[旧表土] 6 2.5Y5/1褐灰色シルト質極細粒砂(径0.5~3cm大の礫約1%含む)[基盤層]

図 27 007 電平・断面図

007 電 006 落ち込みの南側立ち上がりに構築された竃である(図 27、原色図版 2、図版 $5 \sim 7$)。 上部構造や袖などの構造は不明であるが、粘質土を用いて構築された燃焼施設であり、石製の支脚も備えていることから、簡易な竃として取り扱うこととする。

006 落ち込み内の土壌化した堆積(図 26-10 層、図 27-5 層)を若干掘り込み、床面から壁面にかけて黄灰色の粘質土を含む層(図 27-3・4 層)を貼り付け、中央に柱状の石を据えて支脚としたものと考えられる。支脚に用いられた石は、長さ約 19cm、幅約 9 cm を測る川原石である。

粘質土の分布範囲は、南北約 0.9m、東西約 1.1m を測り、支脚より北西側の南北約 0.8m、東西約 0.6m の範囲には焼土が分布する。支脚北西側の焼土の分布範囲の中心には、径約 0.2m の範囲に薄く炭層の 広がりが認められ、燃焼の中心にあたっていたことがうかがわれる。炭層の周囲には、焼土塊が取り巻いているが、北側には分布せず、本来の開口部の位置を示すものと考えられる。

図 27-2 層には、焼土や粘土ブロック(偽礫)が多く含まれており、竃廃絶後に壁体の一部とともに内部に堆積した流入土と考えられる。

竈の内外からは複数の土師器・須恵器が出土した(図 28、図版 23・24)。竈の燃焼部の中心には、口縁部の一部を欠いた須恵器坏身(35)が据えられていた。床面からやや浮いた状態で検出されており、竈の機能時の姿を示すものではなく、廃絶に伴って配置されたものと考えることが自然であろう。そのほか焼土の分布範囲から複数の土師器片が検出されたが、これらについても廃絶後の状況を示すものと考えられる。さらに竃の中心から約1m西の位置で土師器甑(38)が検出された。006 落ち込みの床面に位置し、底部を北東に向けた横倒しの状態でほぼ完形品である。その他、006 落ち込み床面からは、高坏(40)なども出土しており、竈の機能時から廃絶後の状況を示すものと考えられる。

一方、竈の構築段階に伴う遺物として、壁体の粘質土に埋め込まれた2点(41・42)の羽釜片がある。 2点は、よく似た器形であるが別個体と考えられ、いずれも口縁部から鍔部にかけての破片で体部片は 出土しなかった。

以上の通り、本遺構は、基盤層の凹部を利用して築かれた竃であると考えられる。竃周辺では、再三の遺構精査を行ったが、明瞭な付属施設等は認識できなかった。近畿地方では古墳時代の竃あるいは火処は、竪穴建物に伴うことが通有であるのに対し、本例では屋外に位置することが特徴的である。利用に際しては、雨風の影響が想定されることから、本来は遺構としての痕跡が残りにくい簡単な付属施設(覆屋)が伴ったと考えるべきかもしれない。出土遺物の年代から6世紀後半(Ⅱ型式4段階)に位置付けられる。

006 落ち込み・007 電出土遺物 35 ~ 40 は、電機能時あるいは廃絶後の段階に伴うと考えられる遺物である。41・42 は、竃の壁体に埋め込まれた遺物である(図 28、図版 23・24)。

35 は、須恵器坏身である。口径 13.5 cm、器高 3.6 cm を測り、体部は浅く、焼け歪みによって中位がわずかに凹んでいる。たちあがりは、やや短く内傾し、端部は丸い。底部の外面 1/2 前後に回転へラケズリ調整が施される。以上の特徴により、この個体は \mathbb{I} 型式 $4\sim5$ 段階に属するものと考えられる。36・37 は、土師器甕である。36 は、口径 19.0 cm を測る。くの字状に屈曲した頸部の稜線が明瞭であり、口縁端部は面を持つ。37 は、口径 12.8 cm、器高 16.3 cm を測る丸底のものである。体部外面にハケメ、内面をナデ調整で仕上げる。頸部の屈曲は緩く、稜線は不明瞭であり口縁端部は丸い。体部外面中位以

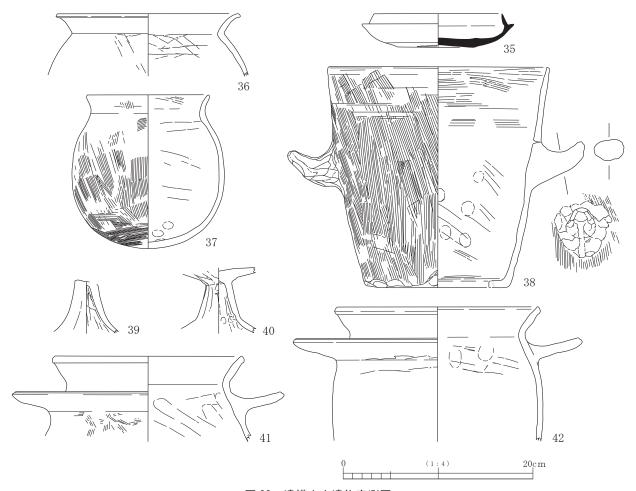


図 28 遺構出土遺物実測図 (35 ~ 40:006 落ち込み 41・42:007 竈壁体内)

下に薄くススが付着する。38 は、土師器甑である。口径 22.8cm、器高 23.5cm を測る。左右一対の把手をもつもので、把手の断面系は、やや平たく、体部の器壁内面から差し込まれている。左右の把手の下面にはそれぞれ棒状工具による指示痕跡が認められる。体部外面は、縦方向のハケメ調整、内面はナデが主体であるが、口縁部付近には横方向のハケメ調整が認められる。蒸気孔の形状は不明である。39・40 は、土師器高坏脚部である。いずれも中実の脚頂部に坏部を作りつけるタイプのものである。

41・42 は、土師器羽釜である。41 は、口径 19.6cm を測る。ゆるく屈曲した頸部の下位に幅 5 cm 程度の鍔が巡らされている。口縁端部は、明瞭な面をもつ。42 は、口径 21.0cm を測るもので、41 に類似するが、同一個体ではない。外面の鍔下面及び内面の頸部下位周辺に薄くススが付着する。

(2) 包含層等出土遺物 (図 29、図版 24・25)

第Ⅲ層出土遺物 43・44 は、須恵器坏蓋である。43 は、細片であるが、扁平な器形で口縁端部は丸く仕上げている。44 は、やや丸みを帯びた器形となるものと思われ、口縁端部は丸く仕上げている。45 は、須恵器坏身である。底部の外面 1 / 2 前後に回転ヘラケズリ調整が施される。

第IV層出土遺物 46 は、須恵器坏蓋である。口径 14.0cm、器高 4.25cm を測る。丸みをおびた器形で口縁端部は丸く仕上げる。47 ~ 50 は、須恵器坏身である。いずれも器高が低く、扁平な器形となるも

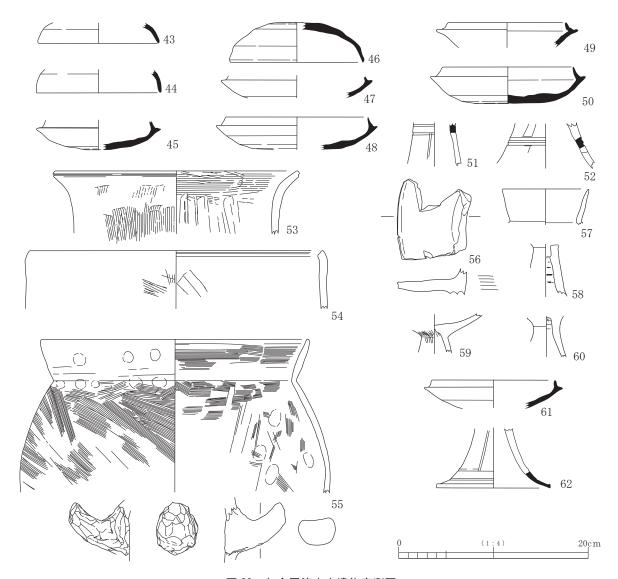


図 29 包含層等出土遺物実測図 (43 ~ 45:第Ⅲ層 46 ~ 60:第Ⅳ層 61・62:サブトレンチ内)

のと思われる。たちあがりは、やや短く内傾し、端部は丸い。底部の外面 1/2 前後に回転ヘラケズリ調整が施される。

51・52 は、須恵器高坏脚部である。いずれもいわゆる長脚二段高坏であり、長方形の透かし孔が3方に穿たれたことが確認できる。53 は、一応土師器甕としておくが、頸部の屈曲がきわめて弱い。外

面に縦方向ハケメ、内面はナデを主体とするが口縁部付近には横方向のハケメ 調整が認められる。口縁端部はナデによって沈線状の痕跡が残されている。54 は、土師器甑かと考えられるものである。口縁端部は、内傾する面をもつ。55 は、土師器鍋である。口径 28.0cm を測る。頸部は緩く屈曲しながらも稜線は明 瞭である。体部調整は、内外面ともハケメ調整を基本とする。口縁端部は丸く 仕上げられる。接合はしないものの、把手がともに出土していることから、鍋 になる可能性が高い。56 は、土師器羽釜の鍔である。57 は、土師器壺である。 口径 9.0cm を測る小型の直口壺である。58 ~ 60 は、土師器高坏脚部である。58

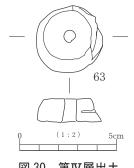


図 30 第IV層出土 遺物実測図

の内面には横方向のケズリが施されている。59 の脚部頂部内面には細い棒状工具による刺突痕が確認できる。60 は、中実の脚頂部に坏部を作りつけるタイプのものである。63 は、滑石製紡錘車である(図30)。断面台形を呈し、中央部に円孔が穿たれる。直径 3.4cm、高さ 1.2cm、孔径 0.6 ~ 0.7cm を測る。

サブトレンチ出土遺物 61・62 は、調査区南壁沿いに設定したサブトレンチ掘削中に出土した遺物である。本来は第4層に包含されたものと考えられる。61 は、須恵器坏身である。器高が低く、扁平な器形となるものと思われる。たちあがりは、短く直立し、端部は丸い。底部の外面1/2前後に回転ヘラケズリ調整が施される。62 は、須恵器高坏脚部である。いわゆる長脚二段高坏であり、下段の透かし孔から脚端部にあたる。透かし孔は三方に穿たれたことが確認できる。

注

1) 断面観察に際しては、独立行政法人産業技術総合研究所寒川旭氏および東大阪市鴻池新田会所管理事務所別所秀高氏よりご教示をいただいた。

第6章 平成25年度調查区

第1節 層序および遺構の分布

層序 平成 25 年度調査区は、北西部にみられる断層による段差により基盤層が南に傾斜する地形と なっており、近世以降の耕作土である第Ⅰ層、第Ⅱ層ともに段差を生じている。古墳時代の包含層であ る第Ⅲ層は、北半部は薄く、下位の第Ⅳ層(基盤層の砂礫層)がすぐ現れたのに対し、南半部分は基盤 層が南へ傾斜しており、その上に砂質土が堆積していた。基盤層は調査区以南においても南へ傾斜する と考えられる。なお、調査条件により調査区を北区、南区に分けて実施した。

第1面 盛土を除去した後に検出された近現代の水田およびそれに伴う石垣である。これは調査区周 辺で現在も耕作されている水田および石垣と一連のものである。調査区内の近世〜現代水田面と周辺の 水田おける標高は当然のことながら段差ごとに一致してくる。

石垣1および石垣2 (図版 10・11) 上記のとおり断層による段差が平成25年度調査区の北西隅に

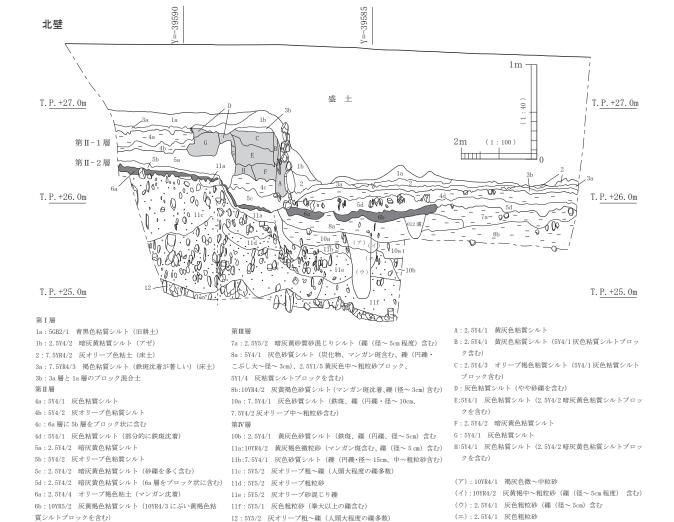


図 31 平成 25 年度調査区断面図 (1)

12:5Y5/2 灰オリーブ粗~礫 (人頭大程度の礫多数)

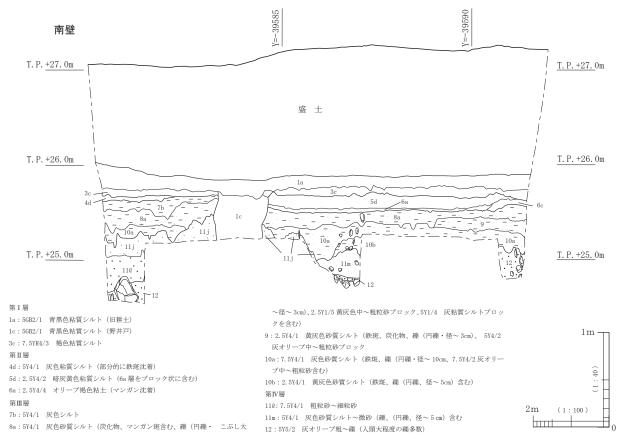


図32 平成25年度調査区断面図(2)

あり、この上に、北東-南西方向に石垣 1 を築いている。一方で石垣 2 は調査区の中央やや北よりで西北西-東南東方向に築かれている。断層以南では基盤層が南に向かって傾斜しているが、石垣 2 の直下でも断層によって形成された基盤層の段差が存在すると考えられる。そのため傾斜の途中で地形を区切るために構築されたものであろう。石垣 2 以南については、第 I 層水田面はほぼフラットであった。なお図示できない細片であるが、石垣 1 の裏込め土から 17 世紀前半の志野長石釉丸皿の小片が出土しており、また第 I 層からは 19 世紀の陶器片が出土しているので、石垣の形成時期は 19 世紀以降と考えられる。

第2面 第Ⅱ層を除去し第Ⅲ層上面で検出した遺構面である。中世の溝およびピットを検出している。 なお北区と南区の境で南への落ち込みを検出したが、後述するとおり遺構面としては第2面で把握した が、時期は古墳時代の遺構であるため、第4節でとりあげる。

第3面 第Ⅲ層中および第Ⅳ層上面において古墳時代中期から後期にかけての遺構が検出された。北区の第Ⅳ層上面では遺構は検出されなかったが、南へ傾斜する砂礫層の上部に堆積した砂質土を掘り込む土坑、およびこの傾斜面に落ち込みや土坑を検出している。なおこの砂礫層の傾斜面は古墳時代後期後半以降に整地されている可能性が高いことが、堆積層の観察や土壌分析の結果から考えられる。

基盤層 北区の基盤層については平成24年度調査区で検出されている段差と同様の段差をなしていたため、断割りを行い段差の形成要因を把握した。その結果、砂礫層中に2本の不整合面を確認し、その部分で段差が2段形成されていることが観察された(図31、図版19)。これは平成24年度調査区で確認された段差の延長部分と、その下位にさらに1段の段差があることになる。1段下の段差は砂礫

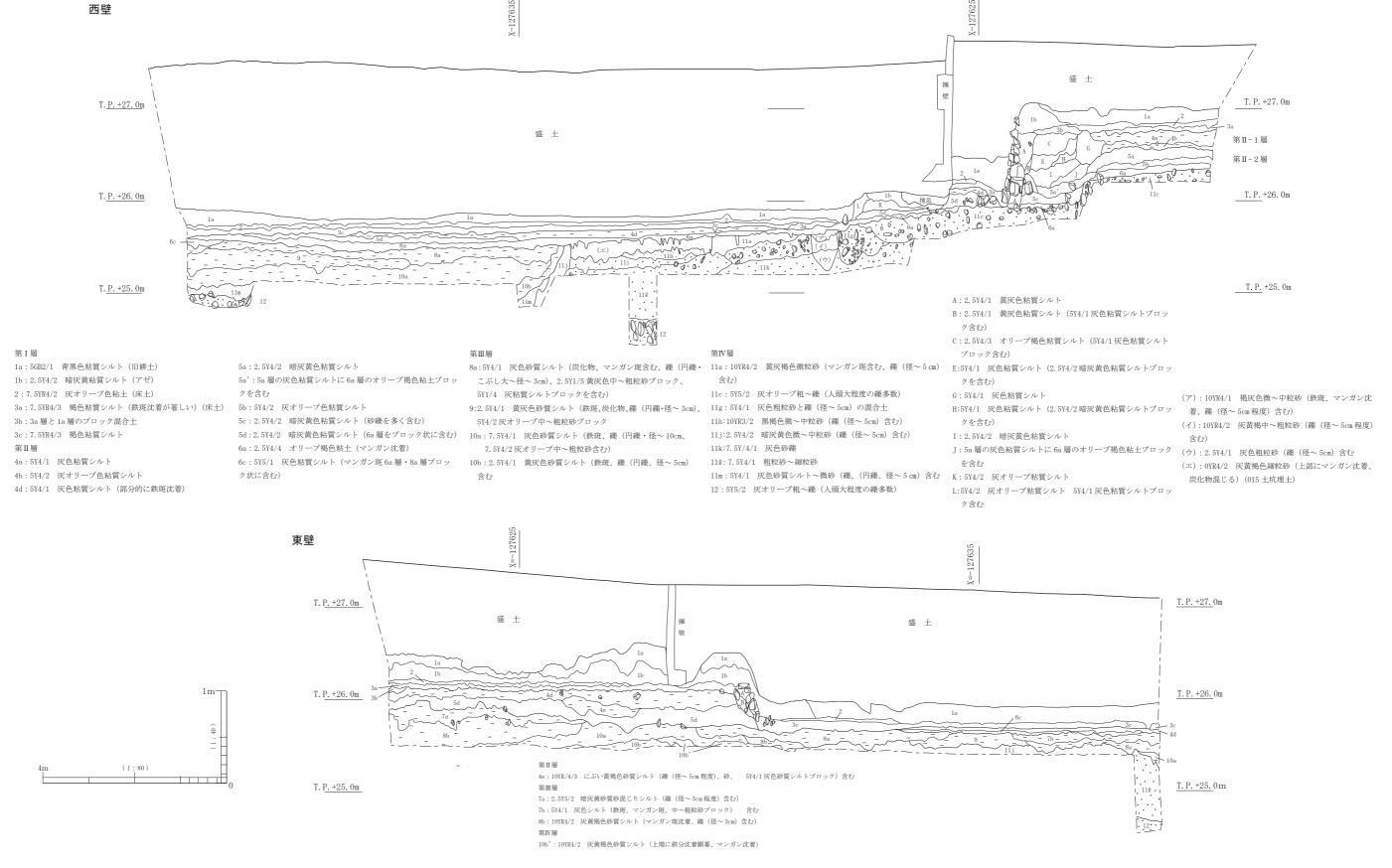


図 33 平成 25 年度調査区断面図 (3)

層の上位に古墳時代後期後半以降に堆積した8層 (8a、8b層) や10層 (10a、10b層) が堆積している。また第 II 層を構成する6層 (6a層) は1段目の段差では第IV層とともに下方へずれているが、2段目の段差では下方へずれずほぼ水平となっている。したがってこの2つの段差は同時期ではない可能性が考えられる。

第2節 中近世以降の遺構と遺物

第1面として把握した、第1層を除去した後に 第11層上面で検出された石垣構築前における近世 の水田面である。石垣構築前においても、段差に より平坦面は、①断層による段差上面、②断層に よる段差から石垣2構築ラインまで、③石垣2構 築ライン以南、の3つに区分できる。上記の石垣 構築は、それ以前における耕作地の段差を踏襲し ていることが分かる(図34、図版10)。

第 I 層から出土した遺物には、近世陶磁器片、青磁碗片等がある(本章第 5 節)。

第3節 中世の遺構と遺物

第Ⅱ層を除去し、第Ⅲ層上面で検出した第2面において、中世の溝、ピットを検出している(図 35、図版 11・12)。

012 溝 (図 35、図版 11) 北区で検出した溝である。平成 23 年度調査区の 006 溝の延長部分である。 検出長 4.7m、幅 0.6m、深さ 0.2m である。埋土は暗オリーブ色砂質シルトで礫を多く含んでいる。遺物 は出土していないが、平成 24 年度調査区 006 溝の出土土器により 12 ~ 13 世紀頃の溝と考えられる。

001 ピット (図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.2m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

002 ピット (図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.2m、深さ 0.15m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

003 ピット (図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.25m、深さ 0.15m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

004 ピット (図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.3m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

005 ピット (図 35、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.3m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

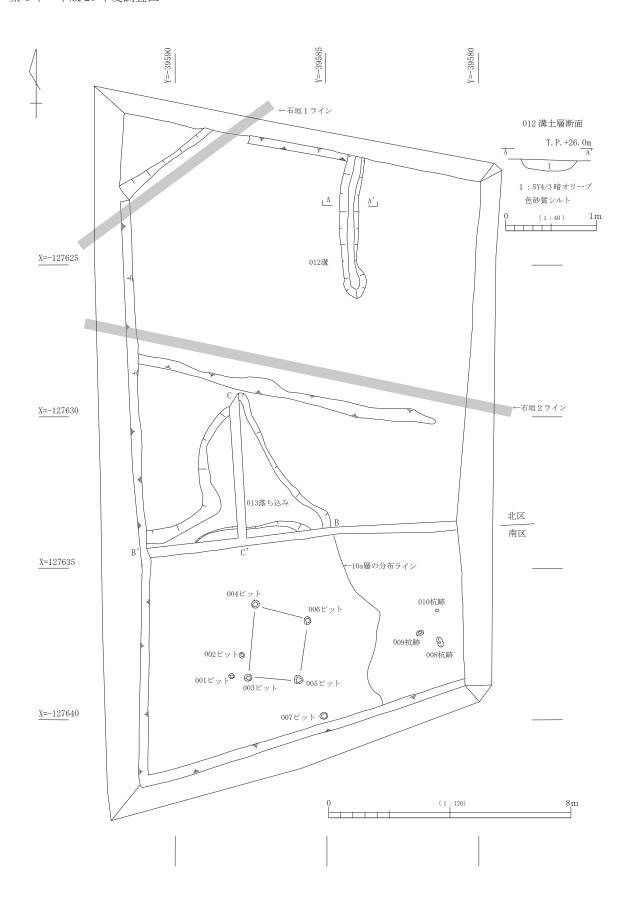


図 35 第2面遺構平面図

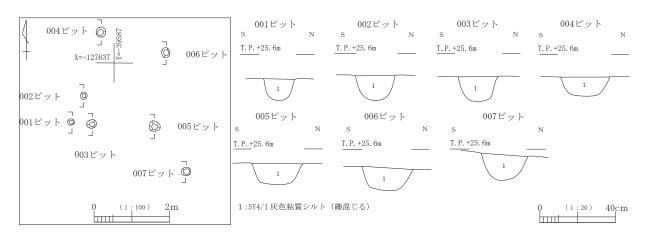


図36 第2面検出ピット平・断面図

006 ピット(図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.25m、深さ 0.1m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

007 ピット(図 36、図版 12) 南区で検出した平面形が円形を呈したピットで、8a 層上面で検出した。 径 0.25m、深さ 0.15m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

008 杭跡~010 杭跡 南区南東部で検出した杭跡で径5 cm ほどの杭跡である。

これらピットのうち、003 ピット、004 ピット、005 ピット、006 ピットについては、ピットの並びと 平面形にばらつきがあり、建物形としてはいびつであるが、掘立柱建物になる可能性がある。農作業小屋のような簡易な建物であったと考えられる。第 Π 層の出土遺物については後述する(本章第5節)。

第4節 古墳時代の遺構と遺物

第3面は、古墳時代中期~後期の遺物包含層である第Ⅲ層中、および第Ⅳ層(基盤層)上面で検出した(図39、図版13・14)。上記の石垣2ラインより北は、断層による段差部分を含め、第Ⅲ層の影響により、第Ⅳ層(基盤層)がむき出しになる部分もあったが、石垣2ライン以南については、第Ⅳ層が南へ傾斜しながら窪地を形成しており、その上位に砂質土(H25-11h・11i 層など)が堆積している。この砂質土を掘り込む形で古墳時代中期初頭頃の土坑が1基、また土坑の廃絶後に窪地を人為的に埋める過程で形成された浅い土坑があり、ここから古墳時代後期後半を中心とする土器が出土している。なおこの土坑が埋まりきる際に、浅い落ち込み状になっていた部分があり、これが第2面で確認した013落ち込みであり、本節で報告する。

013 落ち込み(図 37、図版 13) 調査区の中央から南側かけて検出された大きな落込みで、整地土である 10a 層を埋土とする。正確には 10a 層の分布範囲ということになるが、特に北区については 10a 層の落込みラインが明確に確認できたため、この部分について 013 落ち込みとして把握した。調査時点では南区で確認したピットと同様、整地土である 8a 層上面で検出したため、第1面として中世の遺構と把握していたが、出土遺物および埋土の堆積状況により、古墳時代後期以降に形成されたものと考えられる。埋土は灰色砂質シルトである。なお、8a 層については、堆積土の形成要因を明らかにするため土壌分析を行っている(第7章)。

遺物は須恵器が出土している(図 38-64 ~ 67、図版 26)。なお 8a 層出土遺物は包含層出土として後

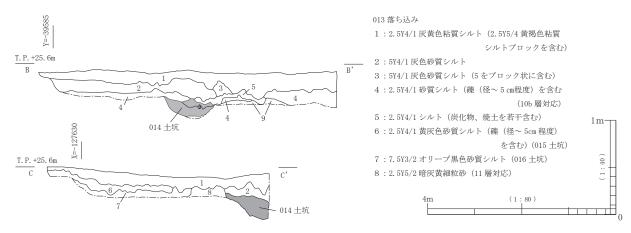


図 37 013 落ち込み断面図

述する。64・66 は坏身である。64 はほぼ 完形である。Ⅱ型式5段階(中村1978) に属する。65 はやや内傾ぎみに立ち上が り端部は丸く面をもたない。Ⅲ型式4段階 に属する。66 は立ち上がり部が欠損する。 67 は甕口縁部で、風化、磨滅のため灰 白色を呈する。017 土坑直上で出土した甕 口縁と形態的に類似する。6世紀後半に属 すると考えられる。

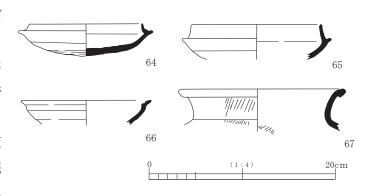


図38 013 落ち込み出土遺物実測図

以上の遺物により013落込みの時期は古墳時代後期末以降(6世紀末以降)と考えられる。

016 土坑 (図 40・図版 14・15) 調査区中央西側で検出した平面形が隅丸方形を呈する土坑で、第 II 層の除去後に検出した 015 土坑の下位から検出された。したがって 015 土坑に先行する遺構と考えられ、規模は一辺 3.0m、深さ 0.4m を測る。017 土坑を切っているため、017 土坑より新しい。

掘方は北辺および西辺が緩やかに立ち上がり、東側、南側はややきつく立ち上がる。床面は埋土に 凹凸があったため、明確な平坦面としては検出されなかったが、およそ土器の出土状況により底面は T.P.+25.1mを測ると考えられる。竃や火床となるようなものは検出されておらず、また柱穴となるよ うなピットも検出されていない。周囲からも上屋構造に関連するようなピット等は検出されていないた め、竪穴建物とは判断せず土坑とした。

埋土は大きく3層に分けられる。上層は灰黄色~灰オリーブ色の砂質シルトである。中層はオリーブ 黒色砂質シルトで下層のブロック土を含む。中層からは土師器甕、高坏等の土器、鉄器、台石とみられ る平たい石等が出土している。この遺構の機能時にこれらが置かれそのまま廃棄されたと考えられる。 中層の底面は上記のとおり通常考えられる竪穴建物の床面のように、平坦にはなっておらず、廃絶後の 植物等による擾乱とみられる凹凸が顕著であった。下層は灰オリーブ色の砂質シルト~細粒砂で中層の ブロック土を含む。

遺物は、上層、中層より出土している(図41~43、図版15・27~29)。

68~73は土師器甕である。68は底部付近をわずかに欠損するもののほぼ完形である。球形に近い器

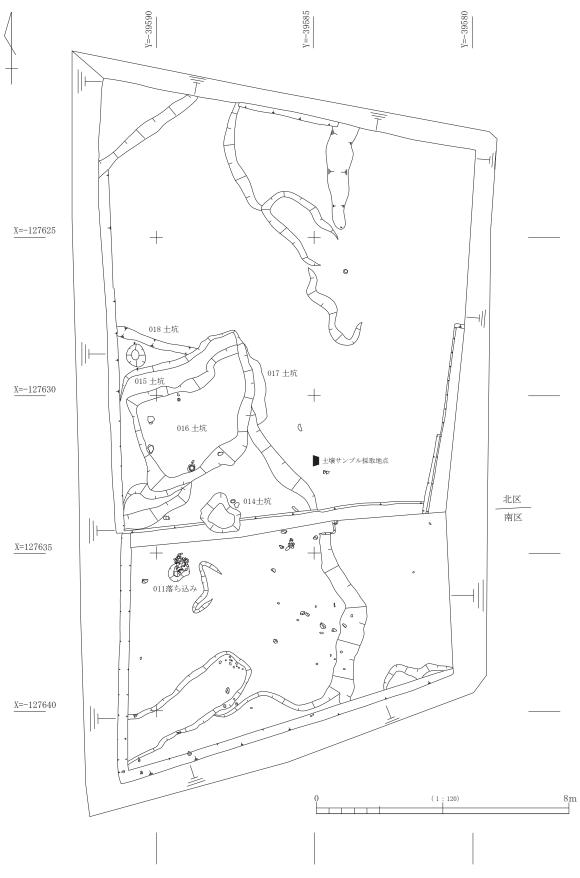


図39 第3面遺構平面図

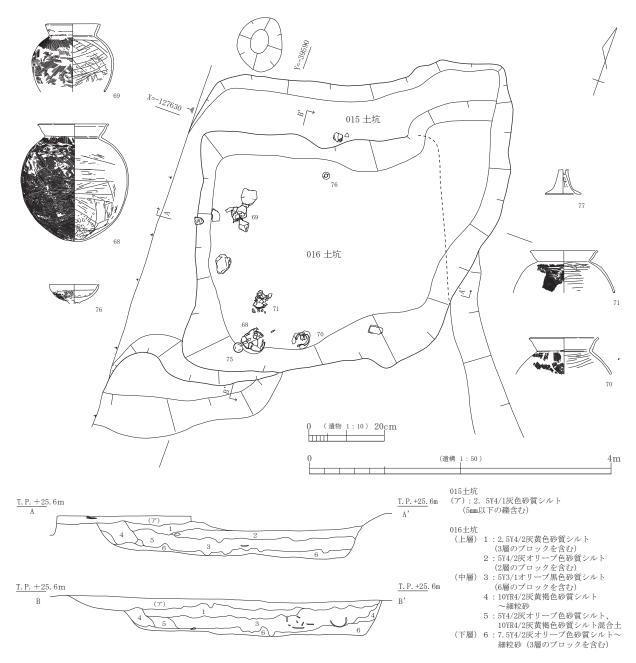


図 40 015 土坑・016 土坑平・断面図

形で底部はややすぼまる形態を呈する。口縁部は外傾し直線的にのび、内面はヨコナデ、中央を強めにユビナデ調整しているため少しくぼむ。外面はヨコナデで、端部直下を強くユビナデしているため浅くくぼむ。したがって口縁部断面は緩いS字状を呈する。また端部は面をもつ。体部外面はハケメ調整で、内面上半はケズリの後ナデ、下半はケズリで底部内面はユビオサエが顕著にみられる。内面のケズリは頸部直下までみられ、屈曲部内面には板状の工具による調整痕が沈線状にめぐらされている。中層出土。69 は胴部下半が欠損する。口縁部は直立ぎみに外傾し、内外面ともヨコナデ、端部に面をもつ。体部内面のケズリは頸部直下までみられ、屈曲部は稜をもたず丸みを帯びる。中層出土。70 は体部下半を欠損するが1と同様の特徴をもつ。中層出土。71 は口縁部から体部の破片で、口縁部は外傾し、端部に面をもつ。調整は68、70 と同様である。中層出土。72 も口縁部から体部上半の破片で、厚手の口縁

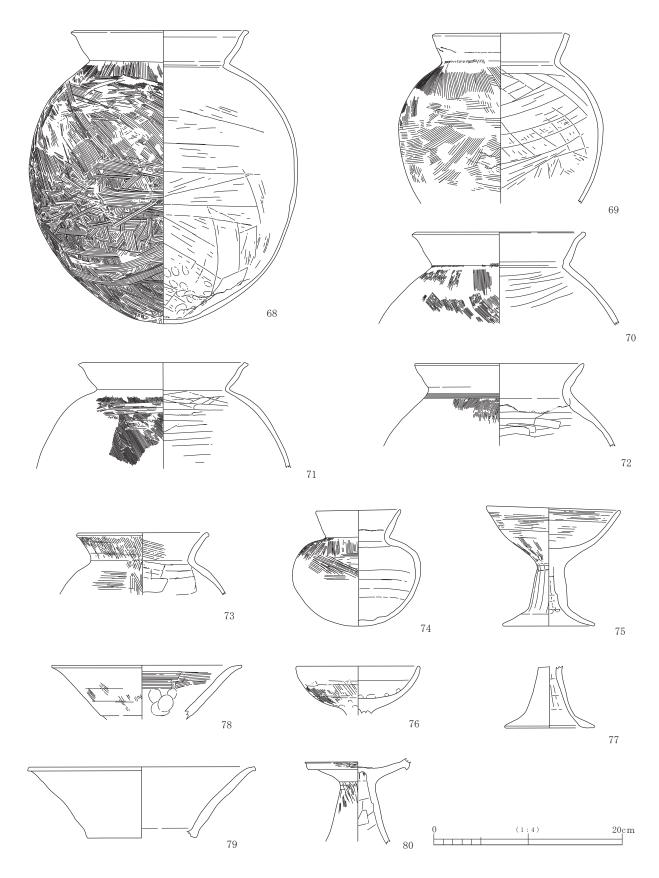


図 41 016 土坑中層出土遺物実測図

部が外傾してのび、内外面とも工具によるヨコナデがみられる。体部外面は磨滅が著しいがハケメ調整で、内面はケズリが頸部接合面までみられるが、屈曲部まではみられない。このため屈曲部は面をもたず丸く仕上げている。なお内面にオコゲ状の炭化物が付着している。中層出土。73 は口縁部が外傾してのび、内面はハケの後ヨコナデ、外面はタテハケの後ヨコナデを施す。外面の端部直下は強めのヨコナデにより浅い窪みがめぐる。体部内面は頸部直下までケズリが施され、屈曲部は面をもつ。体部外面はハケの後ナデを施す。中層出土。

74 は土師器直口壺である。直立ぎみに外傾する口縁部で、調整は内外面ともにヨコナデである。体部外面は上半がハケメ、下半部がナデ、内面は上半が工具によるナデ、下半はナデ、ユビオサエで調整されている。体部上半に最大径が位置する。中層出土。

75~80は土師器高坏である。いずれも中層から出土した。75は塊形高坏である。 口縁部は外方にのび、端部は丸くおさめる。坏部は内面がヨコナデ、外面もヨコナデがみられるが、口縁端部直下にハケメを残す。脚部は外面がタテ方向のケズリ、裾部はハケの後ナデで調整されている。内面は中空でヘラケズリされている。 76は塊形高坏の坏部で脚部を欠損している。内彎する口縁部は端部を丸くおさめ、 内外面はヨコナデがみられるが、外面下半はハケの後ヨコナデを施す。77は脚部のみで小型である。全体に磨滅が著しい。内面は中空でヘラケズリを施す。78~ 80は大型高坏である。78は内面ナデ、外面はハケの後ナデが施されており、口縁

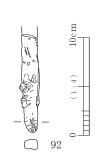


図 42 016 土坑 出土鉄製品実測図

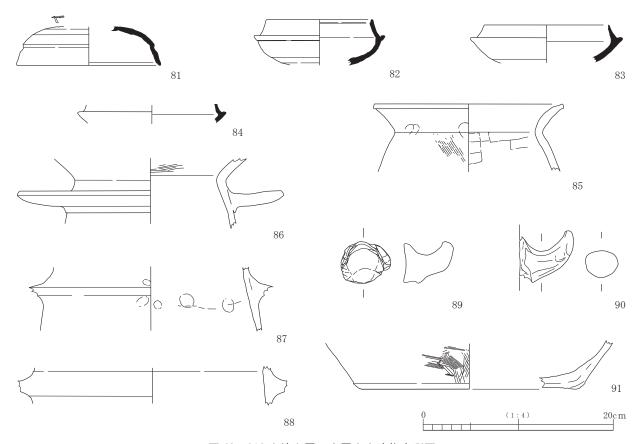


図 43 016 土坑上層~中層出土遺物実測図

(81~84:上層 85~91:上層~中層)

端部に面をもつ。79 は内外面ともにヨコナデが施されており、口縁端部に面をもつ。80 は大型高坏の脚部である。部分的に被熱している。外面は縦方向のケズリ、内面はケズリを施す。

 $81 \sim 84$ は上層より出土した須恵器である。81 は坏蓋で、外面ににぶい稜をもち、口縁端部に面をもつ。天井部にヘラ記号がみられる。 II 型式 $2 \sim 3$ 段階に属する。 $82 \sim 84$ は坏身で、82 は内傾ぎみに立ち上がり、端部に面をもつ。 II 型式 1 段階に属する。83 は内傾ぎみに立ち上がり、端部は丸くおさめる。 II 型式 4 段階に属する。84 は短く屈曲する立ち上がり部に内傾

11 全八年段階に属する。64 は虚く屈曲する立ち上がり間に内関する口縁部をもつ。Ⅱ型式4段階から5段階に属する。

85 は土師器甕である。口縁部はやや厚手で外反し、内面はヨコナデ、外面は工具によるヨコナデを施す。端部に面をもつ。体部内面は工具によるナデ、頸部の屈曲部は面をもたず、丸みを帯びる。上~中層出土。

86~88は土師器羽釜である。いずれも上~中層出土。86は外 反する口縁部をもち、端部は欠損している。口縁部内外面ともに ヨコナデを施す。体部外面は剥離のため調整は不明、内面は工具 によるヨコナデ、頸部内面は丸みを帯びる。鍔は厚手で幅5.5cm を測り、端部に面をもつ。上下面ともにヨコナデを施す。87は 口縁端部、鍔端部を欠損している。内外面ともにヨコナデが施さ れている。88は体部破片で鍔が欠損している。

89・90 は甑ないしは鍋の把手である。上~中層出土。

91 は甑の底部と思われるが別の器種の可能性もある。外面はハケメが施されている。

92 は刀剣類の茎と思われる鉄製品である。全体が 錆に覆われている。中層出土。

以上の遺物のうち、上層出土については6世紀代の遺物が含まれることから、土坑の埋没の過程で堆積したと考えられる。中層については完形の土師器甕、直口壺、高坏が含まれ、機能時の状況をある程度反映していると考えられる。土師器の特徴から布留式期Ⅲ~Ⅳ(米田1991)に属すると考えられるため、所属時期は古墳時代前期後半から中期初頭頃(4世紀後半~5世紀初頭頃)と考えられる。

014 土坑 (図 44、図版 16) 調査区の中央やや南側で検出された不定形の土坑である。長軸は 1.3m、短軸 1.2m、深さ 0.25m を測る。埋土は上下 2 層に分けられ、上層は炭化物を含む黒褐色粘質シルト、下層は黄灰色~灰オリーブ色の細粒砂層である。

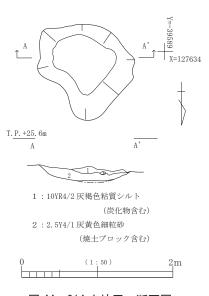


図 44 014 土坑平·断面図

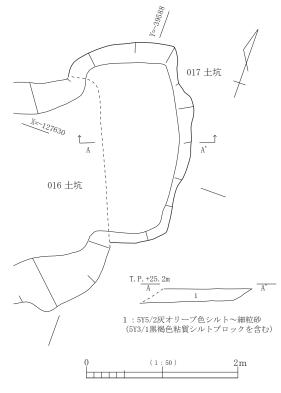


図 45 017 土坑平・断面図

遺物は土師器甕の破片が出土している(図47-93、図版27)。厚手で外傾する口縁部であり、内面は 工具によるヨコナデ、外面はヨコナデ、端部に面をもつ。体部内面はナデ、外面は不明瞭ながらハケメ がみられる。016 土坑と同様の時期と考えられる。

015 土坑 (図 40、図版 14・16) 調査区の中央西側で検出された土坑である。西辺は西壁でも観察でき、 調査区外にのびている。長軸 4.4m、短軸 3.8m、深さ 0.1 ~ 0.2m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。 平面形がいびつな長方形を呈しており、建物遺構になるものではないと考えられる。016 土坑が廃絶後 に埋め戻され、最終的に調査区北側の砂礫層まで整地される過程で形成された遺構と考えられる。

遺物は、須恵器、土師器が出土している。(図 47-94~99、図版 27)。

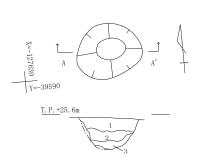
94・95 は須恵器坏身である。94 は口縁端部が欠損している。Ⅱ型式3段階に属すると考えられる。 95 は短く内傾する立ち上がりをもつⅡ型式4段階と考えられる。96 は甕である。口縁端部は丸くおさめ、 胴部外面はカキメ、内面は同心円タタキが施されている。6世紀後半頃か。

97 は大型二重口縁壺の口縁部かと思われる。98 は埦形高坏の坏部 である。99は羽釜の頸部から鍔にかけての部分である。

これらの遺物から、015土坑は6世紀後半と考えられる。

017 土坑 (図 45・図版 17) 016 土坑の東で検出された長方形を呈 する土坑である。検出時で長軸は3.0m、短軸は1.5mである。016土 坑に切られているため全体規模は不明である。016 土坑と同様に第IV 層上位に堆積した砂質土を掘り込んで形成されている。埋土は灰オ リーブシルト〜細粒砂である。

遺物は、検出時に遺構直上から須恵器甕の口縁部破片が出土してい る (図 47-100、図版 27)。風化、磨滅により灰白色を呈している。 6 世紀に属するもので、016土坑、017土坑が整地される過程で混入し たものとみられる。上述の通り 017 土坑は 016 土坑より古いので、古



- 1:2.5Y4/3オリーブ褐色砂質シルト
- (5mm以下の礫含む、暗灰色粘土ブロック含む) 2:5Y4/2オリーブ灰色細粒砂 (5mm以下の礫含む、暗灰色粘土ブロック含む) 3:2.5Y5/3黄褐色細~中粒砂
- (暗灰色粘質シルトブロック含む)



図 46 018 土坑平・断面図

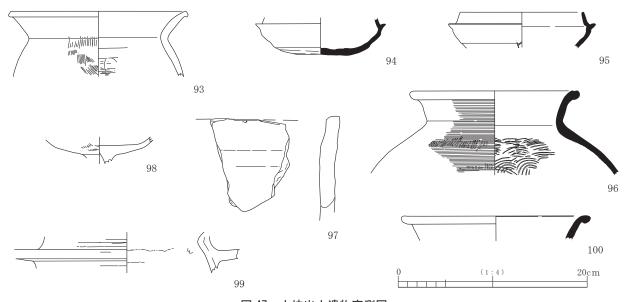


図 47 土坑出土遺物実測図 (93:014 土坑 94~99:015 土坑 100:017 土坑)

墳時代中期前半以前に属する遺構であろう。

018 土坑 (図 46・図版 17) 調査区中央西側で検出した土坑で、第IV層上面で検出した。長径 0.7m、短径 0.6m、深さ 0.35m を測る。埋土は 3層に分層でき、上層はオリーブ褐色砂質シルト、中層はオリーブ灰色細粒砂、下層は黄褐色細~中粒砂である。遺物は出土していないが検出面から判断すれば、古墳時代中期~後期に属する遺構である。

011 落ち込み (図 48、図版 17・18) 南区 8a 層を除去した後で検出された浅い落ち込みである。明確な掘方がなく、およそ東西 2.1m、南北 1.6m の範囲に炭化物を多く含む灰色砂質シルトが分布しており、この範囲から須恵器、土師器、炭化材が検出された。土器類および炭化物の分布範囲には、部分的に焼土が含まれているが、赤色に硬化するほど火を受けた様子はみられず、土器取上げ後の精査においても

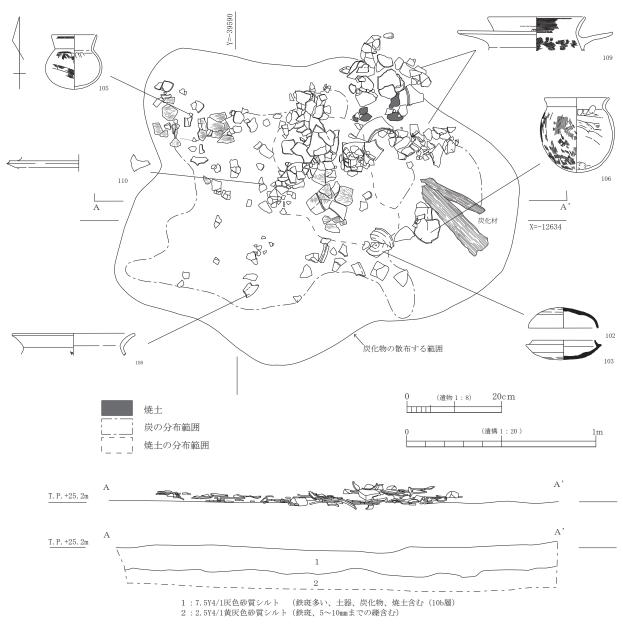


図 48 011 落ち込み平・断面図

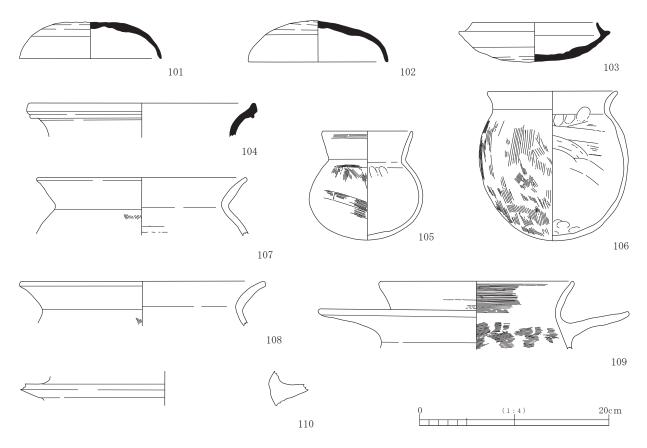


図 49 011 落ち込み出土遺物実測図

竃や火床の痕跡は確認できなかった。

土器類の大半は、 $T.P.+25.2 \sim 25.3 m$ に平面的に分布しており、一部はやや高く $T.P.+25.3 \sim 25.4 m$ で検出された。また器種の分布状況からしても、この場所で炊事等を行った竃や炉ではなく、013 落ち込み(10a 層)堆積前に廃棄された土器群および建築廃材と考えられる。おそらく平成 23 年度調査区以北の集落域から廃棄されたものであろう。

遺物は須恵器、土師器が出土している(図 49、図版 26)。 $101 \sim 104$ は須恵器で、 $101 \cdot 102$ は坏蓋である。天井部外面は上半が回転へラケズリ、下半および口縁部は回転ナデである。 II 型式 4 段階である。103 は坏身で立ち上がり部は短く内傾する。底部外面下半は回転へラケズリである。 II 型式 4 段階に属する。104 は甕口縁部である。 6 世紀代に属すると考えられる。

105~110 は土師器である。105・106 は小型甕である。105 は口縁部が外傾し内外面ともハケの後ナデを施している。体部外面もハケの後ナデを施している。106 は短く外反する口縁をもち、内外面ともナデを施す。体部は外面がハケメ、内面はケズリの後ナデを施す。107・108 は甕口縁部である。いずれも緩く外反する口縁部で内外面ともにナデを施し、端部に面をもつ。109・110 は羽釜である。109 は口縁部から鍔にかけての破片で、外反する口縁部は外面ヨコナデ、内面ハケメの後ナデを施す。体部内面はヨコナデである。幅広の鍔は幅 6.5cm を測り、端部は上方向に反る。上下面ともヨコナデを施す。110 は鍔が欠損する胴部破片で、器面調整は 109 と同様である。

これらの遺物より011落ち込みの所属時期は古墳時代後期後半(6世紀後半)と考えられる。

第5節 包含層出土遺物

第 I・II 層出土遺物(図 50、図版 29) 111~114 は第 I 層から出土した中近世に属する陶磁器である。111 は波佐見窯の染付一重細目碗の口縁部で 18 世紀中頃のものである。1~2 層出土。112 は龍泉窯青磁無文碗の口縁部である。15 世紀後半に属する。2 層出土。113 は京・信楽系の土瓶蓋である。19世紀に属する。2 層出土。114 は中国福建省閔江流域の白磁窯の割高台皿である。15 世紀後半に属する。3 層出土。

115~122 は第 II 層から出土した。115 は瀬戸灰釉皿の口縁部である(図版 29)。15 世紀後半に属する。4 層出土。116 は北壁側溝から出土した唐津灰釉碗の高台部である。17 世紀前半に属する。3~4 層出土。117 は須恵器坏身である。II 型式 5 段階に属する。4 層出土。118 は長頸壺の口縁部である。5 層出土。119・120 は須恵器坏蓋である。121 は有蓋高坏のつまみである。119~121 は 6 層出土。122 は土師器羽釜の鍔部である。6 層出土。

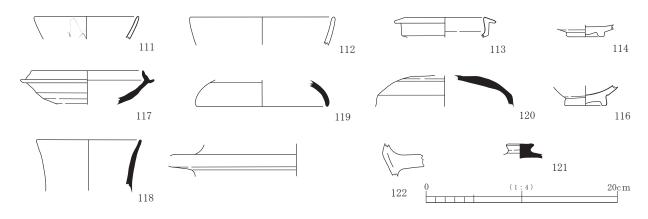


図50 包含層出土遺物実測図(1)

第Ⅲ層出土土器(図 51・52、図版 30・31) 123 ~ 141 は 8 層 (8a、8b) 出土土器である。123 ~ 136 は須恵器である。123・124・131・132 は坏蓋である。123 は天井部は回転ヘラケズリ、口縁部にかけては回転ナデである。これらはⅡ型式 4 段階に属する。125 ~ 127、133 ~ 135(図版 31)は坏身である。125 は体部下端が丸みを帯びず、若干下方へのびるところで欠損しているため、高坏の坏部の可能性もある。これらのうち 125 ~ 127・133 はⅢ型式 4 段階、134・135 は短く内傾する立ち上がりをもつ。Ⅲ型式 5 段階に属する。128 は壁である。磨滅と風化のため調整が不明瞭で灰白色を呈している。136 は甕の口縁である。頸部に波状文をめぐらす。

129・130・137~141 は土師器である。129 は小型甕である。口縁部外面はヨコナデを施し、体部外面には粗いハケメを施す。130 は直口壺の体部下半である。体部外面には横方向のミガキ、底部外面にはわずかにハケメがみられる。底部は薄い円形粘土を貼りつけ、板状工具ですりつけている。体部内面は工具によるナデがみられる。庄内期に属すると考えられる。137 は布留式甕の口縁部である。138 は甑の口縁部である。外面は粗いハケの後ヨコナデを施す。139・140 は甑ないしは鍋の把手である。141

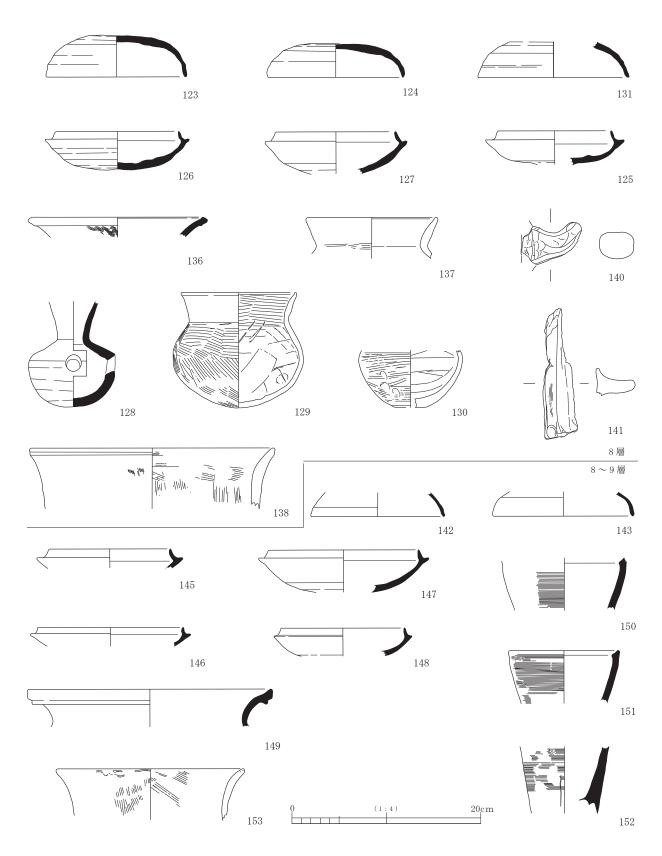
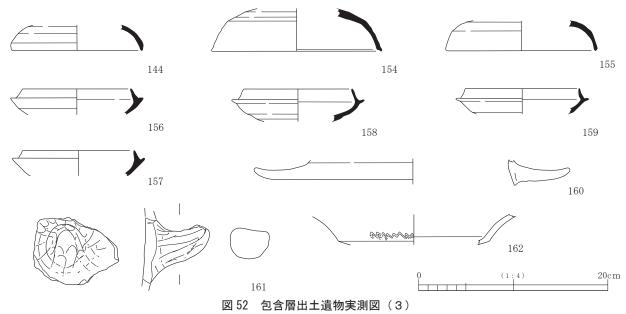


図 51 包含層出土遺物実測図(2)

 $(123 \sim 130 \cdot 136 \sim 138 \cdot 140 \cdot 141 : 第 III 層 (8 層) 142 \cdot 143 \cdot 145 \sim 152 : 第 III 層 (8 \sim 9 層))$



(144・154~162:第Ⅲ層(10層))

は移動式竃の破片である。

 $142 \cdot 143 \cdot 145 \sim 153$ は $8 \sim 9$ 層出土遺物である。 $142 \cdot 143$ は坏蓋、 $145 \sim 148$ は坏身である。坏身は短く内傾する立ち上がりをもつ。149 は甕口縁部である。 $150 \sim 152$ は鉢である。体部外面にはカキメを施す。149 は他よりも古く \mathbb{II} 型式 $2 \sim 3$ 段階に属し、それ以外は概ね \mathbb{II} 型式 $4 \sim 5$ 段階に属すると考えられる。153 は土師器甑の口縁部である。体部外面はタテハケ、内面はナデが施されている。

 $144 \cdot 154 \sim 161$ は 10 層出土土器である。 $144 \cdot 154 \sim 159$ は須恵器である。 $144 \cdot 154 \cdot 155$ は坏蓋である。154 は口縁端面に面をもつ。 II 型式 $2 \sim 3$ 段階に属する。155 は II 型式 4 段階に属する。 $156 \sim 159$ は 坏身である。これらは概ね II 型式 4 段階 ~ 5 段階に属すると考えられる。

 $160 \sim 162$ は土師器である。160 は羽釜の鍔である。上下面ともに工具によるナデが施されている。161 は把手である。162 は二重口縁壺の口縁部である。波状文が施されている。

163 は砥石とみられる石製品である。

以上の遺物により、第 I 層は近世〜近代、第 II 層は中世〜近世、第 III 層の 8 \sim 10 層は 6 世紀後半〜末を中心とする時期と考えられる。

注

1) 中近世陶磁器については、堺市立泉北すえむら資料館 森村健一氏より器種、年代観、産地等について ご教示をいただいた。

第7章 安威城跡における土壌分析

本章は、平成25年度調査区における8層(以下、本章において「H25-8層」という。)についての土 壌分析について報告する。H25-8層は、上面で6世紀代の遺構が検出され、その下面において5世紀代 の遺構が検出された古墳時代の遺物包含層であり、その形成環境の検討を目的に実施した、堆積物薄片 作成鑑定に関する自然科学分析結果について述べる。

第1節 試料と分析方法

分析試料は、層厚約 30cm の古墳時代の遺物包含層の H25-8 層から、約 10cm 間隔で連続的に採取した 堆積物の不撹乱柱状試料の 3 点である(図 53)。

土壌薄片作成試料は、80°Cで1日間乾燥した後、樹脂(ペトロポキシおよびシアノボンド)で固化を行い、片面の研磨を実施した。固化および研磨済み試料は、スーパーセメダインにより研磨面をスライドガラスに接着する。その後、反対側の面について厚さ $70~\mu$ m 程度まで研磨を行い、カナダバルサムによりカバーグラスを接着した。なお、土壌薄片による層相や構造記載は、久馬・八木久訳監修の「土壌薄片記載ハンドブック」(久馬・八木久 1998)を参照した。



試料 2 試料 3

1. 分析試料採取地点

2. 分析試料採取地点の堆積状況

図53 分析試料の採取状況

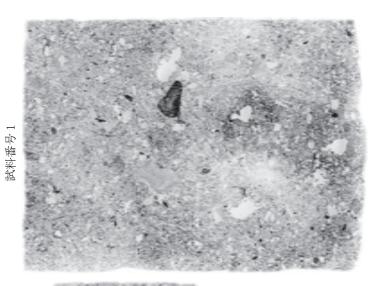
第2節 結果と考察

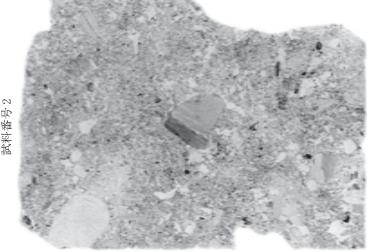
図 54 ~ 56 に土壌薄片画像とその顕微鏡写真を示す。古墳時代の遺物包含層の H25-8 層の試料番号 1 ~ 3 では、垂直方向における土壌微細構造にほぼ変化が認められない。現地での H25-8 層の観察結果では、層位的に層相変化のない塊状無層理をなす、礫を多く含む泥混じり砂で構成されることが認識された(図 53-2)。土壌薄片観察結果については、現地での層相観察とも矛盾しない結果である。以下に、H25-8 層の土壌薄片の観察結果の詳細を示していく。

H25-8 層内では、分離した粒団や、粗大な孔隙が認められない。このことから、巨視的な微細構造としては、壁状をなすと判断される。構成層は、砕屑物を主体としており、未分解の植物片等の有機物の

挟在が認められない。砕屑物の粒度組 成、細礫 (2-4mm) 混じりの極粗粒砂 (1-2mm) を中心としており、細粒の中 礫(4-8mm)を中心に、最大粒径で粗粒 の中礫 (8-16mm) の粗大な礫が比較的 多く含まれる(図55-1)。H25-8層の 基本的な堆積状況としては、このよう な礫混じりの砂粒子が、互いが接する ようにして密集的に分布する砂支持を なす (同図 - 2 · 3)。 ただし、 層内で は、砂粒子の堆積が一様ではなく、相 対的に砂粒子の密集度が高く砂の比率 がかなり高い領域や(同図-5)、これ とは逆に砂粒子が分散的で基質の泥を 中心とする領域(同図-6・7)が含 まれる。土壌薄片内では、垂直方向お よび水平方向において、これらがまだ らで不均質に混在したような堆積状況 を示す。また、場所によっては、基質 の泥が偽礫状の集合体をなして存在す る部分も認められる(同図-8)。なお、 これらの砂粒子間は、シルトや粘土の 泥からなる細粒物質の基質によって充 填される。この細粒物質の複屈折につ いては、未分化である(同図-4)。

土壌薄片を微視的にみると、層内には、微小な孔隙が多く形成されていることが確認できる。孔隙の主体は、不定形のバグ孔隙である(図 56-9・12)。場所によっては、粒子間や集合体間に形成されるパッキング孔隙も多く形成されている。このような領域では、堆積が相対的に粗である(同図 -13)。





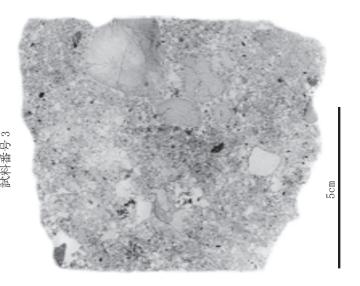
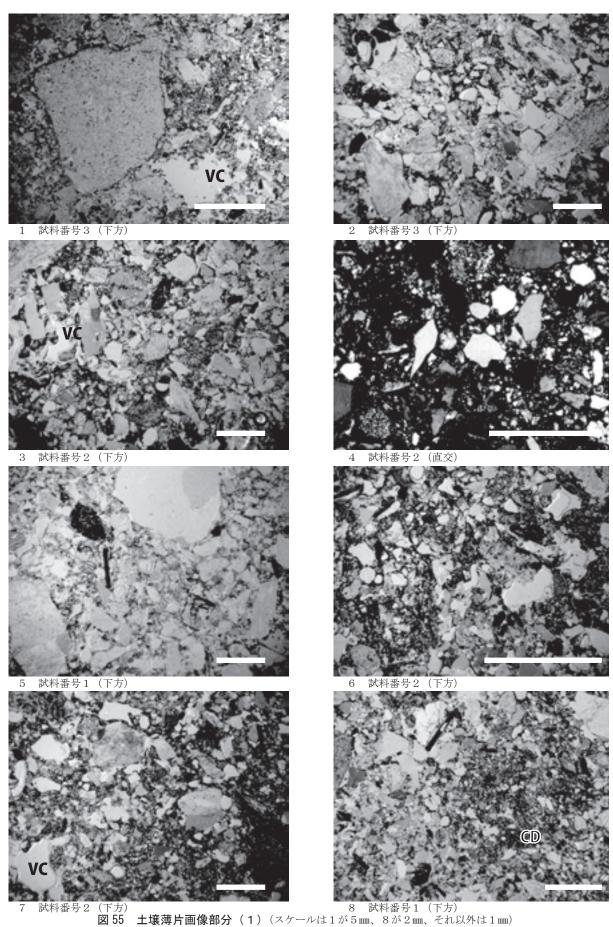


図 54 土壌薄片画像

孔隙については、発達程度が低いものの、その壁面に粘土やシルトの被覆が部分的に認められる箇所が存在している(同図-14)。

上記の土壌微細構造の記載から、H25-8層については、水流を伴う砕屑物の移動・堆積によって生じ

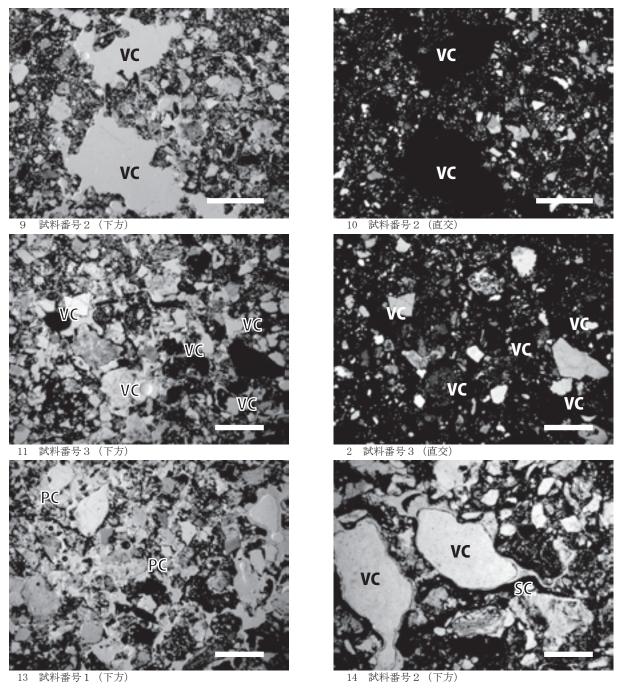


る葉理などの堆積構造が認められず、塊状無層理で淘汰が著しく不良であることが確認される。また、層内では、土壌生成に伴って生成される、腐植や粘土、シルトといった細粒物質の下方もしくは上方への蓄積や移動を示唆するような土壌微細構造が認められない。これらのことから、H25-8 層は、水流によって運搬され調査区内に累重した堆積物ではないと判断される。さらに、このH25-8 層では、土壌化の影響をほとんど受けていない可能性が高いことも指摘される。このため、H25-8 層で堆積構造が認められない要因としては、土壌化に伴う生物擾乱の影響が極めて低いと解釈される。

なお、H25-8層のような塊状無層理の堆積構造については、土石流堆積物において形成される場合がある。調査区は、安威川の谷口に位置する扇状地性の氾濫原上に立地している(図 57)。現河床底と氾濫原面の比高は5m前後であることから、本遺跡周辺の安威川の河床は、現段階において下刻傾向にあることがうかがえる。弥生時代~古墳時代の河床の高さに関する地質学的データは得られていないものの、上記したような安威川の河床の状況をふまえると、調査区の立地面は、古墳時代には既に離水もしくは離水傾向にあったことが推測される。また、今回の調査区の西側には、更新世の段丘面とその段丘崖が存在しているが、そこから調査区およびその周辺に向かって伸びるような、開析谷の存在を認めることができない。よって、少なくとも古墳時代ないしそれ以前の弥生時代、さらにこれらの時期以降に調査区では、安威川本流やその支流、さらに周囲の開析谷から、調査区内に土石流堆積物が供給される可能性がほぼないと判断される。

また、土石流以外でH25-8層のような堆積物が形成される要因としては、重力性の斜面堆積物の存在が想定される。今回の調査区内では、活断層である真上断層が通っており、これに伴う断層崖が存在する(図 57)。分析地点は、この崖直下に近い、下場の平坦面に存在している。このことから、H25-8層のような淘汰不良の堆積物は、断層崖の崩壊や、断層崖構成層やさらにその上場の平坦面からの緩慢な集団移動である土壌クリープによって形成される可能性も否定できない。ただし、このような堆積が生じる場合には、断層崖から断層崖下場の分析地点に至る堆積斜面が形成される。そのような構成層中には、堆積斜面に沿った層理や葉理ないし堆積物のファブリックが観察されることが予想される。現地での堆積物観察および土壌薄片観察の双方では、H25-8層が断層崖下の地形面に沿ってほぼ平坦に累重することが認識され、断層崖に向かって堆積斜面を形成するような累重状況を確認することができない。また、土壌薄片においても、堆積斜面を示唆するような構造が認識されない。従って、H25-8層が形成要因としては、断層崖やその上場の平坦面からの重力性の堆積物供給についても、可能性がかなり低いものと考えられる。

上述のことから、H25-8層は、自然営力による運搬・堆積作用によって形成されたものではないと判断される。H25-8層については、細礫や極粗粒砂の掃流堆積物を中心に、より大きな掃流力を必要する粗大な礫が含むとともに、これらに静水域の堆積環境下で沈底する浮流堆積物の泥が多く混じる。このような粒度組成から、H25-8層では、運搬・堆積営力が大きく異なる多様な粒径が混在していることがうかがえる。自然営力による運搬・堆積作用以外で、このような粒度組成が形成される要因としては、元々単層に分かれ存在していた堆積物が、何らかの強い撹乱を受けることによって混在したという堆積後作用がまず疑われる。堆積後作用としては、土壌化も含まれるが、既に述べたように土壌化の影響が低いとことが認識される。H25-8層では、その上位に6世紀代の遺構が検出されており、その直下の下面で

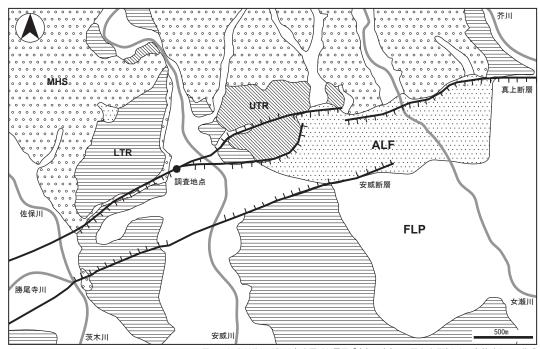


・括弧内の用語は、下方が下方ポーラ、直交が直交ポーラを指す VC:バグ孔隙 PC:パッキング孔隙 SC:粘土、シルトの被覆 MD:泥の集合体

図 56 土壌薄片画像部分(2)(スケールは9が2mm、それ以外は1mm)

5世紀代の遺構が確認されている。さらに、H25-8層に含まれる遺物は、ほぼ6世紀代に限定されることから、形成期間が比較的短期間であったことが推定される。このことから、H25-8層の形成期間前後では、活発な人間活動が生じていたことが確認される。

以上のことをふまえると、H25-8層で生じた強い撹乱営力としては、人間による地表撹乱によるもの可能性が極めて高いことがうかがえる。土壌微細構造からは、このH25-8層において層内に孔隙が多く形成されており、堆積物のしまりが悪い状態にあることが確認される。さらに、構成層については、ほ



岡田ほか (1996)1:25000 都市圏活断層図「京都西南部」,国土地理院から一部簡略化して作成 凡例 MHS: 山地・丘陵 UTR: 上位段丘面 LTR: 下位段丘面 ALF: 扇状地・沖積錐 FLP: 沖積低地

ぼ砂からなる領域と、基質の泥を中心とする泥支持の領域がまだらに混在しており、微視的にはかなり 不均質な堆積状況を示すことが確認できる。このような H25-8 層は、調査区内において凹地を埋積する ようにパッチ状に分布していることが、発掘調査により確認されている。

図 57 遺跡周辺の地形分類図

上記のような特徴を示す人為的な撹乱堆積物としては、最も蓋然性の高いものとして整地土があげられる。ただし、H25-8 層と類似する土壌微細形態学的特徴については、既往の研究事例から埋没した畑地耕作土でも形成される可能性があることがうかがえる(須永・平山 2005)。畑地耕作土である場合には、調査区内において H25-8 層が層状に分布し、その上面や下面において溝状の遺構が伴うことが予想される。しかし、H25-8 層については、凹地を埋積するようにしてパッチ状にしか存在しておらず、溝状の遺構も確認されていない。このことから、H25-8 層については、整地に由来する人為的に擾乱された客土に由来すると考えるのが最も整合的であると解釈される。

(パリノ・サーヴェイ株式会社 辻 康男・山川真樹)

第8章 総 括

第1節 調査成果について

(1) 中近世以降(図58左)

石垣の形成 本調査区の調査前は、東を南北に走る府道の路面まで盛土されていたが、盛土直下には石垣を伴う近世以降の水田耕作土が存在した。これは調査区周辺に今でも見ることのできる棚田の一部である。平成25年度調査区において、石垣裏込め土から19世紀に属する陶器(図50-113)が出土しており、少なくとも現在みられる石垣については、それ以降の時期に形成されたと考えられる。

この石垣は第5章で言及しているとおり、真上断層の活動により形成された第IV層(基盤層)の段差上段の水田において広い平坦面を確保するために設けられたものである。石垣は第IV層の段差直上ではなく、 $1\,\mathrm{m}$ 程度前面に出た所に形成されており、それをよく示しているといえる。

石垣形成以前の近世水田 石垣形成以前における近世の水田面は、第 Π 層を耕作土としているが、第 Π 配の段差部分で大きめのアゼを設けていたことが、平成 25 年度調査区の北壁や西壁の土層断面から明らかであり、平成 25 年度調査区の石垣 1 ラインまでの段差上段(図 34 に示す①)においては新旧 2 枚の水田面を確認できた。(第 Π - 1、 Π - 2 層)。段差下段については平成 25 年度調査区の石垣 2 ラインで浅い段差が認められ、それ以南の第 Π 層はほぼ水平に堆積していた。

中世の溝 明確に中世に属する遺構としては、平成23年度調査区の006溝、平成25年度調査区の012溝のみである。これらは同一の溝であり出土遺物より12~13世紀の年代を与えることができる。この溝は、真上断層と考えられる第Ⅳ層の段差の上部に堆積した第Ⅲ層を掘り込んで形成されている。断層の最新活動時期は鎌倉~室町時代以降とされており(寒川ほか1996)、006溝、012溝の形成は断層の活動以前の可能性も含まれる。

(2) 古墳時代(図58右)

古墳時代中期 近隣で実施された平成19年度調査区を含め、本調査区の古墳時代に属する遺構は古墳時代後期後半から終末期を中心としている。平成25年度調査区では古墳時代中期初頭に属する土坑を検出した(H25-016土坑)。一辺が約3mを測る平面形が方形を呈するものであり、竪穴建物の可能性も考えられたが、①壁溝や柱穴がみられない、②竃や炉がみられない、③明確な床面がみられないことから、住居と積極的にいえる根拠を欠く。①については近隣の安威遺跡で同時期の壁立建物と想定されているものがあるが、土層断面では壁の痕跡はなく、②、③を含めると、上屋があったとしても住居というよりは簡易な小屋組みを有する施設であったであろう。中層出土の土師器は比較的まとまっており、機能時に存在していたものであろう。古墳時代中期初頭に本調査区付近で小規模ながら何らかの土地利用があったものと考えられる。

古墳時代後期 古墳時代後期の遺構、遺物はいずれの調査区においても検出された。このうち特徴的な遺構として、平成24年度調査区で検出されたH24-007 竃がある。これについては屋外炉の可能性が

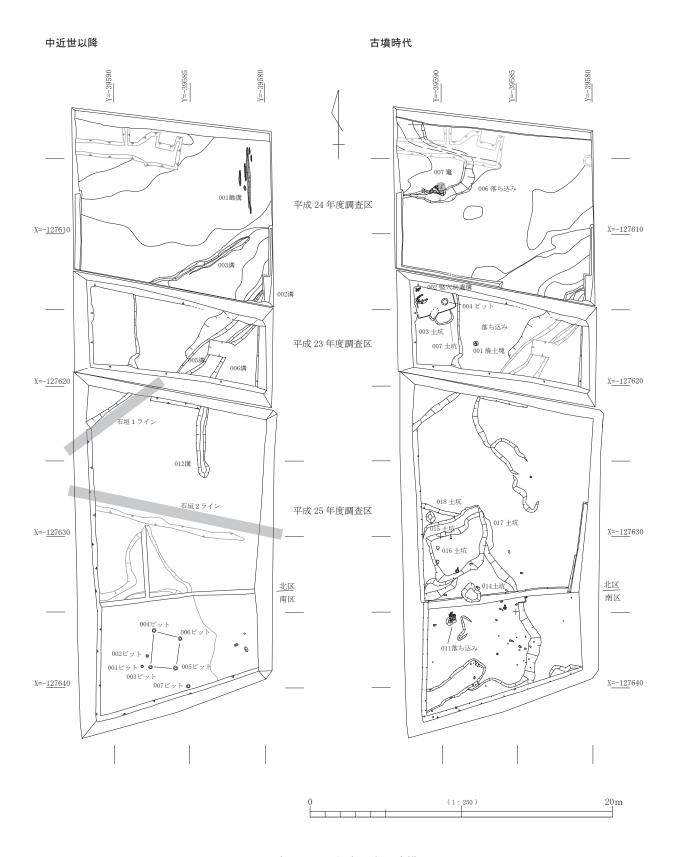


図 58 平成 23 ~ 25 年度調査区遺構平面図

あるもので、これまでの調査事例とともに次節で検討を加える。

H23-002 竪穴状遺構は竃を伴うものの、竃から対面の壁面までが 1.5 mと狭く、竃の規模に比べて遺構の掘方が小さい。またこの下位より検出された H23-007 土坑中の焼土、H23-004 ピット内の焼土を考慮すると、H24-006 落ち込みの中に構築された H24-007 竃と同様に、第IV層(基盤層)の落ち込みに構築された竃の可能性も排除できない。したがって明確に竪穴建物とすることはできないため、竪穴状遺構とした。これらの遺構は第IV層の砂礫層が浅く落ち込んでいる窪地に堆積した砂質土に形成されている。おそらく砂礫層自体は強固であり、遺構を構築するための掘削は困難であったため、これらの落ち込みを利用したと考えられる。

平成25年度調査区南区以南も砂礫層自体が大きく落ち込む。この落ち込みの堆積層中からH25-011落ち込みが検出された。これは砂礫層上の古墳時代後期居住域で不要になった土器類の廃棄場であったとみられる。

整地層 上記の H25-011 落ち込みの上位および下位に堆積していた 10a 層および 10b 層をはじめ、第 IV 層上に堆積していた H25-8 層~ H25-10 層は、礫を多く含む砂混じり土で、自然の営力により堆積したというよりは人為的な成因が想定された。土壌分析の結果を踏まえると、人為的な撹乱堆積物として、整地土に由来する可能性が考えられる(第7章)。つまりは、第IV 層の砂礫層が南へ落ち込む傾斜面に堆積した砂層(H25-11i~ 11m 層)の凹凸を均したり、部分的に客土することにより平坦面をつくっていたことが強く想定されるのである。このように考えると、上記の砂層を掘り込んで形成された H25-016 土坑や H25-017 土坑を覆う、H25-015 土坑やさらに上位の H25-013 落ち込みは、整地層の一つの単位としてみることもできよう。

 $H25-8\sim H25-10$ 層からは比較的完形に近い須恵器や土師器も出土しており、整地の過程で埋めたものとみることもできる。またその時期はII型式 $4\sim 5$ 段階であり、6 世紀後半から末ないしは7 世紀初頭頃ととらえられる。この時期は平成 $23\sim 24$ 年度調査区において第IV層(基盤層)上に居住域が展開するのと同様である。なお、整地の理由を考えてみると、層中にH25-011 落ち込みやH25-014 土坑がみられるものの、整地層上面に建物遺構や後述する火処遺構はみられず、居住域を拡大させる意図は感じられない。このことから畑地などの耕作地として機能した可能性が想定できる。また整地の範囲については限定された調査範囲であるため明確にすることはできないが、本調査で検出した面積は約 $200~\text{m}^2$ を測る。

以上、古墳時代の本調査地では、中期にわずかながら土地利用がなされた後、後期に段差上面に居住域が展開するとともに、段差の南では整地による土地の造作を行っていたことが明らかになった。

第2節 火処遺構について

今回の調査区における特筆すべき調査成果として、平成23年度調査区および平成24年度調査区で 検出された火処遺構(竈あるいは炉跡と考えられる焼土遺構)が挙げられる。前節で整理した通り、既 往の調査として北側に隣接する平成19年度調査区においても同様の遺構が7基検出されている。

屋外の火処 これまで検出された火処遺構のうち平成23年度調査区で検出された竈は、竪穴状遺構 に伴うものであるが、これ以外の例はいずれも対応する建物を持たないという特徴をもつ。古墳時代後 期の近畿地方では、火処は竪穴建物に伴うことが通有である。本遺跡のこれまでの調査においても、火処に対応する建物遺構を求めて再三の遺構精査が行われたが、いずれも明瞭な施設は認識されず、結果として屋外竃あるいは屋外炉として報告されることとなった。もっとも、火処としての利用を考えれば、完全な屋外では雨風の影響が大きくなるはずであり、本来、考古学的にはその痕跡が認識できないような簡単な上屋構造がともなっていた可能性は考慮すべきであろう。

これまで検出された同種の遺構を整理すると、計 10 基となる(図 59)。そのうち、袖構造や支脚をもつものは8基を数える。すべての遺構から遺物が出土しているわけではないが、時期的にはいずれも6世紀後半(II型式4・5段階)に属するものと考えてよいであろう。このような遺構の類例は、近畿地方では極めて少なく、本遺跡にこれだけの数が集中していることは注目すべき事実である。

居住域の性格 安威城跡における調査で検出された建物遺構を見てみると竪穴建物1棟および掘立柱建物4棟といずれもわずかであり、屋外の火処の数の多さが際立つ。これまでの調査成果に基づいて考えてみると、本遺跡における古墳時代後期の情景として基盤層の落ち込み斜面等を利用した火処を覆う簡易な小屋掛け程度の施設が点々と並ぶ姿を想像することができよう。微高地状に少数建てられた掘立柱建物は倉庫であろうか。本遺跡の基盤層は極めて礫の多い土石流による堆積物であり、建物を建てるにはかなりの困難がともなったはずである。いずれにしても、このような簡易な建物等からなる居住域については、通年で居住する安定的な集落というよりも、仮設的な施設を備えた臨機的な宿営地といった性格を想定すべきではないだろうか。

竹村屯倉 それでは、なぜこの時期、この地点にこのような居住域が形成されたのであろうか。この 問題については次節の集落動態の検討結果も踏まえて考察を加える必要があるが、とりあえずここでは、 本遺跡の所在地が『安閑紀』元年閏 12 月壬午条に設置の記事がみえる竹村屯倉の候補地に含まれる点

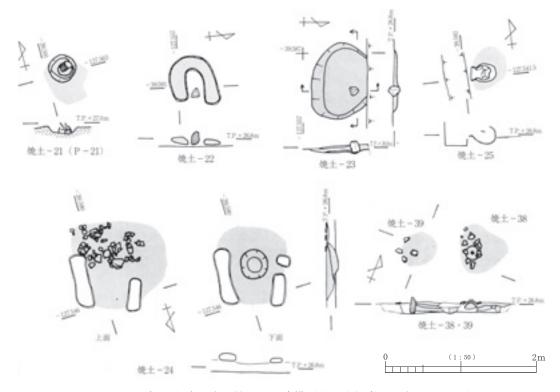


図 59 平成 19 年度調査区検出火処遺構 (大阪府教育委員会 2010 より)

に注意しておきたい。近年、ミヤケについては、その性格を水田経営だけでなく王権の置いた政治的軍事的拠点として広く捉えるべきとする見解が有力であるが、竹村屯倉は田地を伴うミヤケの代表例とされている(舘野 2004)。安閑紀には、その起源として、在地首長である三島県主飯粒が「上御野・下御野・上桑原・下桑原」の良田を差し出したことによって設置されたこと、そして河内県の部曲が春秋に田部としてこのミヤケで使役されたことが記されている。現在、本遺跡の所在する安威の地は、南の耳原(御野)、北の桑原にはさまれた地点に当たり、記事の中で差し出されたとされる土地に含まれることはほぼ確実と思われる(網 2005)。本遺跡で検出された火処遺構は、6世紀後半に属するものであり、時期的には設置記事の年代とも矛盾はない。水田耕作の繁忙期に地域外の労働力が徴発され、仮設的な宿営地が営まれたと仮定すれば、本遺跡における特異な居住域のあり方についても理解しやすくなるかもしれない。しかしながら考古学的成果と文献の記述の対照には慎重な検討が必要とされるところであり、まずは同様の遺構の検出例の増加を待つとともに既往の調査事例についても再検討を行って考察を深める必要があろう。

第3節 安威城跡・安威遺跡における古墳時代集落について

これまで実施された主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う発掘調査における、安威城跡および安 威遺跡における調査地点は南北に細長い。それはちょうど安威川右岸において、低位段丘の段丘崖直下 付近から沖積地にかけて南北にトレンチを入れた形となっている。本節では、この2遺跡の既往の調査 成果を踏まえて安威城跡および安威遺跡の古墳時代集落について概観する(図60)。

遺構の分布 両遺跡ともに弥生時代後期~庄内期にかけては、建物遺構はみられないものの土坑や溝などの遺構や遺物が認められ、集落を形成していたことがうかがえる。古墳時代前期については、平成17年度調査区で土坑や溝を検出しており、土坑から小型の仿製鏡が出土している(図 60)。

古墳時代中期前半には、安威遺跡の調査区南部において数多くの竪穴建物が認められる。これらは導入初期の竃を備えるものがあるほか、壁立建物と想定されるものもある。また多数の初期須恵器、韓式系土器の出土により、渡来系集落であることが明らかである(大阪府教育委員会 2000)。安威城跡でも第6章で報告したとおり、平成25年度調査区において中期初頭頃までの土坑(H25-016土坑)が検出されているが、これ以外に当該期の遺構は認められない。H25-016土坑は簡易な施設であろうと考えられるので、安威遺跡集落の活動範囲内における遺構ととらえられよう。

古墳時代中期後半から後期前半については、安威遺跡では調査区の北部で竪穴建物が認められ、居住域が北へ展開していることがわかる。安威城跡では、平成19年度調査区で後期前半の竪穴建物が認められ、この範囲まで居住域が展開している。

古墳時代後期後半になると、集落展開に画期が認められる。すなわち安威遺跡において建物遺構が認められなくなるのに対して、安威城跡では小数ながら建物遺構が認められるようになる。掘立柱建物は1間×数間のものが主体で、住居というよりは小屋掛け的なものを推測させる。竪穴状遺構や、前節で検討した屋外炉と考えられる火処遺構等の簡易な施設が分布することが特徴的である。

このように両遺跡の古墳時代集落は、中期前半から後期後半にかけて、安威遺跡から安威城跡へその 中心を北に移していることがわかる。安威遺跡の平成16年度調査区では当該期の遺構は顕著ではない

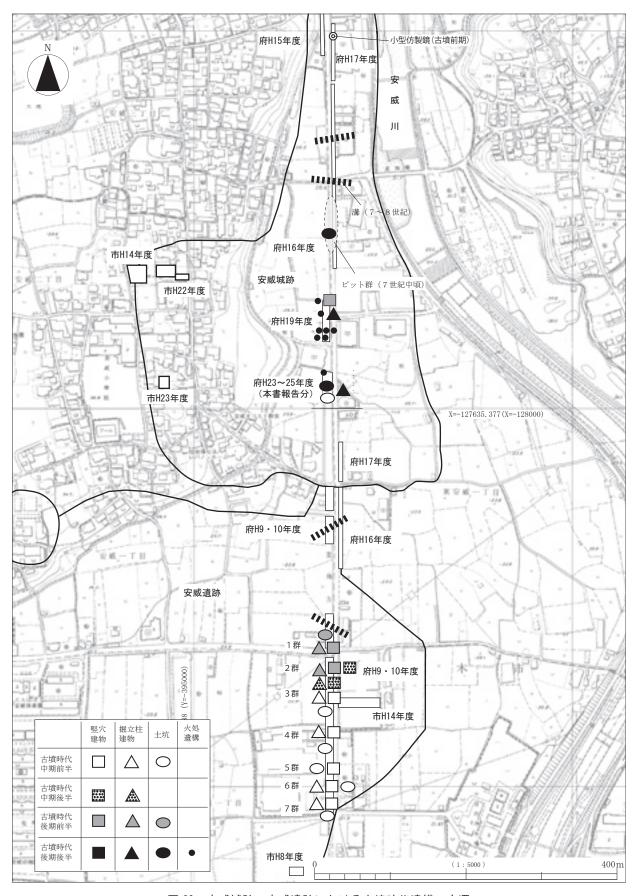


図 60 安威城跡・安威遺跡における古墳時代遺構の変遷

が、中期後半から後期前半の土器を含む包含層をほぼ全域で確認していることとも整合的である(大阪府教育委員会 2006)。さらに安威城跡の平成 16 年度調査区では、7世紀中頃以降とみられるピットが複数検出されており、時期が新しくなるとさらに北に展開するようである(同書)。狭いトレンチ調査ということもあり詳細は不明な点が多いが、7世紀代に遺構が確認されている安威寺跡との関連が示唆される(茨木市 2014)。また遺構面の標高および土質をみてみると、後期後半以降に安威城跡に展開する居住域は相対的に標高が高くなり、段丘崖下縁辺の砂礫層上に立地することが分かる(図 60)。

安威遺跡における古墳時代集落の歴史的評価については、安威川が東へ蛇行するまでを集落範囲と想定し、対岸にある太田茶臼山古墳の造営に関連させる評価がある(一瀬 2006)。また、京都府の桂川流域における事例との類似性を踏まえ、渡来人がもたらした築堤や水路掘削などの高い技術によって、安威川左右岸の灌漑や耕地開発と深く関わった集落という評価もある(菱田 2012a)。この二つのどちらかというよりは、両方を含めた形で理解することも可能であろう。前節で言及されたように、安威城跡で検出された火処遺構と、基盤層の砂礫層上に設けられた1間×数間程度の掘立柱建物は、宿営的な居住域に伴う施設と考えられ、単純に安威遺跡から安威城跡へ居住域が北へ移動したのではない。安威城跡の居住域は、古墳時代中期以降における安威川流域の開発により拡大された水田の経営上必要な施設として設けられた可能性がある。それを傍証するため、次節で周辺における集落の様相をみておきたい。

第4節 安威城跡古墳時代居住域の歴史的評価

周辺遺跡の様相 三島平野の中でも本遺跡周辺として、高槻市域の芥川左岸から茨木丘陵あたりまでの範囲で古墳時代の集落動向を概観すると(表2、図61)、中期には前期から継続的に営まれる集落(溝咋遺跡や嶋上郡衙跡など)に加え、中期から集落が成立、もしくは拡大する遺跡(安威遺跡、郡・倍賀遺跡、新池遺跡、太田遺跡)がみられる。このうち新池遺跡は、総持寺古墳群、太田茶臼山古墳、今城塚古墳などに供給する埴輪の製作に特化した遺跡である。安威遺跡は上記のとおり、安威川流域の開発に深く関与した集落である。どちらも集落の形成には王権と結びついた政治的な意図がうかがえる。また太田遺跡では建物遺構は検出されていないが、現在の太田中学校南に位置する名神高速道路関連の調査区で、韓式系土器や多数のピットが検出され、建物があった可能性が高い。郡遺跡では中期後半から後期前半の竪穴建物が26棟が検出されており、嶋上郡衙跡に匹敵する集落規模となっている。

後期から終末期になると、建物遺構が確認される遺跡は増加し、嶋上郡衙跡、郡遺跡、太田遺跡、総持寺遺跡、安威城跡、福井遺跡、玉櫛遺跡、東奈良遺跡などで建物遺構が検出されている。安威城跡の掘立柱建物は、上述のとおり1間×数間の規模であり、屋外炉としての火処遺構を伴うが、他の遺跡では大小の規模をもつ掘立柱建物と竪穴建物で構成される集落が通例であり、安威城跡の居住域のあり方は、これらとは質的に異なることが指摘できる(図 62)。

7世紀初め頃は新たな集落が始まる時期として大きな変動があることが指摘されており(菱田 2012c)、溝咋遺跡では洪水により集落が廃絶し、また総持寺遺跡は後期後半まで継続した集落とは様相が変化し、広い台地上に多数の竪穴建物、掘立柱建物で構成される集落が営まれるようになる。また嶋上郡衙跡では7世紀半ば~後半において整然と配される掘立柱建物が多数検出されており、嶋上郡衙成立時の様相を知る上で重要である(高橋 1995、宮崎 1995)。

表っ	安威城跡周辺の主	な古墳時代集落	古墳の様相
10 4	X 12X 73X 11 1 1 1 1 2 2 2 1 1	- O H R H V T / T	

集落	遺跡							古墳・	古墳群					
_			古墳	中期	古墳	後期	終末期			古墳	中期	古墳	後期	終末期
番号	遺跡名	属性	前半	後半	前半	後半		記号	古墳·古墳群名	前半	後半	前半	後半	
			4c末~	~5c末	6c初頭·	~7c初頭	7c前半~	_			~5c末	6c初頭·	~7c初頭	7c前半~
1	嶋上郡衙跡	土器						ア	前塚古墳					
	(郡家川西)	建物	0	0	0	0	0	1	墓谷古墳群					
2	郡家今城	土器						ウ	川西古墳群(西群)			_		
		建物						25.	今城塚古墳					
3	津之江南	土器						オ	川西古墳群(東群)					1
		建物						カ	塚穴古墳群					
4	新池	土器						+	石山古墳					
		建物		0	0			ク	太田茶臼山古墳	•				
5	ツゲノ	土器						ケ	土保山古墳	•				
		建物		0				==	二子山古墳					
6	塚原	土器						サ	番山古墳					
		建物						シ	総持寺古墳群					
7	富田	土器						ス	太田古墳群					
		建物						t	太田北古墳群					1
8	太田	土器						ソ	塚原古墳群					
		建物				0	0	9	阿武山古墳					
9	総持寺	土器						チ	片ヶ谷古墳群					J
		建物			0	0	0	ツ	将軍山古墳群					
10	溝咋	土器						テ	安威古墳群					
		建物	0	0	0	0		-	長ヶ淵古墳群					i i
11	安威城跡	土器						ナ	桑原西古墳群					
		建物				0		=	真龍寺古墳					
12	安威寺跡	土器						ヌ	将軍塚古墳					
		建物					0	ネ	耳原古墳					
13	安威	土器						1	鼻摺古墳				?	
		建物	0	0	0			^	初田2号墳					
14	耳原	土器						E	初田1号墳					
		建物						フ	西福井古墳群					
15	五日市東	土器						~	南塚古墳					
		建物						水	青松塚古墳					
16	福井	土器						~	海北塚古墳					
		建物			0	0		3.	新屋古墳群					
17	宿久庄	土器						4	郡古墳群					
		建物				0		*	春日古墳群					
18	玉櫛	土器						Ŧ	中条古墳群					
		建物			0	0								
19	郡山	土器							【凡例】					
		建物							集落遺跡					
20	中河原北	土器									古墳中期	*	填後期	終末期
		建物						音号	遺跡名	rt air		前半	後半	(飛鳥)
21	郡	土器						79			4c末~5c末	6c₹∏	则~7c初期	7c前半~
1		建物		0	0	0	0	1 🗀	±3	83		3.00		
22	春日	土器						1				0	-	
22	年日							⊣ '			2.38111.1.3	_		
<u></u>		建物							土器欄が塗りつぶし					
23	上中条	土器						-	建物欄は竪穴建物、	掘立柱建物の	のいずれかが検	出されている	5場合に「○」	とした。
L		建物	<u> </u>					J	古墳・古墳群					
24	新庄	土器								さ	墳中期	古地	直後期	終末期
1		建物						% 5	古墳・古墳群名	前半	後半	前半	後半	(飛鳥)
25	中条小学校	土器						1 1 %	L-34 L-349+41		末~5c末		~7c初頭	7c前半~
2.5	11-36/17-12							1 -		40	W00W	60/9/198	-100000	1080 T
<u> </u>	1. ()	建物		0			0	- 4	24 100 1 100 1 100 1				1	
26	東奈良	土器							前期古墳は割愛した					
1	1	建物		1	0	0	0	1	 古墳・古墳群の存績 	時期を横棒ま	および丸でしめし	た。		

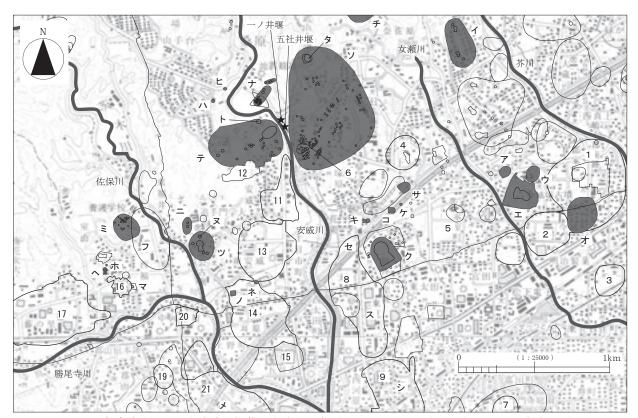


図61 安威城跡周辺の古墳時代集落と古墳の分布(番号は表2に対応、一部地図外の遺跡あり)

古墳・古墳群の様相 中期から終末期について周辺の古墳を概観すると、安威川左岸の富田台地周辺には、中期中頃に築造される太田茶臼山古墳と相前後して、石山古墳、土保山古墳、番山古墳などが築造される。これらはこの地域の首長墓としての系譜を示しており、この時期の単独墳がみられない安威川右岸から佐保川までの間、そして佐保川以西の福井地域に対しての優位性を示している(森田2006)。その一方で、川西古墳群(西群)やツゲノ遺跡における複数の埋没古墳、総持寺古墳群、太田古墳群などの古式群集墳、そして福井地域における西福井古墳群、さらには千里丘陵東麓から低地部にかけての郡遺跡、春日遺跡、中条小学校遺跡で発見されている中期後半から後期前半にかけての埋没古墳群は、対応する集落が未発見のものもあるが、近傍の集落の墓域と考えられる。とくにこの時期の古墳が存在しない安威川右岸に渡来系集落である安威遺跡が出現することは、渡来系集団と墓域の関係を考える上で示唆的である。

後期前半は、当該期の大王墓である今城塚古墳が傑出する。それまで優位性を示していた安威川左岸では首長墳と考えられる古墳が認められず、福井地域の南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳が後期後半にかけて造営される。後期後半以降には安威川右岸に耳原古墳、鼻摺古墳が築かれ、福井地域から安威地域へと一連のものとして島下郡域の最有力者の系譜を示すものと考えられる(菱田 2012b)。また芥川左岸の昼神車塚古墳も首長墓と考えられる。終末期の単独墳としては阿武山山頂付近の阿武山古墳が、また安威川右岸の丘陵部には、阿武山古墳や桑原西 A4 号墳と同タイプの塼が出土している初田 1 号墳、漆塗木棺が納められていた初田 2 号墳が築かれる。なお中期中頃の太田茶臼山古墳、後期前半の今城塚古墳の造営時、これら以外に明確な首長墳が築造されていない点については、古墳造営の規制性を示すものと考えられる(森田 2006)。

嶋上郡衙跡を母体としていた川西古墳群(西群)は、今城塚古墳の造営を機に後期中頃以降、川西古墳群(東群)に墓域を移している(森田 2006)。しかしこの時期には集落近傍の古墳群は顕著ではなく、丘陵部で群集墳が築造され始める。安威川右岸では、後期前半段階に形成され始めた安威古墳群や将軍山古墳群に加え、長ヶ淵古墳群や真龍寺古墳において、また安威川左岸では塚原古墳群において群集墳が築造され、終末期にかけて継続する。7世紀代には安威川左岸の河岸段丘上に桑原西古墳群がかなりの密集度で築造され始める。その他太田遺跡でも小規模な横穴式石室をもつ円墳が複数発見されている(太田北古墳群)。さらに福井地域では新屋古墳群、女瀬川上流部には片ヶ谷古墳群がみられる。

丘陵上に展開する群集墳と集落の関係については、福井地域の新屋古墳群の南の福井遺跡や宿久庄遺跡で建物遺構がみられ、造営母体とみることができる。これに対して、安威古墳群、長ヶ淵古墳群、塚原古墳群、桑原古墳群については、付近に造営母体の集落がみられない。前述のとおり安威城跡における後期後半から終末期にかけての居住域は、定住性を示しておらず宿営的な性格をもつため、ただちにこれらの群集墳と結びつけることはできない。塚原古墳群の造営母体については、安威川流域の平野部の集落が想定されており(原口ほか1974)、さらに下流側の溝咋遺跡まで視野に入れる必要も指摘されている(森田2006)。安威城跡の今回調査区周辺に定住的な集落を想定する必要もあろう。

これらの群集墳の造営母体を考える際に、同時期の安威川流域における集落として挙げられるのが、 太田遺跡と総持寺遺跡である。特に総持寺遺跡では、上記のとおり終末期になると、それまでの集落の 状況とは様相が変化し、広い台地上に建物遺構が認められるようになる。7世紀の前半頃には、台地縁

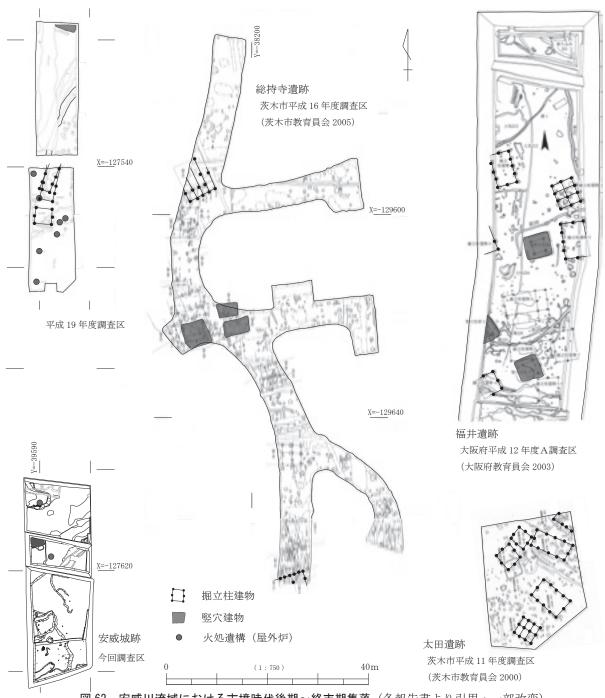


図 62 安威川流域における古墳時代後期~終末期集落(各報告書より引用・一部改変)

辺部で中期前半に多数築かれた古墳群を避けつつ建物が設けられる。この時点では墳丘はまだ削平されておらず、削平された墳丘部分に建物遺構が認められるのは奈良時代以降であるが(富田 2007)、かつて墓域だった場所に建物を設ける点は、居住者と被葬者の系譜的な断絶を示すものであろう。

塚原古墳群、桑原西古墳群、長ヶ淵古墳群は、阿武山の山麓から安威川の河岸段丘にかけて立地する。 いずれも阿武山という名山を意識した立地であり、なおかつ安威川が平野部へ流下する起点に位置する。 さらには下流域の灌漑の起点となっている場所でもある。これらの古墳群の造営母体は、近傍にはなく、 離れて所在する複数の集落の墓域と考えられ、「山の墓地」型の群集墳(菱田 2013)として把握できる。 さらにそれは、古墳時代中期の安威遺跡出現に端を発する、安威川流域の開発による可耕地の拡大によっ てもたらされた、水田の管理や経営と不可分の関係をもつ、これらの集落の墓域と言えよう。

またその一方で、将軍山古墳群のように、前期後半に築造された将軍山古墳(2号墳)の周りに後期後半の円墳が複数築造される群集墳がある。これらは祖先に対する系譜意識が示されたものと考えられ(菱田 2012b)、「村の墓地」型の群集墳と捉えることができる(菱田 2013)。さらにこれらは中期から後期前半にみられた集落近傍の埋没古墳群と同じ性格をもつものと理解することが可能であろう。

安威古墳群や塚原古墳群は後期後半から本格的に築造が開始されるが、後期後半段階の集落の様相については、終末期に比べてなお不明な点が多い。現状では、総持寺遺跡や太田遺跡などの建物遺構の確認されている遺跡や、建物遺構は確認されていないものの当該期の遺物は確認できる耳原遺跡、五日市東遺跡など、離れて存在する安威川流域の集落を造営母体として想定しておきたい。

安威城跡古墳時代居住域の歴史的評価 第2節で論じたとおり、『日本書紀』安閑元年条に記される 竹村屯倉については、その範囲に議論があるとしても、本遺跡周辺の安威川左右岸が含まれることは首 肯される。それは、中期以降の安威川流域の開発地を起源とするものであるが、このような開発のあり 方は「屯倉型の開発」とよばれ、集落から離れた名山の山麓に大規模な集団墓地(群集墳)をもつこと がその特徴の1つとして指摘されており、塚原古墳群と安威川流域の開発が事例として挙げられている (菱田 2013)。また安威城跡の古墳時代居住域は、集落構造からは総持寺遺跡などの同時期の集落とは 様相が異なり、定住的な集落というより宿営的な居住が想定できることは上述したとおりである。

今回の調査地の東や南には、現在水田域が広がっている。安威川の河道位置が古墳時代も現在と同じとは限らないが、府道と安威川の間に広がるこの水田域には、6世紀後半までに可耕地化された水田が含まれる可能性が高い。

さらに安威川が平野部へ展開する地点に、一ノ井堰と五社井堰という井堰があり、安威川左右岸の灌漑水路へ用水を供給している(図 61)。この井堰は江戸時代には整備されていることが文献から知られるものの(茨木市教育委員会 1991)、古墳時代まで遡る考古学的な確証はない。しかし段丘裾の砂礫層に居住域を展開させる本遺跡や、同じ頃に台地上に集落域を形成する総持寺遺跡のあり方からすれば、このような灌漑施設の整備をこの頃に想定することも突飛な考えではなかろう。

なお周辺の群集墳の動向としては、安威古墳群、将軍塚古墳群の造営後に長ヶ淵古墳群、桑原西古墳群へと墓域が移動する。対岸の塚原古墳群においても6世紀代のD群、E群からB群をへて7世紀代になりA群に展開する(高槻市役所1973)。このように7世紀に入り集落の様相が変化するのと前後して墓域についても変化がみらることはきわめて興味深い。中臣藍連や中臣太田連などの古代氏族や古代寺院の動向を含め、さらなる具体的な様相の把握を今後の課題としたい。

いずれにせよ、安威城跡の居住域のあり方は、流域の水田経営に直接関わった人々が残した遺構とみるべきであろう。前節で触れた『日本書紀』安閑元年条の記事は、本遺跡の理解において極めて示唆的であり、これと合わせて考えると、本遺跡の居住域のあり方は、王権によって設置されたミヤケの実像を示す可能性があるものと考えられるのである。

注

1) 茨木市史 (茨木市 2012、2014)、高槻市史 (高槻市役所 1974、1977)、森田 2006、岡田 2014 を始め、調 査報告書、年報等を参考とした。紙幅の都合上、遂一挙げることはできなかったが、ご容赦願いたい。

引用·参考文献

網 伸也 2005「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』 No. 533 一瀬和夫 2006「まとめ」『安威遺跡・安威城跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 伊野近富 1995 「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 茨木市教育委員会 1991 『わがまち茨木-水利編-』 茨木市教育委員会 1997 『平成8年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2000 『平成11年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2003 『平成14年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2005 『平成16年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2011 『平成22年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会 2012 『平成23年度発掘調査概報』 茨木市 2012 『新修茨木市史』第一巻 通史 I 茨木市 2014 『新修 茨木市史』第七巻 史料編 考古 大阪府教育委員会 2000 『安威遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-6 大阪府教育委員会 2003 『福井遺跡』 大阪府埋蔵文化財調査報告 2002-5 大阪府教育委員会 2004 『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』6 大阪府教育委員会 2005a 『総持寺遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-2 大阪府教育委員会 2005b 『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』 7 大阪府教育委員会 2006 『安威遺跡・安威城跡発掘調査概要 主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査』 大阪府教育委員会 2007a 『安威城跡―主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う調査―』 大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-1 大阪府教育委員会 2007b 『総持寺遺跡Ⅱ』大阪府埋蔵文化財調査報告 2006-5 大阪府教育委員会 2010 『安威城跡・Ⅱ』 大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-8 岡田 賢 2014「摂津地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会 2014 年度拡大例会・シンポ ジウム資料集 奥井哲秀 2012 「弥生時代の茨木市域」『新修 茨木市史』第1巻 茨木市史編さん委員会 久馬一剛・八木久義訳監修 1989『土壌薄片記載ハンドブック』博友社 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年的研究-日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀-』京都編集工房 寒川旭ほか 1996 「有馬-高槻構造線断層系の活動履歴及び地下構造調査」『地質調査所研究資料集』No. 259 須永薫子・平山良二 2005 「浅間山噴火 (1783年) による埋没表層土の土壌構造に認められる埋没前の植生・土地利用の影響」 『筑 波実験植物園研報』24 高槻市役所 1973『高槻市史』第6巻考古編 高槻市役所 1977 『高槻市史』第1巻 高槻市教育委員会 1980 『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第13冊 高槻市教育委員会 1993 『新池』高槻市文化財調査報告書第17冊 高橋公一 1995 「嶋上郡衙跡北方の調査」『高槻市文化財年報 平成5年度』高槻市教育委員会 田代克己ほか編 1981 『日本城郭大系第12巻』 舘野和己 2004 「5 ヤマト王権の列島支配」『日本史講座』1 歴史学研究会・日本史研究会 富田卓見 2007 「総持寺遺跡で検出した古代掘立柱建物に関する一考察」『総持寺遺跡Ⅱ』大阪府教育委員会 中村 浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅱ』 大阪府文化財調査報告書第30輯 原口正三 1977 「考古学からみた原始・古代の高槻」『高槻市史』第1巻 高槻市役所 菱田哲郎 2012a 「太田茶臼山古墳と五世紀の茨木」『新修 茨木市史』第1巻 茨木市史編さん委員会 菱田哲郎 2012b 「横穴石室と六世紀の茨木」『新修 茨木市史』第1巻 茨木市史編さん委員会 菱田哲郎 2012c 「阿武山古墳と古墳時代の終焉」『新修 茨木市史』第1巻 茨木市史編さん委員会 菱田哲郎 2013 「7世紀における地域社会の変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 宮崎康雄 1995 「嶋上郡衙正倉域の調査」『高槻市文化財年報 平成5年度』高槻市教育委員会 宮崎康雄 2000 「淀川北岸の弥生集落―三島地域を中心に―」『みずほ』32 号 大和弥生文化の会 免山 篤 1955 「摂津安威の土壙遺跡」『古代学研究』12

森田克行 1993 「先史時代の三島 ―新池遺跡成立前史―」『新池』高槻市文化財調査報告第17冊

米田敏幸 1991 「土師器の編年1近畿」『古墳時代の研究』第6巻 雄山閣

森田克行 2006 『今城塚と三島古墳群』同成社

付表 出土遺物観察表 (1) 平成 23 年度調査区 (1)

No.	挿図 番号	図版 番号	遺構層位	種類	器種	法量口容	cm ※		色調	胎土	焼成	残存率	備考
1	10	20	006 溝	土師器	小皿	口径 9.8	器高 1.7	底径 その他	(内) 10YR7/3 にぶい黄橙(外) 10YR7/4 にぶい黄橙	密 1mm以下のチャート・長石・ 微細粒の無母わざかに含む。	良	60%	
2	10	20	006	土師器	小皿	9. 4	1.65		(断) 10YR7/3 にぶい黄橙(内) 10YR7/4 にぶい黄橙(外) 10YR7/3 にぶい黄橙	微細粒の雲母わずかに含む 密 1mm以下の長石・チャート・ 微細粒の雲母わずかに含む	良	60%	
	10	00	006	LACOD	.1	0.7	1.0		(断) 10YR7/3 にぶい黄橙(内) 10YR7/4 にぶい黄橙		ф	500/	
3	10	20	溝	土師器	小皿	9. 7	1.8		(外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) — (内) 10YR7/3 にぶい黄橙	母わずかに含む	良	50%	
4	10	20	006 溝	土師器	小皿	(9.8)	1.8		(外) 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄橙	密	良好	口縁部 25%	反転復元
5	10	20	006 溝	土師器	小皿	(9.8)	1.8		(内) 10YR7/3 にぶい黄橙(外) 10YR7/3 にぶい黄橙(断) 10YR7/3 にぶい黄橙	900	良好	口縁部 25%	反転復元
6	10	20	006 溝	土師器	小皿	(10.0)	1.9		(内) 10YR7/3 にぶい黄橙(外) 10YR7/3 にぶい黄橙(断) 10YR7/3 にぶい黄橙	密	良好	口縁部 10%	反転復元
7	13	21	002 竪穴状 遺構	須恵器	坏身	(13. 2)	4. 15		(内) N7/ 灰白 (外) N6/ 灰 (断) N6/ 灰	密 3mm 大の白色砂粒少量、1mm 以下の白色砂粒・金雲母少 し含む	良好	20%	反転復元 内面に粘: 付着
8	13	21	002 竪穴状 遺構	土師器	小型甕	(10.4)	残 8. 1		(内) 2.5YR6/3 にぶい黄 7.5YR6/6 橙 (外) 2.5YR6/3 にぶい黄 7.5YR6/6 橙	密 2mm以下の白色・灰色砂粒含 む	良	口縁部 50%	反転復元
9	13	21	002 竪穴状 遺構	土師器	小型甕	(11.7)	13. 5		(斯) 7.5YR6/6 橙 (内) 10YR4/2 灰黄褐 7.5YR5/4 にぶい褐 (外) 10YR4/1 褐灰 7.5YR5/4 にぶい褐 (斯) 10YR4/2 灰黄褐	密 2mm 以下の白色砂粒・4mm 大 の茶色小石粒わずかに含む	良	60%	一部 反転復元
10	13	21	002 竪穴状 遺構	土師器	小型甕		残 9.8	体部最大径 (13.0)	(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙 10YR7/3 にぶい黄橙 (断) 7.5YR6/6 橙	密	良好	体部 40%	反転復元 取上番号1
11	13	21	002 竪穴状 遺構	土師器	甕	(16. 0)	残 2.8		(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6 橙 (断) 5YR6/6 橙	密 白色微砂粒含む	良好	わずか	反転復元
12	13	21	002 竪穴状 遺構	土師器	甕	(16. 0)	口縁部体部残		(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6 橙 10YR6/4 にぶい黄橙 (断) 5YR6/6 橙	やや密 1~3mm程度の白色砂粒含む。 1~5mmの茶褐色小石多く含む	良好	_	反転復元 口縁部・ 部接合復
13	15	20	007 土坑	須恵器	坏身	(12. 8)	3. 6		(内) 7.5Y7/1 灰白 (外) 7.5Y6/1 灰 (斯) 7.5Y7/1 灰白	密 2mm 以下の白色・灰色砂粒わ ずかに含む	良	20%	反転復元
14	15	20	007 土坑	土師器	甕	13. 9	残 6. 5		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 10YR6/4 にぶい黄橙	密 2mm以下の白色・灰色・茶色 砂粒含む	良	口縁部 70%	
15	15	20	007 土坑	土師器	高坏坏部	(17. 0)	残 4.1		(内) 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙 (斯) 7.5YR7/6 橙	密	良好	口縁部 25%	反転復元
16	15	20	007 土坑	土師器	甕	(15. 0)	残 3.6		(內) 10YR6/2 灰黄褐 10YR4/1 褐灰 (外) 10YR6/2 灰黄褐	密	良好	わずか	反転復元 取上番号
17	16	20	001 焼土塊	土師器	把手		最大長最大馬		(断) 10YR6/2 灰黄褐 (内) 2.5YR6/6 橙 (外) 2.5YR6/6 橙	密	良好	把手 部分 100%	
18	16	20	落ち込み	須恵器	坏蓋	(15. 0)	残 2. 2		(断) 10YR6/4 にぶい黄橙 (内) N7/灰白 (外) N7/灰白・N6/灰	密	良好		反転復元
19	16	20	落ち込み	土師器	高坏脚部		残 2.7	底部径 (13.6)	(斯) N7/ 灰白 (内) 5YR6/6 橙 10YR5/3 にぶい黄橙 (外) 5YR6/6 橙 10YR5/3 にぶい黄橙 (外) 10YR5/3 にぶい黄橙 (斯) 2.5Y5/6 明赤褐	やや租 2mm以下の長石・チャート・ 雲母多く含む	良	底部 10%	反転復元
20	16	20	落ち込み	土師器	高坏坏部	(12. 6)	残 3.1		(内) 7.5YR6/6 橙 10YR7/4 にぶい黄橙 (外) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙 (断) 7.5YR7/6 橙	密 2mm 以下の長石・チャート・ クサリ礫多く含む	良	口縁部 10%	反転復元
21	20	20	011 ピット	土師器	甕	(16. 6)	残 4.2		(内) 2.5Y7/3 浅黄 (外) 2.5Y7/3 浅黄 (斯) 2.5Y5/3 黄褐	密 0.5mm以下の白色・灰色砂粒・ 金雲母含む	良	口縁部 15%	反転復元
22	20	20	011 ピット	土師器	底部		残 2.3	(4.0)	(内) 2.5Y6/3 にぶい黄 (外) 7.5YR6/6 橙 (断) 10YR6/6 明黄褐	密 クサリ礫含む	良	底部 60%	反転復元
23	20	20	012 ピット	須恵器	坏身	(13. 4)	4. 5		(內) N6/ 灰 (外) N5/ 灰 (斯) 2.5YR5/2 灰赤	密 3mm 大の白色砂粒少量、1mm 以下の白色砂粒含む	良好堅緻	35%	反転復元

付表 出土遺物観察表(2)

平成23年度調査区(2)

No.	挿図 番号	図版 番号	遺構層位	種類	器種	法量	cm ※ 器高	. ,		色調	胎土	焼成	残存率	備考
	田り	· 田 · 7	但以			口径	器局	底径	その他					
			013	韓式系	平底鉢		最大	長 3. 1		(内) 2.5YR6/6 橙	密 to to all all to be	₼ / ⊃	1 12 1	dore da
24	20	20	ピット	土器	?		最大	福 2.7			白色微砂粒含む	良好	わずか	抬 本
										(断) 7.5YR7/4 にぶい橙	ote			
25	20	20	015	十師器	甕	(11. 6)	残 3.8			(内) 7.5YR6/6 橙 (外) 7.5YR6/6 橙	密 白色・灰色微砂粒・クサリ	良好	口縁部	
25	20	20	ピット	工帥都	382	(11.6)	7文 3. 8				日巴・灰巴似砂和・クリリ 礫含む	及好	わずか	
										(内) N8/ 灰白	aks			
26	21	22	第Ⅲ層	須恵器	紘	(14. 6)	残 5.2			(外) N7/ 灰白	¹⁵ 2mm 以下の白色・灰色砂粒わ	良好	口縁部	反転復元
20	21	22		/具/心前	ypqx .	(14.0)	72, 3. 2			(断) N8/ 灰白	ずかに含む	堅緻	8%	X 和 及 儿
										(内) N7/ 灰白	練			
27	21	22	第Ⅲ層	須恵器	坏身	(14.4)	残 2.9			(外) N7/ 灰白	1mm 以下の白色・灰色砂粒わ	良好	口縁部	反転復元
"	21	""	371176	SECTEMBRIS	-12	(11.1)	72.0			(断) 5YR6/1 褐灰	ずかに含む	堅緻	10%	人和权儿
										(内) 10Y7/1 灰白	密			
28	21	22	第Ⅲ層	須恵器	坏身	(13, 0)	残 2.8			(外) 7.5Y7/1 灰白	- 3mm 以下の白色・灰色砂粒多	良好	口縁部	反転復元
			7,14 7,12	.>(,2,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,1,	,		/24 = 1 =			(断) 5YR5/1 褐灰	く含む	堅緻	10%	DC1-1222
										(内) 2.5Y7/1 灰白	密			
29	21	-	第Ⅲ層	須恵器	坏身	(12.4)	残 2.5			(外) 2.5Y7/1 灰白	0.5mm 以下の黒色・灰色砂粒	良	口縁部 10%	反転復元
										(断) 2.5Y8/1 灰白	少量含む		10 70	
										(内) 5YR6/6 橙	密			
30	21	22	第I層	土師器	魱	(32.0)	残 5.8			(外) 7.5YR6/4 にぶい黄橙	白色微砂粒・クサリ礫含む	良好	わずか	反転復元
										(断) 10YR8/1 灰白				
					ਹਰ 🐼		日上日	f 11 0		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙	密			
31	21	22	第Ⅲ層	土師器	羽釜		取 八カ 最 大幅	₹ 11.8 ≣ 8.0		(外) 5YR6/6 橙	1 ~ 2mm の白色砂粒含む	良好	_	
					20		70,710			(断) 5YR5/6 明赤褐				
					ែ		是十1	長 5.6		(内) 10YR6/4 にぶい黄橙	密			底部のみ
32	21	22	第Ⅲ層	土師器	底部		最大馬	反 5. 6 夏 1. 25		(外) 7.5YR7/6 橙		良好	わずか	残存
							-,,-			(断) 7.5YR7/6 橙				/2414
			l		鲻瓦		_			(内) 5YR6/6 橙	密			
33	21	22	第Ⅲ層	土師器	把手		最大	福 7.4		(外) 7.5YR6/6 橙	1 ~ 2mm の白色砂粒・クサリ 礫含む	良好	把手部分 ほぼ完形	
										(例) 1011(1/3 にかい異位			/	
l			第Ⅱ~	1 477 1111	高坏		anth -	底部径		(内) 5YR6/6 橙	やや粗		底部	
34	21	22	III層	土師器	脚部		残 3.0	(13. 6)		(外) 7.5YR5/6 明褐	3mm 以下の長石・チャート多 く含む	良	15%	反転復元
										(断) 2.5Y5/8 明赤褐	7 10 10			

平成24年度調査区(1)

No.	挿図	図版	遺構	種類	器種	法量	cm 💥	()は復	元値	色調	胎士	焼成	残存率	備考
INO.	番号	番号	層位	但规	右計里	口径	器高	底径	その他	三	加上	沙丘月久	双十年	湘石
35	28	23	006 落ち込 み	須恵器	坏身	(13. 5)	3. 6			(内) N7/ 灰白 (外) 5Y7/1 灰白·N5/ 灰 (断) 5Y7/1 灰白	密 1mm以下の白色砂粒・金雲母 ・少し含む	良好堅緻		反転復元
36	28	23	006 落ち込 み	土師器	甕	(19.0)	残 6.5			(内) 10YR6/3 にぶい黄橙(外) 10YR6/3 にぶい黄橙 2.5Y5/2 暗灰黄(断) 10YR8/4 浅黄橙	密 Imm 以下の白色砂粒・金雲母・ クサリ礫含む	良	口縁部 5%	反転復元
37	28	24	006 落ち込 み	土師器	小型甕	(12.8)	16. 3			(内) 10YR6/2 灰黄褐 10YR3/1 黒褐 (外) 5YR5/4 にぶい赤褐 10YR4/1 褐灰 (斯) 10YR5/3 にぶい黄褐	やや粗 2mm以下の白色・灰色砂粒・ クサリ礫含む	良好	30%	反転復元
38	28	23	006 落ち込 み	土師器	魱	22. 8	23. 5			(内) 5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐 (外) 5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐 (斯) 5YR6/6 橙 5YR5/6 明赤褐	密 2mm 以下の白色・灰色砂粒・ クサリ礫含む	良好		
39	28	23	006 落ち込 み	土師器	高坏 脚部		残 5.7			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 7.5YR7/6 橙 (断) 7.5YR7/6 橙	密 1mm 以下の白色砂粒・クサリ 礫含む	やや 不良		一部 移動実測
40	28	23	006 落ち込 み	土師器	高坏		残 6.9		基部径 2.75	(内) 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 7.5YR6/4 にぶい橙 (断) 7.5YR6/6 橙	密 1mm 以下の白色砂粒・金雲母 含む	良	基部~脚 部 30%程度	移動実測 反転復元
41	28	_	007 竃 壁体内	土師器	羽釜	(19.6)	残 9. 0			(内) 7.5YR6/4 にぶい橙(外) 5YR6/6 橙 10YR4/2 灰黄褐(断) 10YR6/4 にぶい黄橙	密 3mm 以下の白色砂粒・4mm 大 の茶色小石1個・クサリ礫 少し含む	良	口縁部 25%	反転復元
42	28	24	007 竃 壁体内	土師器	羽釜	(21.0)	残 14. 2			(内) 10YR5/3 にぶい黄褐(外) 7.5YR6/4 にぶい橙(断) 10YR4/2 灰黄褐	密 3mm 以下の白色・灰色砂粒含 む	良	口縁部 40%	反転復元
43	29	-	第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	(12. 6)	残 2.2			(内) N7/ 灰白 (外) N7/ 灰白 (断) N7/ 灰白	密	良好	わずか	反転復元
44	29	-	第Ⅲ層	須恵器	坏蓋	(13. 0)	残 2.5			(内) N7/ 灰白 (外) N7/ 灰白 (断) N8/ 灰白	密	良好	口縁部 6%	反転復元
45	29	-	第Ⅲ層	須恵器	坏身		残 3. 2		受部径 (15.8)	(内) N6/ 灰 (外) N6/ 灰 (断) 5RP6/1 紫灰	密	良好堅緻	10%	反転復元
46	29	24	第IV層	須恵器	坏蓋	(14. 0)	4. 25			(内) 7.5Y7/1 灰白 (外) 7.5Y7/1 灰白 (断) 7.5Y6/1 灰	密 2mm 以下の白色・灰色砂粒含 む	良	20%	反転復元
47	29	_	第IV層	須恵器	坏身		残 2.3		受部径 16.0	(内) N7/ 灰白 (外) N7/ 灰白 (断) N7/ 灰白	密	良好	わずか	反転復元

付表 出土遺物観察表 (3) 平成 24 年度調査区 (2)

	挿図	図版	遺構	64-402	DD 64	法量	cm 🔆	()は復	元値	<i>1</i> 2. ⊐⊞	W/s I.	late =45	r4-7	/±± :+*
0.	番号	番号	層位	種類	器種	口径	器高	底径	その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
							753			(内) N7/ 灰白	密		(-et pla, steps	
8	29	-	第IV層	須恵器	坏身	(15.0)	残 3.45			(外) 7.5Y7/1 灰白		良好	坏身部 約 20%	反転復元
							0. 10			(断) N7/ 灰白			/h J 20 /0	
							残			(内) 10Y7/1 灰白	密		□ 4¥ ₩	
9	29	-	第IV層	須恵器	坏身	(12.4)	(2.7)			(外) 10Y7/1 灰白	1 ~ 2mm 大の砂粒含む	良好	日径部わずか	反転復元
							(21.1)			(断) 10Y7/1 灰白			4- / //	
										(内) N7/ 灰白	密			
0	29	25	第IV層	須恵器	坏身	(15.4)	3.9			(外) N7/ 灰白	2mm 以下の白色砂粒含む	良好		反転復元
										(断) 2.5GY7/1 明オリーブ灰				
					÷+z n+n		70 kir			(内) 2.547/1 灰白	密			
1	29	-	第IV層	須恵器	高坏脚部		残 4.6			(外) 5Y6/1 灰		良好	わずか	反転復元
					His		1.0			(断) 5Y7/1 灰白				
T					市坛		725-		明日かかなマ	(内) 5¥6/2 灰オリーブ	密			
2	29	25	第IV層	須恵器	高坏 脚部	J	残 4.9		脚部径 (10.2)	(外) 5Y6/2 灰オリーブ		良好	わずか	反転復え
					나다다		7. 3		(10.2)	(断) 5Y7/1 灰白				
П							2543-			(内) 10YR7/4 にぶい橙	密		m 63. den	
3	29	25	第IV層	土師器	甕	(25.6)	残 6.7			(外) 10YR7/4 にぶい橙	lmm 以下の白色・灰色砂粒少	良	口縁部わずか	反転復え
_							0. 1	<u></u>		(断) 10YR6/6 明黄褐	し含む		429 134	
							and to			(内) 7.5YR6/6 橙	密			
4	29	-	第IV層	土師器	魱	(31.0)	残 (6.2)			(外) 10YR6/3 にぶい黄橙	1 ~ 2mm 大の白色砂粒含む	良好	わずか	反転復え
							(0.4)			(断) 10YR6/3 にぶい黄橙				
\dashv										(内) 2.5Y7/3 浅黄	密			
5	29	24	第IV層	土師器	鍋	(28.0)	残 16.3			(外) 10YR7/4 にぶい橙	2mm 以下の白色砂粒含む	良好	日縁部 90%	反転復元
	İ						10. 5			(断) 10YR7/4 にぶい橙			90 70	
										(内) 7.5YR7/4 にぶい橙	密			
6	29	-	第IV層	土師器	羽釜		残 3.4			(外) 7.5YR6/6 橙	1mm 大の白色・灰色砂粒含む	良	わずか	断面のみ
							3. 4			(断) 7.5YR7/6 橙				
\top										(内) 5YR6/6 橙	密			
7	29	-	第IV層	十師器	直口壺	(9.0)	残 (3.7)			(外) 7.5YR6/6 橙		良好	わずか	反転復元
						` ′	(3.7)			(断) 5YR6/6 橙 7.5YR6/6 橙				
寸										(内) 10YR6/4 にぶい黄橙	密			
8	29	-	第IV層	土師器	高坏 脚部		残		部	(外) 10YR6/4 にぶい黄橙		良好	わずか	
					がいかり		5. 6	基前1	径 2.6	(断) 10YR6/4 にぶい黄橙				
\forall								R±n	部	(内) 5YR6/6 橙	密			
9	29	25	第IV層	土師器	高坏		残		部 部径	(外) 7.5YR6/6 橙	クサリ礫含む。白色微砂粒	良好	わずか	
			.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,		'		(4. 1)		. 8	(断) 7.5YR7/4 にぶい橙	含む		" / "	
\dashv										(内) 7.5YR6/6 橙	密			
0	29	-	第IV層	土師器	高坏		残		部	(外) 7.5YR6/6 橙		良好	わずか	
			//·-·/	Tarrell Hill	脚部		4. 4	基部?	径 2.8	(断) 7.5YR6/6 橙			" / "	
+			古版吟							(内) 2.578/2 灰白	密			
1	29	_	南壁際サブト	須恵器	坏身	(13, 0)	残			(外) 5Y7/1 灰白 5Y6/1 灰		良好	口縁部	反転復元
-			レンチ	->->-	1 .1 %	(10.0)	3.0			(断) 2.5Y8/2 灰白		~~	約 13%	~ 10100
+			去 B&B**							(内) N5/ 灰	密			反転復元
2	29	25	南壁際サブト	須恵器	高坏 脚部		残	底径		(外) 7.5Y6/1 灰	ш	良好	わずか	
_	20	20	レンチ	CPR/IDATIO	脚部		6.3	(12.0)		(斯) 7.5Y4/1 灰		1521	127 11	三方透か
+									1	(内) 10YR6/4 にぶい黄橙	密		-	-
- 1	30	25	第IV層	石製品	紡錘車		最大帧	畐 3.5		(外) 101RO/4 にぶい異位 (外) 10YR7/4-6/4 にぶい橙		良好	ほぼ	
3					N/1 TH 142		最大四						完形	1

平成25年度調査区(1)

			造(1)		nn.es	法量	cm 🔆	() は復	元値	for their	7/ /	Lefe 15	and to the sales	
No.	挿図 番号	図版 番号	遺構 層位	種類	器種	口径	器高	底径	その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
64	38	26	013 落 ち込み	須恵器	坏身	12. 2	3. 5			(内) N7/灰白 (外) N7/灰白 (断) N7/灰白	密	良好	ほぼ 完形	
65	38	26	013 落 ち込み	須恵器	坏身	(14. 9)	残 3.8		受部径 (16.0)	(内) N7/ 灰白 (外) N7/ 灰白·N6/ 灰 (断) 5P5/1 紫灰	密	良好	わずか	反転復元
66	38	26	013 落 ち込み	須恵器	坏身		残 2.65		受部径 (14.0)	(内) N/7 灰白 (外) N/6 灰 (断) N/7 灰白	密	良好	口縁部分	反転復元
67	38	26	013 落 ち込み	須恵器	甕	(18. 4)	残 4.55			(内) 2.5Y8/2 灰白 (外) 2.5Y8/2 灰白 (断) 2.5Y8/1 灰白	密 2mm 以下の長石・チャートを 多く含む	やや 不良	5%以下	反転復元
68	41	27	016 土坑 (中層)	土師器	甕	18. 1	31. 1			(内) 10YR8/3 浅黄橙 7.5YR8/3 浅黄橙 10YRS/1 褐灰 (外) 7.5YR8/3 浅黄橙 10YRS/2 灰黄褐 5YR6/6 橙 (断) 10YR8/2 灰白	やや粗 3mm 以下のチャート・長石・ クサリ္を多く含む	良好	80%	
69	41	27	016 土坑 (中層)	土師器	甕	(13. 7)	残 18.3			(内) 7.5YR7/6 橙 7.5YR6/4 にぶい橙 (外) 10YR7/4 にぶい養橙 7.5YR 7/6 橙 (斯) 10YR 7/4 にぶい黄橙	粗 6mm 以下のチャート・長石・ 石英多く含む。1mm 以下のク サリ礫わずかに含む	良好	口縁部 80%	反転復元
70	41	27	016 土坑 (中層)	土師器	甕	18. 4	残 9.8			(内) 10YR6/3 にぶい黄橙 (外) 10YR6/3 にぶい黄橙 10YR4/1 褐灰 (断) 10YR6/3 にぶい黄橙	密 1~3mmの白色・褐灰色砂粒 多く含む。クサリ礫含む	良好	口縁部・ 頸部 80%	取上番号①

付表 出土遺物観察表 (4) 平成 25 年度調査区 (2)

ど 成	25 年月	医調査	区 (2))										
No.	挿図 番号	図版 番号	遺構層位	種類	器種	法量 口径	cm ※ 器高	()は復 底径	元値その他	色調	胎土	焼成	残存率	備考
71	41	27	016 土坑 (中層)	土師器	甕	(17. 2)	残 11.3	民任	CANIE	(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 10YR7/3 にぶい黄 7.5YR7/4 にぶい黄 (断) 10YR8/4 浅黄橙		良好	口縁部 20%	反転復元
72	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	甕	(15. 8)	残 (8.8)			(内) 5YR7/6~6/6 橙 (外) 5YR7/6~6/6 橙 7.5YR7/3~7/4 に (断) 10YR7/3~7/4 によいれ	い橙	良好	口縁 45%	反転復元
73	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	甕	(13. 6)	残 6.7			(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6 橙 (断) 7.5YR7/4 にぶい	密白色・茶色の微砂粒含む。	良好	口縁部分75%	反転復元
74	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	直口壺	9. 0	12. 4		頸部径 6.9	(内) 10YR8/4 浅黄橙 10YR7/3 にぶい黄 (外) 10YR6/3 にぶい黄 5YR7/6 橙 (断) 一		良好	ほぼ完形	
75	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	高坏	(14. 0)	12. 9	底径 9.4		(内) 7.5YR7/6 橙 10YR4/2 灰黄褐 (外) 7.5YR5/3 にぶい青 10YR6/3 にぶい黄 (断) 7.5YR7/4 にぶい	橙	良好		反転復元 粘土充填技 粘土充填技 法、坏部内 面スス付着
76	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	高坏杯部	12.8	残 5. 25			(内) 2.5YR6/8 橙 7.5YR4/3 褐 5YR6/6 橙 (外) 7.5YR5/4 にぶいれ 7.5YR6/4 にぶいれ (断) 2.5YR6/6 橙	密 5mm 以下の長石・チャート、 1mm 以下の雲母を少量含む 葛	良好		取上番号⑧
77	41	28	016 土坑 (中層)	土師器	高坏脚部		残 6. 6	底径 9.6	基部径 2.6	(内) 10YR7/4 にぶい黄 (外) 10YR7/4 にぶい黄 (外) 7.5YR 7/6 橙 (断) 10YR7/3 にぶい黄	橙 1~2mmの白色・茶色砂粒含む	良好	脚部 90%	取上番号⑥
78	41	29	016 土坑 (中層)	土師器	高坏 坏部	(21. 2)	残 5.8			(内) 10Y6/4 にぶい黄* (外) 10YR6/4 にぶい黄 10YR4/2 灰黄褐 (断) 10YR7/4 にぷい黄	褐	良好	口縁部分 約 20%	反転復元
79	41	29	016 土坑 (中層)	土師器	高坏坏部	(24.0)	残 7.6			(内) 7.5YR7/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (斯) 7.5YR7/6 橙	密	良好	口縁部分 25%	反転復元
80	41	29	016 土坑 (中層)	土師器	高坏脚部		残 8.5		基部 4.0	(内) 10YR7/3-4 にぶい黄 7.5YR7/4-6/4 にぶい (外) 7.5YR5/3-4 にぶい 10YR6/2 ~ 4/2 灰 10YR7/3-4 にぶい黄 7.5YR7/4-5/4 にぶ	い橙 2 ~ 3mm の砂粒多い ・掲 黄褐 岐橙 褐	良好	基部のみ 完存	部分反転
81	43	28	016 土坑 (上層)	須恵器	坏蓋	(15. 0)	残 4.15			(内) N6/ 灰・N7/ 灰自 (外) N6/ 灰・N7/ 灰自 (外) N6/ 灰・N7/ 灰自	自 粗 白 2~3mmの砂粒多い	良好	口縁 20 %	反転復元 へラ記号ー 部残る
82	43	28	016 土坑 (上層)	須恵器	坏身	(11.0)	残 4.85		受部径 (13.8)	(内) N7/ 灰白 (外) N7/ 灰白 (断) N7/ 灰白	密	良好	口縁 10 %未満	反転復元
83	43	28	016 土坑 (上層)	須恵器	坏身	(13.0)	残 3. 9		受部径 (16.0)	(内) N6/ 灰 (外) N6/ 灰 (断) N6/ 灰	密白色微砂粒含む	良好	わずか	反転復元
84	43	28	016 土坑 (上層)	須恵器	坏身		残 2.1		受部径 (15.6)	(内) 5Y7/1 灰白 (外) 5Y6/1 灰 (断) 5Y7/1灰白	密	良好	わずか	反転復元
85	43	28	016 土 (上 中層)	土師器	甕	(20.0)	残 7.2			(内) 10YR7/3 にぶい黄(外) 10YR7/3 にぶい黄(断) 10YR7/3 にぶい黄	橙 1~6mmの白色・灰色砂粒・	良好	口縁 部分 12.5%	反転復元
86	43	28	016 土坑 (上〜中 層)	土師器	羽釜		残 (6. 9)			10VR7/3-4 にぶい妻 (内) 7.5VR7/4-6/4 にぶい 5VR7/6-6/6 橙 10VR7/2-4 にぶい妻 (外) 7.5VR7/4-6/4 にぶい 5VR7/6-6/6 橙 10VR7/2-4 にぶい妻 (断) 7.5VR7/4-6/4 にぶい 5VR7/6-6/6 橙	い橙 2~3mmの砂粒多い。1cm弱の小石含む の小石含む が橙	良好	頸部 10% 鍔 5%	反転復元
87	43	28	016 土 坑 (上 中層)	土師器	羽釜		残 6.9		鍔下径 (22. 4)	(内) 5YR6/6 橙 (外) 5YR7/6 橙 (断) 7.5YR7/4 にぶいれ	密 白色微砂粒・灰褐色微砂粒・ クサリ礫含む	良好	口縁 部分 わずか	反転復元
88	43	29	016 土坑 (上~中 層)	土師器	羽釜		残 (3.8)			(内) 5YR6/6-8 橙 7.5YR6/6 橙 (外) 5YR6/6-8 橙 7.5YR6/6-8 橙 (斯) 5YR6/6-8 橙 7.5YR6/6-8 橙	粗 2 ~ 3mm の砂粒多い	良好	10%未満 の小破片	反転復元
89	43	29	016 土 坑(上~中層)	土師器	把手		残 (4.4)			(内) 7.5YR7/4-6/4 橙 (外) 7.5YR7/4-6/4 橙 (断) 10YR7/3-6/3 にぶい	やや粗 2 ~ 3mm の砂粒含む) 黄橙	良	把手のみ	
90	43	29	015 土坑	土師器	把手		最大月最大馬	₹ 5. 6 ₹ 2. 8		(内) -(外) 7.5YR7/3 にぶい地(断) 10YR7/3 にぶい黄		良好	把手部分 100%	

付表 出土遺物観察表(5)

平成25年度調査区(3)

1	区成	25 年月	度調査	区(3))											
1	No.				種類	器種		r				色調	胎土	焼成	残存率	備考
1 日 2 2 (1.1.1)		ш /	ш.7	/目 122			日住			その他	(4)	10YR5/2-4/2 灰黄褐	粗			- ±-/-
4 2 2 2 2 2 2 2 2 2								and b			(四)	10YR3/1 黒褐	2 ~ 3mm の砂粒多い			及転復元
1	91	43	29	土坑 (上~中	土師器				(21.0)		(外)			良好		
1				層)							(断)					
2 2 2 3 0 0 0 0 0 0 0 0 0																
1	92	42	28		鉄製品	刀剣類										
1				工机		圣?		取入幅	1. 9							
1								#1b			(内)					
1	93	47	27		土師器	甕	(18.4)				(外)			良好	5%以下	反転復元
## 47 27 015											(断)	10YR8/2 灰白				
1		45	0.5	015	/E-+-00	IT A.		残		受部径			密	÷ /2	500/	
1	94	47	21		須思奋	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1								良好	70%	尺 転復元
10	_			04.5				#1b		55 den /57			密		43	反転復元
10	95	47	27		須恵器	坏身	(13.0)			(15.6)	(外)	N7/~8/ 灰白		良好		ヘラ記号-
15 17 27 15 2 2 2 2 2 2 2 2 2													ote			部残る
1	96	47	27		須恵器	蹇	(17. 2)							良好	口縁部	反転復元
# 47 27 上版 上師書	, ,			土坑	3020	250	(1112)	9.0						223	40%	X 14 12 70
27 17 27 土坂 上師器 帝						一番口級		最大.	長 0 3							
18 47 27 115 146 156	97	47	27		土師器	壺		最大中	幅 7.1		(外)		白色微砂粒・クサリ礫含む	良好	わずか	
1				12.76		口稼部?		最大馬	早 1.85		(断)					
9 47 27 15 土地				015				难		其.如.汉			密			
9 47 27 015 上版器 羽金	98	47	27		上師器	高坏								良好	基部のみ	
9 47 27 15													やや粗			
1.4 1.5 1.	99	47	27		十師哭	羽釜				頸部内径		7.5YR6/6 橙	5mm 以下の長石・チャート、	良好	5%以下	反転復元
1	55	11	2'	土坑	7.1017-007	SICI SIE		4. 4		(15. 0)				区列	0 /0 8 1	
27 17 17 17 17 17 17 17													密			
1	100	47	27		須恵器	甕	(20.0)							不良	わずか	反転復元
10 49 26 011 落 14.8 14.8 4.4 (今) 7.577 以后 577 以后 677 以后 577 以后 677 以后 577 以后 677 以后 577 以				上が				2.1			(断)	2.5Y8/2 灰白				
10 10 10 10 10 10 10 10	101	40	0.0	011 落	海市吧	4-zr-thte	(15.0)	残							450/	
2 49 26 011 27 011	.01	49	26	ち込み	須思裔	小盃	(15.0)	3. 9					日巴・無巴の似砂紅呂む	及好	45%	汉
22				011 #									密			豆転海二
13 49 26 111 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18 18	102	49	26		須恵器	坏蓋	14.8	4. 4					1 ~ 4mm の黒色砂粒含む	良好	1	
49 26 011 常 27 28 28 28 29 28 3.7 28 29 28 3.7 28 29 28 3.7 28 3.7 28 3.7													els:			
10 10 10 10 10 10 10 10	103	49	26		須恵器	坏身	(13, 2)	4. 2						良好	80%	
49 26 011 答 5i之み 25 70% 25 7				り込み	7 11	,	, ,							, .	1	取上番号2
19 19 20 5 5 5 5 5 5 5 5 5		40		011 落	/= +- nn		(0.1.0)	残					密	÷ /2	口縁部分	反転復元
10 10 10 10 10 10 10 10	104	49	26		須思器	噩	(24. 0)							良好	70%	断し来早り
15 49 20 5込み 上師器 20 11.0 (所) 10788/3 浅鏡橙 次配 20 26 11.8 25込み 上師器 25込み 25しみ													密			以上田 7 2
10 18893 接換程 26 111 落 26 111 落 26 26 27 28 28 28 28 28 28 28	105	49	26	011 落	十師器	海	(9.3)	11.6			(外)			良	75%	一部反転往
10 10 10 10 10 10 10 10	-			り込み		2.0	(/						少量官む			元
15.4													密			
10 49 26 011 落 26 011 3 26 26 26 26 26 26 26	.06	49	26		十師器	蹇	13. 4	16. 0			(外)			良	80%	
26	_		-	り込み									少重古む		/-	
26													やや密			
10 10 10 10 10 10 10 10	.07	49	26	011 落 ち込み	土師器	甕	(22.0)	残 6,2			(外)	7.5YR7/3 にぶい橙		良好	口縁部分 20%	反転復元
26 011 落 方込み 土師器 東				/				_			(断)		elec			
10 49 26 011 落 大師器 羽釜 (20.2) 残 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次				011 液	, ,		/ ;	难			(内)		1 ~ 5mm の灰色・白色砂粒・	±		反転復元
10 49 26 011 落 上師器 羽釜 (20.2) 残 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次	108	49	26		土師器	甕	(26. 0)	4.7					小石含む	艮好		取 上悉县
10 49 26 011 落 大師器 羽釜 (20.2) 残 7.2 (32.2) 残 (5\text{VR7}/4 にぶい橙 (外) 10\text{VR8}/3 浅黄橙 水分 時次 時次 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日												_	0~ 0~40			シー田づ
26 011 落 上師器 羽釜 (20.2) 残 一											(内)					
10 49 26 011 落 大師器 羽釜 残 3.7 (23.6) (所) 5787/4 にぶい種 密 白色・灰色の砂粒含む。ク 良好 野部分 少し 取上番号 11 50 29 1~2 磁器 碗 (10.7) 残 (所) 2.5078/1 灰白 (所)	.09	49	26		土師器	羽釜	(20. 2)	残 7 9			(外)			良		
10 49 26 011 落 方込み 上師器 羽釜 現釜 現養 選問 選問 接 接 接 接 接 接 接 接 接				· シムグ				1.4	(32	2. 4/					30 /0	
10 49 26 011 落 大師器 羽釜 一									-				elst			
11 50 29 1~2 磁器 碗 (10.7) 残 (15.0) ζ (10	49	26	011 落	十師哭	羽拳		残						良好		反転復元
11 50 29 1~2 磁器 碗 (10.7) 残 2.4 (外) 2.56Y8/1 灰白 10B66/1 青灰 良 口縁部 6% 反転復元 12 50 29 2層 青磁 碗 (15.0) 残 (3.0) (内) 10Y6/2 オリーブ灰 (外) 密 良好 口縁部 5% 反転復元 13 50 29 2層 陶器 土瓶蓋 (8.2) 残 (2.1) (外) 2.5Y7/2 灰黄 皮 食 人 反転復元		10	20	ち込み	75000	.1130		3. 7	(23	3. 6)				~~	少し	取上番号4
11 50 29 層 (10.7) 2.4 10BG6/1 青灰 長 6% 6% 12 50 29 2 層 青磁 碗 (15.0) 残 (3.0) (内) 10Y6/2 オリーブ灰 (外) 10Y6/2 オリーブ灰 (外) 10Y6/2 オリーブ (内) 5Y6/2 灰オリーブ (内) 5Y6/2 (D) 5Y6/2													密			
12 50 29 2 2 2 2 2 2 3 50 29 2 2 2 2 3 50 29 2 2 2 3 50 29 2 2 3 50 29 2 3 50 29 2 5 5 5 5 5 5 5 5 5	111	50	29		磁器	碗	(10.7)				(外)			良		反転復元
12 50 29 2層 青磁 碗 (15.0) 残 (3.0) (5.0) 残 (3.0) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (7.0) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (7.0) (8.2) (7.0) (8.2) (7.0) (8.2) (7.0) (8.2) (8				卢				2.4			(断)				0,0	
12 50 29 2 2 2 2 2 2 2 3 6 6 6 6 6 7 7 7 7 7								7545					密		p 43. 4p	反転海子
(断) N7/ 灰白 (内) 5Y6/2 灰オリーブ 密 反転復元 (外) 2.5Y7/2 灰黄 良 ー 反転復元 (外) 2.5Y7/2 灰黄 良 ー 反転復元 (外) 2.5Y7/2 灰黄 良 ー 反転復元 (外) 2.5Y7/2 灰黄 しま (内) 5Y6/2 灰オリーブ (内) 5Y6/2	12	50	29	2層	青磁	碗	(15.0)							良好		以料/復元
13 50 29 2層 陶器 土瓶蓋 (8.2) (2.1) (外) 2.5Y7/2 灰黄 良 — ^{[又転復7}			-										siz			
	113	50	29	2層	陶器	十瓶蓋	(8, 2)						ш	良	_	反転復元
(断) 2.5Y7/1 灰白				_ / _	1.5 1111			(2. 1)						~		

付表 出土遺物観察表(6)

平成25年度調査区(4)

No.	挿図 番号	図版 番号	遺構 層位	種類	器種	法量 口径	cm ※ 器高	() は復 底径	元値その他		色調	胎土	焼成	残存率	備考
114	50	29	3層	陶器	割高台皿	口匠	残 (1. 25)	高台径 (4.0)	COM	(外)	2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1 灰白	密	良	高台部 25%	一部反転復元
115	-	29	4層	陶器	Ш		残 (2.1)			(内) (外)		密	良	_	断面のみ
116	50	_	4層	陶器	碗	_	残 (2.1)	高台径 (2.1)		(内)	(釉)7.5Y6/2 灰オリーブ (釉)7.5Y6/2 灰オリーブ 5Y8/1 灰白 (生地)7.5Y7/1灰白 7.5Y5/3 にぶい掲 N8/ 灰白	密	良	高台部ほぽ完形	反転復元 ちりめん高
117	50	29	4層	須恵器	坏身	(11.6)	残 3.55			(内) (外)	2.5Y7/1 灰白	密 2mm 以下の白色砂粒少量含む	良好	10%	反転復元
118	50	29	5層	須恵器	壺	(10.8)	残 5. 55			(外) (斯)	N7/ 灰白・N5/ 灰 N6/ 灰・N7/ 灰白 N8/ 灰白	密 1mm 以下の黒色・白色砂粒わずかに含む	良好	口縁部 10%	反転復元 取上④
119	50	29	6層	須恵器	坏蓋	(13. 6)	残 2.8			(内) (外) (斯)	N5/ 灰	やや粗 1mm 以下の黒色・灰色・白色 砂粒多く含む	良好	口縁部 10%	反転復元
120	50	29	6層	須恵器	坏蓋		残 3.3		体部最大 径 (14.0)	(外) (斯)	N7/ 灰白 N7/ 灰白 N8/ 灰白	密 1mm 以下の黒色・灰色・白色 砂粒含む	良好	体部 40%	反転復元
121	50	29	6層	須恵器	坏蓋 つまみ		残 1.6		つまみ径 2.9	(外) (断)	N6/ 灰 10Y6/1 灰 N6/ 灰	密 1mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	つまみ 90%	
122	50	29	6層	土師器	羽釜		残 (3.5)		鍔基部径 (20.8)	(外)	5YR7/4 にぶい橙 7.5YR7/4 にぶい橙 7.5YR5/3 にぶい褐 10YR8/3 浅黄橙	粗 2mm 以下の長石・チャート・ クサリ礫を多く含む	良	_	反転復元
123	51	30	8層	須恵器	坏蓋	(15. 0)	4. 4			(内) (外)	N6/ 灰 N7/灰白・5R5/1 赤灰 5R7/1 明赤灰	密 白色微砂粒および 4mm の小 石含む	良好	60%	反転復元
124	51	30	8層	須恵器	坏蓋	14. 2	3. 6			(外)	N7/ 灰白 N3/暗灰·N6/灰白 N8/灰白	やや粗 1mm 以下の黒色・白色砂粒多 く含む	良好	70%	一部反転復 元
125	51	30	8層	須恵器	坏身	(12. 0)	残 3.6				N7/ 灰白 N7/ 灰白 N7/ 灰白	密白色・灰色微砂粒含む	良好	40%	一部反転復 元
126	51	30	8層	須恵器	坏身	(13. 2)	残 4.0			(外) (斯)	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	密 1 ~ 2mm の白色・灰色砂粒含む	良好	45%	反転復元
127	51	30	8層	須恵器	坏身	(12.8)	残 4.5			(外) (斯)	N7/ 灰白 N6/ 灰 7.5Y8/1 灰白	密	良好	35%	反転復元
128	51	30	8層	須恵器	はそう		残 11.1		径 3. 4 大径 9. 2	(外)	ー 5Y8/1 灰白 10YR7/4 にぶい黄橙 5Y8/1 灰白 10YR7/4にぶい黄橙	密	良好	体部 100 %	一部反転復元
129	51	30	8層	土師器	小型甕	12. 2	12. 3	最大径	(28. 8)	(内) (外) (断)	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙 10YR7/3 にぶい黄橙 5YR6/6 橙 10YR7/3 にぶい黄橙	密 1 ~ 3mm の褐灰色砂粒および 白色微砂粒多く含む	良好	ほぼ完形	
130	51	30	8層	土師器	壺体部		残 6.15	底 (3.5)			2.5Y8/2 灰白 10YR7/4 にぶい黄橙	密 1mm 以下のチャート・雲母・ 長石少量含む	良	40%	反転復元
131	51	31	8層	須恵器	坏蓋	(16. 0)	残 3.8				5Y6/1 灰 5Y7/1 灰白 一	密	良好	口縁部 16%	反転復元
132	-	31	8層	須恵器	坏蓋	(13. 7)	残 2.3			(外) (斯)	N7/ 灰白 N5/ 灰 N7/ 灰白	密 2mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	口縁部8%	反転復元
133	-	31	8層	須恵器	坏身		残 (2.8)			(外) (斯)	N7/ 灰白	密 0.5mm 以下の黒色・白色砂粒 少量含む	良好	_	
134	-	31	8層	須恵器	坏身		残 (2.5)			(外) (斯)	N6/灰 N6/灰 N5/灰	密 1mm以下の白色・黒色砂粒少量含む	良好	_	
135	-	31	8層	須恵器	坏身		残 (2.7)			(外) (断)	7.5YR6/1 褐灰	密 0.5mm 以下の灰色・白色砂粒 少量含む	良好	_	
136	51	31	8層	須恵器	甕	(18.0)	残 (2. 2)			(外) (斯)	2.5YR5/2 灰赤 2.5YR4/2 灰赤 2.5YR5/2 灰赤	密 1mm 以下の白色砂粒少量含む	良好	口縁部 5%	反転復元
137	51	31	8層	土師器	甕	(13. 6)	残 4.4			(外)	7.5YR6/6 橙 10YR4/2 灰黄褐 10YR4/2 灰黄褐 7.5YR5/4 にぶい褐	密 1mm 以下の長石・チャート少 量含む	良	口縁部 10%	反転復元

付表 出土遺物観察表 (7) 平成 25 年度調査区 (5)

平成	25 年月	度調査	区 (5))												
No.	挿図 番号	図版 番号	遺構層位	種類	器種	法量 口径	cm ※ 器高	() は復 底径	元値その他		色調		胎土	焼成	残存率	備考
138	51	31	8層	土師器	瓵	(25. 6)	残 (6.5)	7.24 1.22		(外)	10YR8/4 浅黄柏 10YR8/4 浅黄柏 10YR8/4 浅黄柏	登	密 1mm 以下の長石・チャート・石英、 0.5mm 以下のクサリ礫少量含む	良	口縁部 20%	反転復元
139	-	31	8層	土師器	把手		最大± 最大輔 厚さ	≣ 4. 1			— 10YR8/3 浅黄橙 7.5YR6/6 橙	ets.iro	やや粗 2mm以下のチャート・長石・ クサリ礫多く含む	良	_	
140	51	31	8層	土師器	把手		最大! 最大! 厚さ	畐 6.4		(内)	10YR7/3 にぶいう 7.5YR8/3 浅黄		やや粗 2mm 以下のチャート・長石・ クサリ礫多く含む	良	ほぼ完形	
141	51	31	8層	土師器	移動式		残存高 残存幅 厚さ	13.9		(内)	ー 5YR6/6 橙・7.5Y 7.5Y5/4 にぶい		やや粗 3mm 以下の長石・チャート含 む	良	_	
142	51	31	8・9層	須恵器	坏蓋	(14. 0)	残 2.55			(外)	N6/灰白 N7/灰白 N7/灰白		密 2mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	口縁部 15%	反転復元
143	51	31	8・9 層	須恵器	坏蓋	(14. 7)	残 2.6			(外)	N7/ 灰白 7.5Y6/1 灰 7.5Y5/ 1 灰		密 1mm 以下の白色・黒色砂粒含 む	やや 不良	口縁部 15%	反転復元
144	52	31	10 層	須恵器	坏蓋	(13. 6)	残 2.7			(外)	N7/ 灰白 N7/ 灰白·N4/ 5YR6/1 褐灰	灰	密 1mm 以下の白色・黒色砂粒少量含む	良好	5%	反転復元
145	51	31	8・9 層	須恵器	坏身	(12. 8)	残 2. 2			(外) (断)	7.5Y8/1 灰白 7.5Y8/1 灰白 7.5Y8/1 灰白		密 2mm 以下の白色・灰色・茶色 砂粒含む	良好	口縁部 8%	反転復元
146	51	31	8·9 層	須恵器	坏身	(12. 4)	残 (2.0)			(外)	2.5Y8/2 灰白 N5/灰·2.5Y8/2 2.5Y8/1 灰白	2 灰白	密 1mm以下の長石・チャート・ クサリ礫少量含む	<i>やや</i> 不良	口縁部 5%	反転復元
147	51	31	8·9 層	須恵器	坏身	(15. 8)	残 4.5			(外)	N7/灰白 7.5Y6/1 灰 N7/灰白		密 2mm 以下の白色・灰色砂粒少量含む	良好	15%	反転復元
148	51	31	8層	須恵器	坏身	(13. 0)	残 3.0			(外) (断)	5Y5/1 灰 5Y7/1 灰白 5Y4/1 灰		密 1mm 以下の白色・灰色砂粒少量含む	良好	口縁部 10%	反転復元
149	51	31	8・9層	須恵器	甕	(25. 6)	残 (4.0)			(外)	N8/灰白 N7/灰白·N4/ N8/灰白	灰	密 2mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	口縁部 10%	反転復元
150	51	31	8·9 層	須恵器	鉢		残 (5.5)			(外)	N8/灰白 N7/灰白 N8/灰白		鑑 2mm 以下の黒色・灰色・白色 砂粒少量含む	良好	口縁部 付近5%	反転復元
151	51	31	8・9層	須恵器	鉢	(11.4)	残 (5. 6)			(外) (断)	N8/ 灰白 N7/ 灰白 N8/ 灰白		2mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	口縁部 10%	反転復元
152	51	31	8・9層	須恵器	鉢		残 (7.2)	残存体部 復元径		(外) (断)	N7/灰白 N8/灰白 10YR8/3 浅黄橙	• N5 / W	mm 以下の黒色・灰色・白色 砂粒少量含む 密	良好		反転復元
153	51	31	8・9層	土師器		(19. 6)	残 (5.5)			(外)	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/2 灰白 N7/ 灰白		四 3mm以下の石英・チャート・ 長石少量含む	良	口縁部 10%	反転復元
154	52	29	10 層	須恵器	坏蓋	(17. 8)	残 4.55			(外) (断)	N5/ 灰 N7/ 灰白 N7/ 灰白		m 1mm以下の白色・灰色砂粒少量含む	良好	口縁部 5%	反転復元
155	52	29	10 層	須恵器	坏蓋	(15. 6)	残 3. 2			(外) (断)	N6/灰 N7/灰白 7.5Y6/1 灰		Imm 以下の白色・黒色砂粒少量含む	良好	5%	反転復元
156	52	29	10 層	須恵器	坏身	(11. 4)	残 2.75			(外) (断)	N6/ 灰·N4/ N8/ 灰白 N7/ 灰白	灰	m 3mm 以下の白色砂粒少量含む 密	良好		反転復元
157	52	29	10 層	須恵器	坏身	(11.8)	残 2.7			(外) (断)	N7/ 灰白 N5/ 灰 N6/ 灰		1mm 以下の黒色・白色砂粒少量含む	良好	口縁部 5 %	反転復元
158	52	29	10 層	須恵器	坏身	(11. 4)	残 3.4			(外)	N5/ 灰 7.5YR3/1 黒褐 N8/ 灰白		の.5mm 以下の黒色・白色砂粒 わずかに含む 密	良好	口縁部 10%	反転復元
159	52	29	10 層	須恵器	坏身	(12. 0)	残 2.7			(外)	N7/ 灰白 N6/ 灰		0.5mm 以下の黒色・白色砂粒 わずかに含むやや粗	良好	口縁部 10%	反転復元
160	52	30	10 層	土師器	羽釜 鍔部		残 (2.75)	鍔最大径		(外) (断)	10YR8/3 浅黄橙 10YR8/3 浅黄柏 5YR7/6 橙		5mm 以下の石英・チャート多 く含む 粗	良	10%	反転復元
161	52	30	10 層	土師器	把手			最大長 最大幅 最大高	(9.1) 第 6.9	(外) (断)	5YR6/8 橙 7.5YR4/4 褐 7.5YR6/6 橙		4mm 以下の長石・石英・チャート多く含む 密	良	ほぼ完形	
162	52	-	10 層	土師器	二重口縁壺		残 3.25 残存最大	直(6 小	稜径 (16.0)	(外)	7. 5YR6/6 橙 7. 5YR7/6 橙		1mm 以下の長石・チャート、 0.5mm 以下の雲母を少量含む 密	良	_	反転復元
163	-	29	4層	石製品	砥石		残存最大 最大 厚さ	畐 5.1		(外)	2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/3 淡黄			_	_	

図 版



調査区西壁断面 (北東から)



調査区南壁断面 (北西から)



調査区東・南壁断面 (北東から)



調査区西壁断面地震断層(東南から)



調査区南壁断面地震断層(北から)



006落ち込み全景 (北から)



007竈断面 (西南から)



007竈床面 (北から)



第1面全景 (北西から)

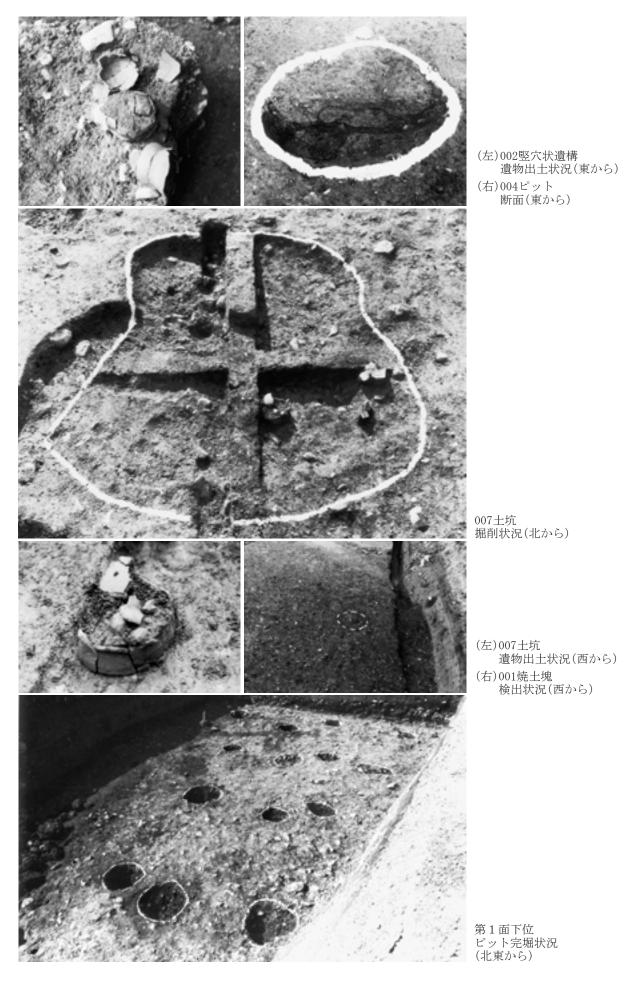


002竪穴状遺構全景 (北東から)



002竪穴状遺構竃 掘削状況 (北東から)

図版二 平成二三年度調査区(二) 古墳時代の遺構



構



鋤溝検出状況 (南から)



東南部段差検出状況 (北東から)



002溝断面 (北東から)



第2面全景(北から)



006落ち込み掘削状況・007竈検出状況(西北から)



007竈遺物出土状況(1) (北から)



007竈遺物出土状況(2) (北から)



007竈断面 (西から)



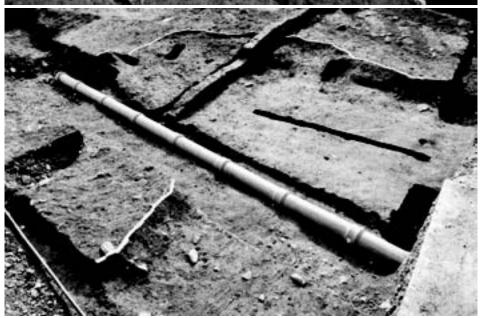
007竈床面検出出状況 (北から)



007竈床面掘削状況 (北から)



007竈完掘状況 (北東から)



006落ち込み完掘状況 (北東から)





調査区西壁断面(2)(南西から)



調査区西壁断面(3)(東から)



調査区東壁断面(1)(西から)



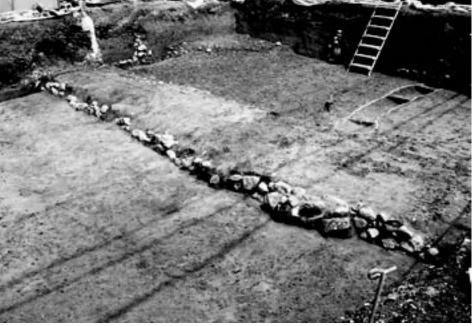
調査区東壁断面(2)(西から)



調査区東壁断面(3)(西から)



北区石垣1検出状況 (南東から)



北区石垣2検出状況 (南東から)



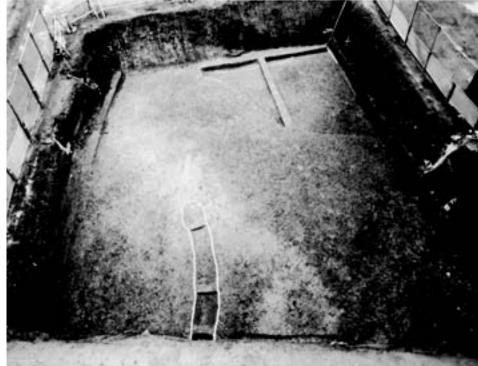
北区 石垣1除去後の状況(北東から)



北区 石垣1断面(東から)



北区石垣2断面 (西から)

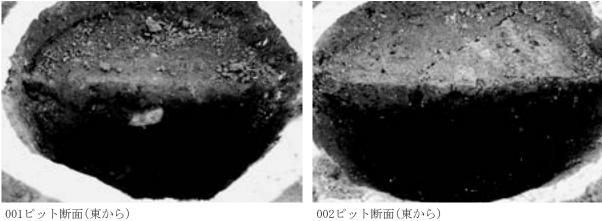


北区第2面全景 (北から)

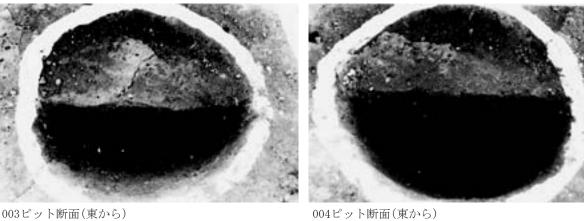


北区012溝掘削状況 (南東から)

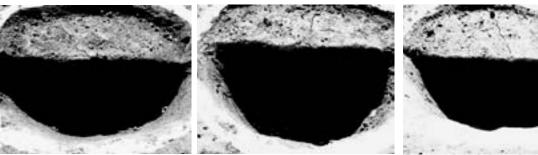




001ピット断面(東から)



003ピット断面(東から)

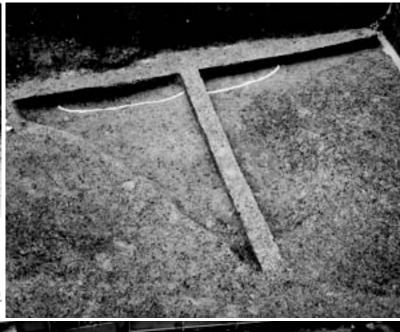


005ピット断面(東から)

006ピット断面(東から)

007ピット断面(東から)





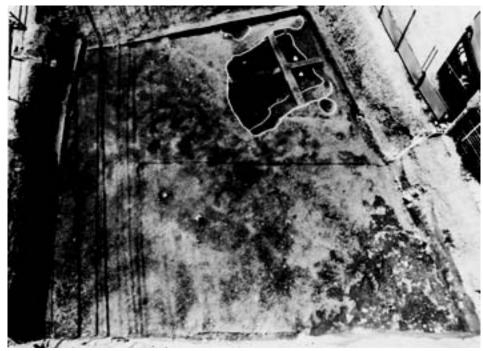
013落込み掘削状況 (北から)



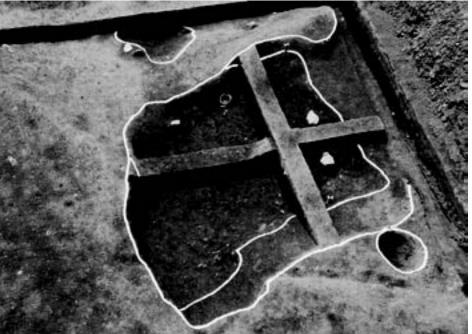
南区第3面全景 (北から)



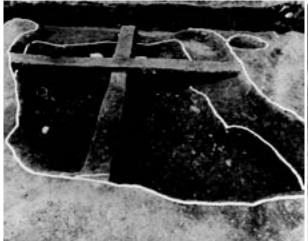
南区第3面全景 (北東から)



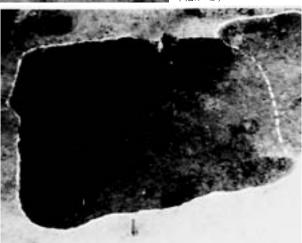
北区第3面全景 (北から)



015土坑・016土坑・ 017土坑掘削状況 (北から)



015土坑・016土坑・017土坑掘削状況(東から)

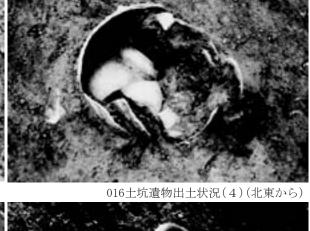


016土坑完堀状況(南から)





016土坑遺物出土状況(3)(南から)





016土坑遺物出土状況(5)(東から)



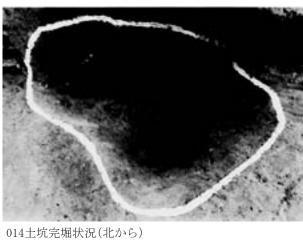
016土坑遺物出土状況(6)(北から)



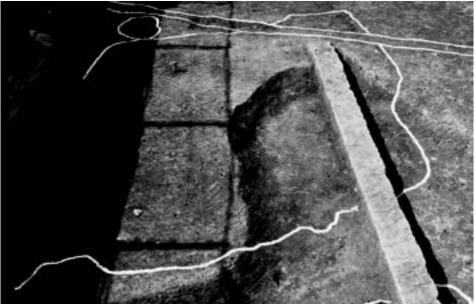
016土坑遺物出土状況(7)(北から)



016土坑遺物出土状況(8)(北から)



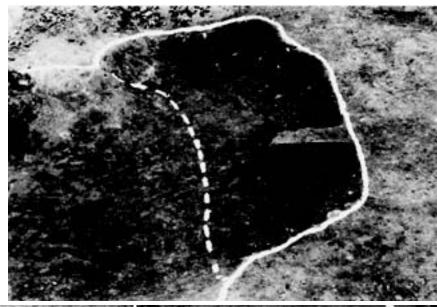
014土坑断面(北東から)



015土坑検出状況 (南から)



015土坑遺物出土状況 (東から)



017土坑完堀状況 (南から)



018土坑断面(東から)



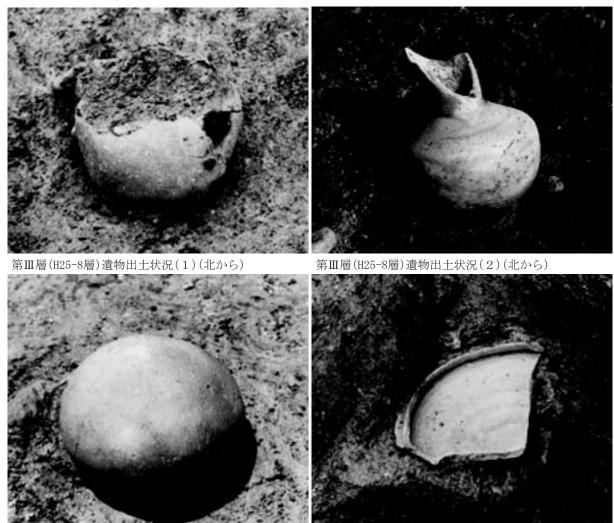
018土坑完堀状況(南から)



011落込み検出状況(南から)



011落込み遺物出土状況(南から)

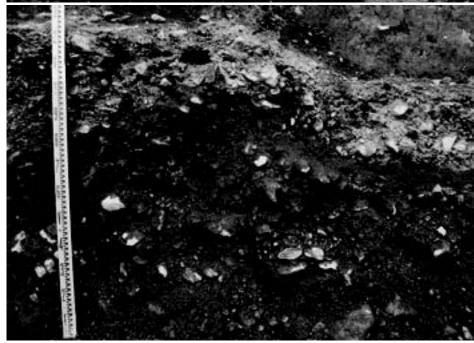


第Ⅲ層(H25-8層)遺物出土状況(3)(北から)

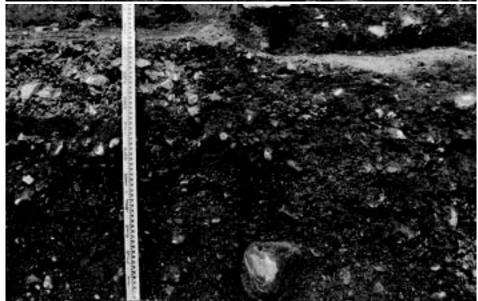
第Ⅲ層(H25-8層)遺物出土状況(4)(北から)



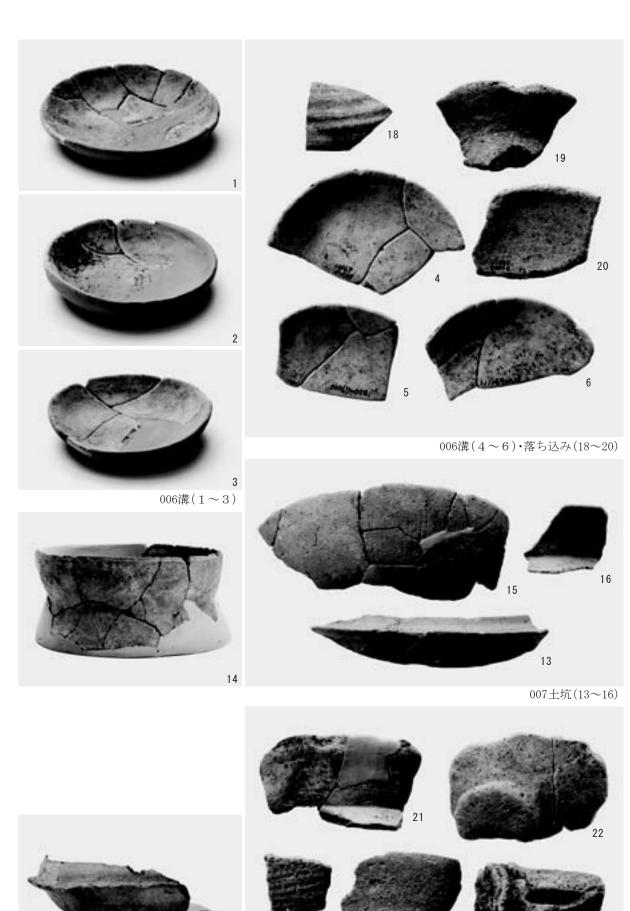
調査区北壁断面 (南から)



調査区北壁断面 段差部分拡大 (A・南から)

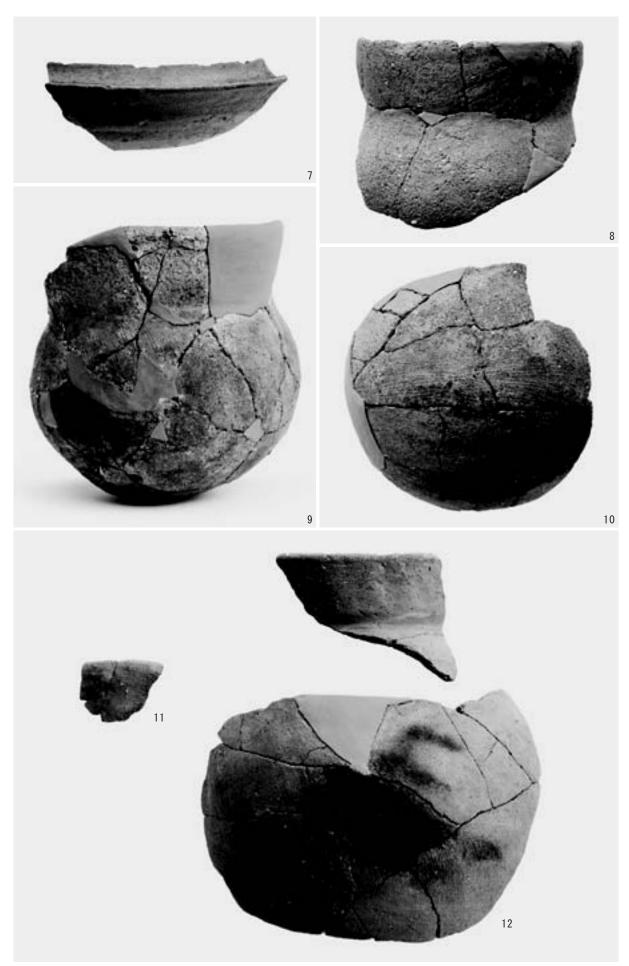


調査区北壁断面 段差部分拡大 (B・南から)



23





002竪穴状遺構



包含層(30:第 I 層、34:第 $\mathbb{I} \sim \mathbb{I} \mathbb{I}$ 層、26~28·31~33:第 $\mathbb{I} \mathbb{I}$ 層)



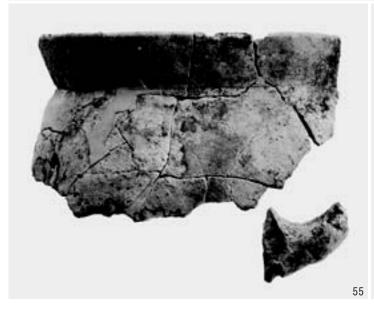
006落ち込み(1)



37 006落ち込み(2)



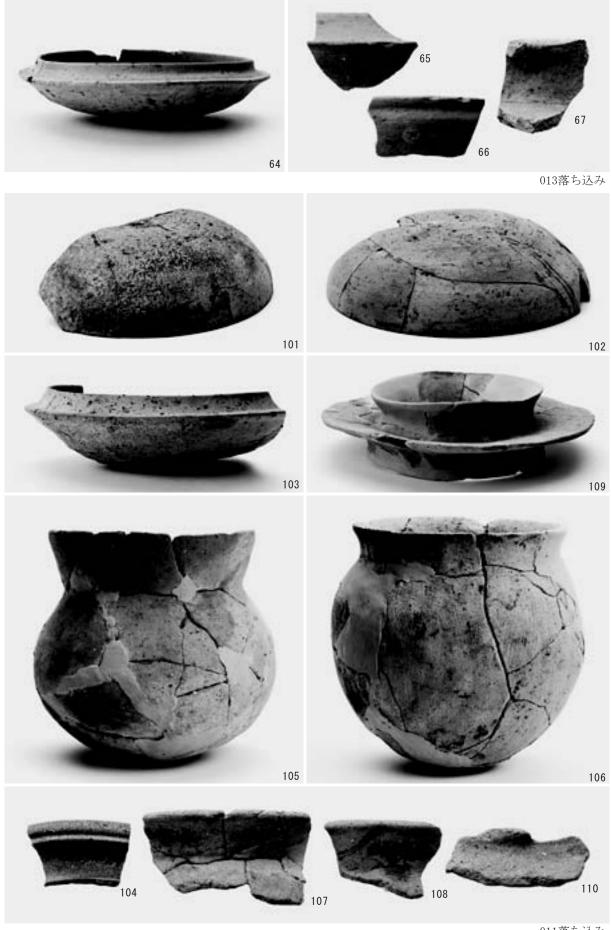
42 007竈壁体内



46

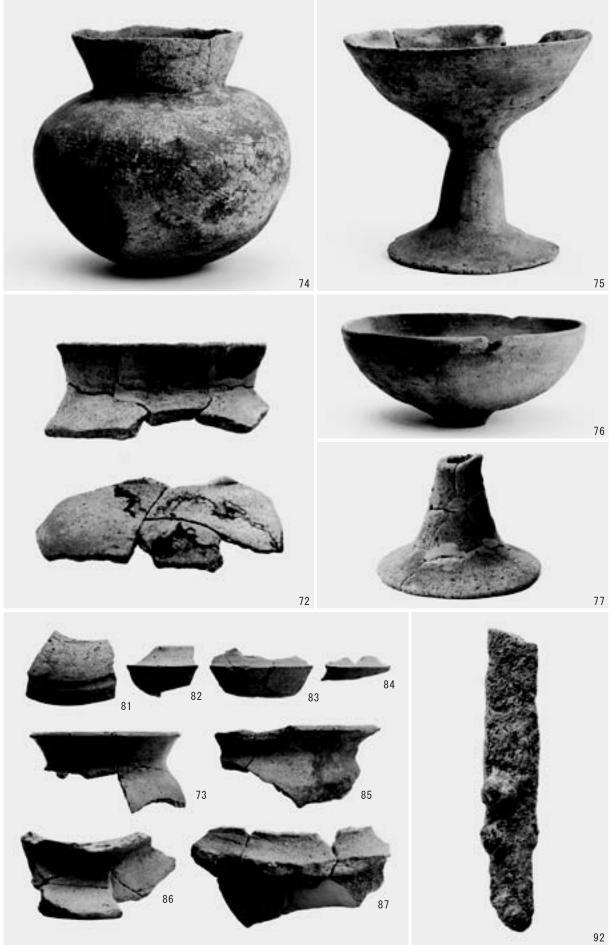
包含層等(1)(55:第IV層、46:第IV層)



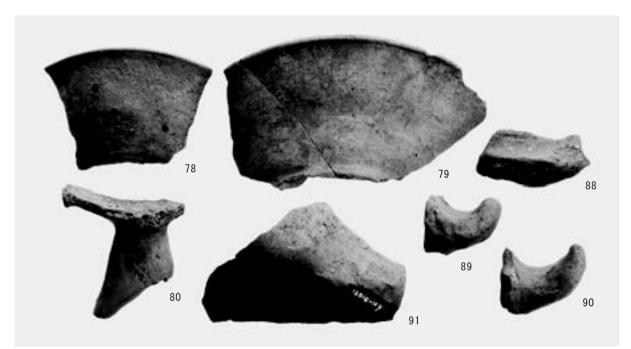


011落ち込み

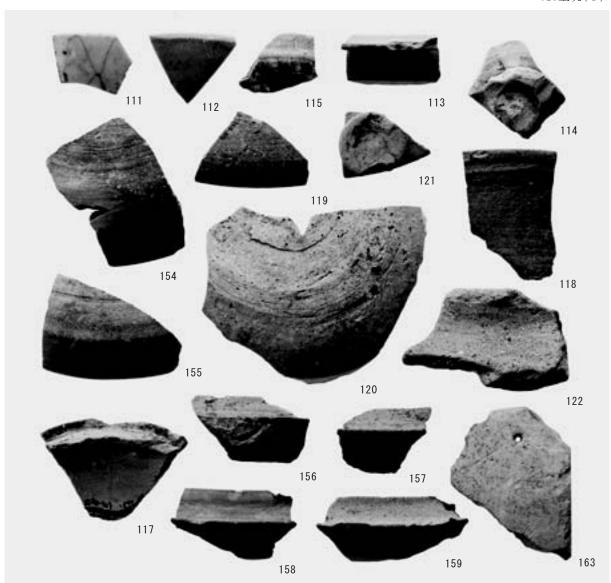




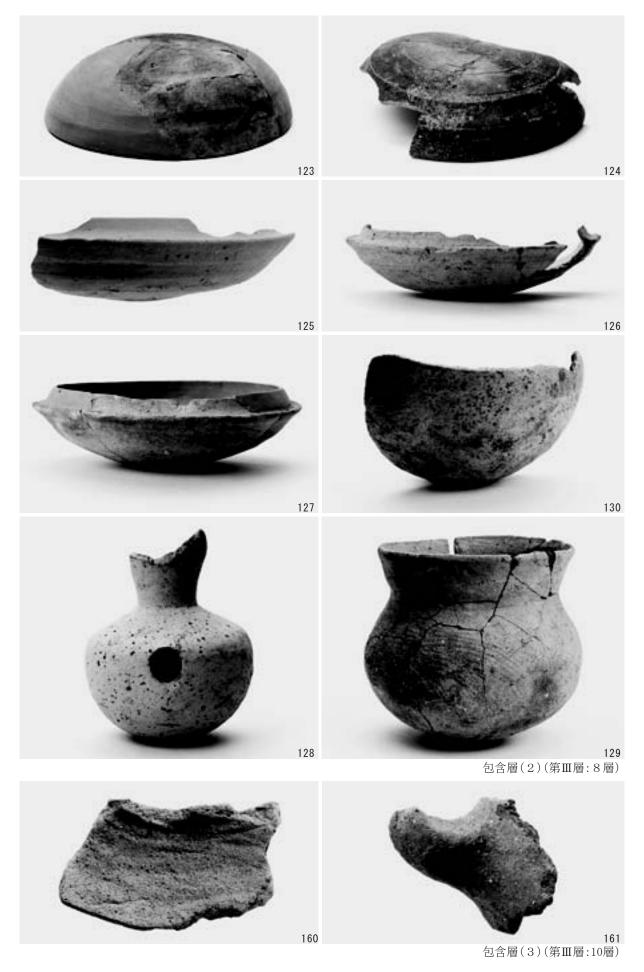
016土坑(2)

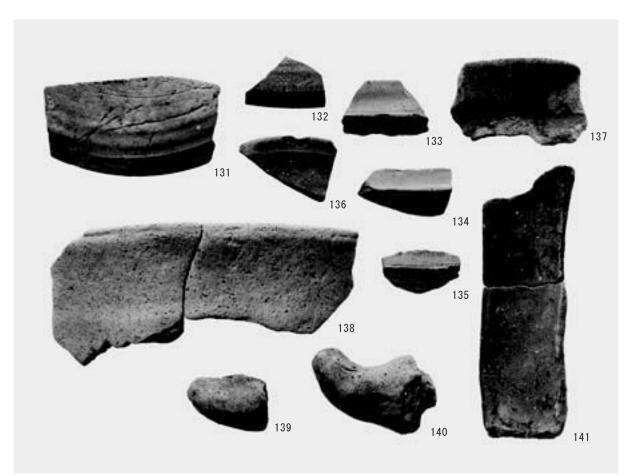


016土坑(3)

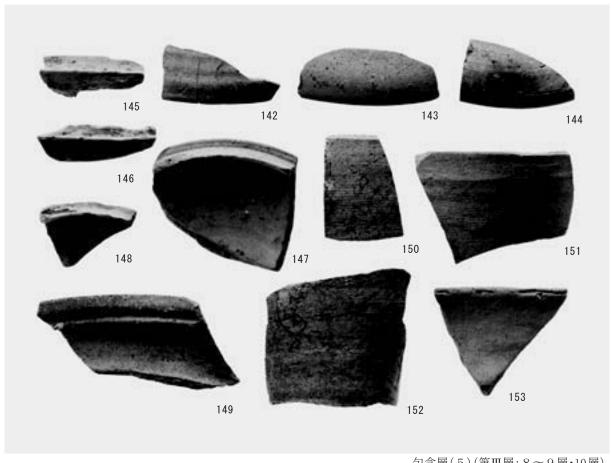


包含層(1)(第 I ~Ⅲ層:1~8·10層)·石製品





包含層(4)(第Ⅲ層:8層)



包含層(5)(第Ⅲ層:8~9層・10層)

報告書抄録

ふりがな		あいじょうあと さん								
書名		安威城跡Ⅲ								
副書名		主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う発掘調査								
シリーズ名		大阪府埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号		2014-4								
編著者名		岡田 賢、三好 玄、パリノ・サーヴェイ株式会社								
編集機関		大阪府教育委員会								
所在地		〒 540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351(代)								
発行年月日		2015年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名		。 ^{ふりがな} 所在地	コード 遺跡 番号		一北緯	東経 調査		期間	面積 (m²)	調査原因
あいじょうあと 安威城跡		isきしあいにちょうめ 木市安威二丁目	27221 65		34° 50′ 52″	135° 34′ 1″	34'		510	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項		
安威城跡	城館跡 集落跡	中世	溝		土師器					
		古墳時代	土坑・落ち込み・竃		須恵器・土師器・石 製品・鉄製品			屋外炉		
平成23~25年度に実施した安威城跡の発掘調査により中世の溝、古墳時代中期の土坑、同後期の土坑、落込みを検出した。平成24年度調査の落込みから検出された電は屋外炉の可能性がある。また平成25年度調査では古墳時代中期の土坑を検出し、土師器がまとまって出土した。さらに古墳時代後期後半に整地により平坦面が形成されている可能性が強く示唆された。本遺跡の南にある安威遺跡の集落とあわせて広範囲に展開する古墳時代集落の具体像が明らかになった。また調査区を横断するように検出された基盤層の段差は、有馬ー高槻構造線を構成する真上断層である可能性が考えられる。										

大阪府埋蔵文化財調査報告 2014-4 安 威 城 跡 Ⅲ

- 主要地方道茨木亀岡線道路整備工事に伴う発掘調査-

発 行 大阪府教育委員会 〒 540-8571 大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06 - 6941 - 0351 (代表)

発行日 平成27年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南二丁目6番8号